

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

ウイ

上
す
べ
り
の
国
際
化

逐次刊行物

昭和57年12月10日

日本家庭科教育会編

中央教育出版



1989

2・3

四季のうた



編みもの

きり絵と文 金子静枝

ふぞろいなひと目ひと目に編む人の想いが込められて、暖かなマフラーが仕上がります。

卷 頭 詩

夢 ・ 旅

やはり旅 駅のホームで列車を待っている 向かいの線に
先に列車がはいってくる すぐいいきおい 見ると 一両に
二匹ずつ 白い象が車体の下にはいつて車体をかぶつてい
る お客も乗った車体 なんて力持ちの象 象つたつて線路
でしょう と思つて足を見ると 線路を足で走っている
早いはず と思つたとき こっちの線にも来た こっちは
トロツコ アルバイトの女の人が手で押している だれも乗
ろうとしない わたしは乗った アルバイトの人はどこかで
見たことのある人みたい トロツコは駅を離れて うらうら
と小春日 線路はカーブしてその先は見えない その人は
あなたが早く行きたければいつしよに押さなくちゃ これで
たいへんなのよ という お客扱いの荒い乗り物だなあと
思つたけど 早く行きたいのは確かだから わたしもおりて押
す あたりは山 めいっぱいの黄葉紅葉 葉っぱがみんな木
からとびおりたくなつて 木から離れて 線路にもわたしに
もトロツコにも降りしきつて 葉っぱ吹雪 葉っぱは旅 わ
たしも吹ぶかれて 葉っぱをトロツコに乗せて 旅

羽 生 楨 子

新しい家庭科



特集 上すべりの“国際化”

インタビュー・大沢周子さん(インタビュアー 稲邑恭子)—————4

—自分を価値ある人間と感じられるような子に—

国際化とは ●柴田俊治 12

異文化間のコミュニケーション ●中津燎子 16

海外援助の行方—松井やよりさんに聞く— ●まとめ 稲邑恭子 20

発言

フィリピンからの「花嫁さん」 ●山崎ひろみ 26

労働鎖国の壁を越えて—アジアの出稼ぎ労働者たち— ●渡辺英俊 28

「国際人」にはほど遠い ●菅原幸助 30

中国への旅で見たもの ●東出文代 32

友だちのいないアジア人たち—日本人はアジア人?— ●田村昌史 34

黄さんとの出会いから ●中村英之 36

●学習の主人公たち————— 42

中国の高校で/張 曉燕 (チャン シャウイェン)

新しい家庭科を創るために

小学校では/低学年こそ、家庭科を! ●北川好美 44

中学校では/袋作り 根津公子 49

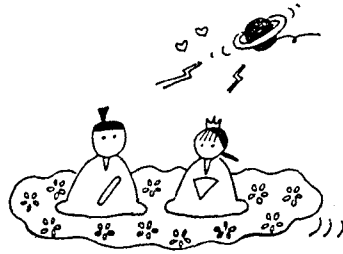
高等学校では/住まいと人権(2) ●浅井由利子 54

◆投稿 「私は絶対差別をしない」と言うことの危険性 ●李 由子 38

国際化と教科書 ●永島利明 39

“リクルート問題”に思う ●森 章二 40

教育に点数はいらない—評価をするのはだれのため? ●竹見智恵子 59



連載

巻頭詩/夢・旅	羽生楨子	1
海の輝く日/紙芝居創作	佐藤通雅	62
今、子どもたちの世界は/「娘と友だち」	塚越敏雄	64
経済の目/生徒の疑問に答え、共に経済を学んできた三年間	福島澄香	66
ダブル・ポケット/日常性の中の性差別主義	國信潤子	68
歴史の窓/朝鮮通信使	岡百合子	71
KNOW HOW 共学家庭科/共学家庭科への糸口 その3	湯沢静江	72
ワンポイント 近代日本女子教育史/女性生涯教育時代へ	秋枝蕭子	73
女、そして男/ある誤解の話	田川建三	74
不思議の国ニッポン/老人問題	クレイトン・ナフ	75
青春ZIGZAG/山に魅せられた滝本倫生さん	稲邑恭子	76
もうちょんば、がんばらいやー /チャーリーあとはよろしく	梶野良平	77
はなにつき/あんず 室生犀星	藤尾知子	78
よそおい	内山裕子	79
波/みんな一緒に成金踊り	半田たつ子	80

■'88 We秋のつどい「いまの子どもは『異星人』!」ーとらわれを外すー

を終えて

鈴木昭彦・森本邦子 82

○今月の読書から 25 ○わたくしからあなたにー“秋のつどい”に参加して版 86

○編集室からあなたに 88 ○Weの読者会だより 89 ○イキイキぐるうぶ 90

○泉 91 ○十字路 92 ○あてな 94

表紙デザイン/加藤由美子

目次・特集イラスト/ごじら・りょうこ

Interview

自分を

価値ある人間と

感じられるような子に

大沢周子さん

大沢周子（おおさわちかこ）さんにお会いしたのは、J R恵比寿駅近くの、「STEP勇気づけセンター」での講演会にて。自分の中の「なぜ？」にこだわり続けて、様々な人に出会い訊ねる中から、胸に落ちたことを一つひとつ自分の言葉で確かめながら語りかける大沢さんのお話は、胸の奥深く届いて響き、そのあとのインタビューで語られた「自己の確立が一番の課題」、ほんとうにその通りと思いました。

月刊『翻訳の世界』に連載された「Families on the Border」が『バイリンガル・ファミリー』として、近く、筑摩書房から刊行の予定です。



●インタビュー

稲邑恭子

一九三六年、前橋市生まれ。中央大学文学部卒業。婦人生活社で、教育・医学欄担当の編集記者として八年間勤務。退社後は、妊娠・出産・育児・教育に関する記事、主に婦人誌に執筆。七六年テレビ局特派員の夫と共にニューヨークへ。八二年に帰国後、わが子の体験を通して見えてきた日本社会の牢固とした閉鎖的精神状況を描いた『たったひとつの青い空』を出版。
『女性民教審』メンバー。

ドラマ『絆』の反響

——大沢さんの『たったひとつの青い空』（文藝春秋刊）が、NHKで『絆』という題でドラマ化され、一昨年、昨年と二回放映され、大変な反響を呼んだとうかがっています……。

大沢 そうですね。一昨年の十月放映したときは、百三十本の電話と手紙が寄せられました。そのうち、十％が反論でした。「こんなひどい状況があるとは思えない、脚本家はよく現実の中学を調べてから書くべきだ」云々の。テレビ局の人、脚本家も私も、中学を実際に回って、少年少女たちに取材してから製作したのですけれども。

あとの九十％は、同じようなことがあったとか、自分のまわりもそうだとか——涙ながらに訴えるお母さんや中学生たち。それと、年輩の方からの、「若い人がこういう状態だと、日本は将来どうなってしまうのか心配で」というのもありましたね。

——私、実は、あのドラマ、途中で、見ていられなくなってしまうって、全部きちんと見ていないのです。

大沢 そうね、映像というのは、非常にインパクトが強いのですからね。私が、あの本を書いたのは、自分の子どもがはじめられてこんなにかわいそう、と同情を乞うたわけでなく

いじめに走る多数派の子どもたちの内面の暗さを、異端排除のメカニズムを、究明してみたかったです。けれども、本というのは、なかなか読んでもらえませんか。ですから、ドラマ化されたことによって、日本は平和で豊か、と安心している人たちに、こういう実態があるのだと知ってもらえたことはよかったと思うの。

——大沢さんの『たったひとつの青い空』は、以前から、ずっと気になっていたながら、テーマの重さに、手にとるのを一日のばしにしていたところがあります。もっとセンサーショナルなものだと思い込んでいたのかもしれない。

大沢 「被害妄想の母親が書いたもの」って言われたり、『帰れば いじめが大変』と、大変だったんですよ（笑）。起こした」なんて言われて、大変だったんですよ（笑）。

——私も、以前、その「駐在員社会」の中にいたので、その閉鎖性や驕りがわかるから、なんとなく、「帰国子女」問題に冷淡なところがありました。なんていうのかしら、今の、教育過熱の層とびつたり重なるというか、親が高学歴で、父親不在で、母親は教育熱心で我が子のことしか見えない。でも、そういう親の側の問題と、子どもたちの問題とを、分けて考えなくてはいけなかったのに、そこまで思い至らなかった、と『たったひとつの青い空』を読み、思いました。

大沢 私は、息子の心の傷に手当てをしながら、どうして

こうなってしまったのか、こういうことは自分の子どものう
えだけにおこるのかと考えました。それで、たくさんの帰国
の子どもたちに会い、日本で育った子どもたちにも会い、学
校の先生方の胸の裡も訊ねました。それでも、いじめのメカ
ニズムは、十分に解明できない。そこで、民俗学者の文献を
調べたり、社会心理学者や精神科の医師にも会い、いろいろ
と考えました。それが、そのまま、『たったひとつの青い空』
を書く作業だったのです。

五項目の要求

——帰国されたときのこと、お話ししていただけますか。

大沢 ニューヨークには、'76年から'82年にかけて滞在しま
した。帰国当時、三人の子どもは、それぞれ、高三・高一・
小六でした。

六年生の息子の背中に、傘で突かれたらしい、いくつもの
あざ。「アメリカ人はアメリカへ帰れ」という匿名の手紙。
給食に鉛筆の削りカスをかけられて、お昼を食べずに帰り、
夕食を二倍食べる日が続く。担任に話に行くと、「みんな
で考えようね」という自主的解決方法をとりたいたので、一任
して下さいと言われました。彼女の言う解決法とは、学級の
みんなに、息子のいやなところを言わせ、どことどこを直せ

ば、みんなは「ムカツ」かなくなるかというものでした。出
てきた二十五項目のうち、「急には無理だから」と、とりあ
えず直してもらいたい次の五項目が示されました。

外来語を英語式に発音する／女言葉を使う／女にやさし
い／（子どもは風の子）といつて冬でも半ズボン着用の学
校なのに）長ズボンをはいてくる／すぐにカツとなり威嚇す
る。

半ズボンは、合うサイズがないので、あわてて、長ズボン
の裾を切り、外来語のリストも作りました。けれども、あと
はどうしろというのでしょうか。女言葉は、仕事で父親不在の
家庭の中で、母と姉に囲まれて育ったため。女にやさしいの
は、アメリカでは礼儀。カツと来るのは、よほど胸にこたえ
ることを言われたからでしょう。子どもに「ここは日本だか
ら」まわりに合わせなきゃならないと、教えてはいませんで
した。でも、みんなから「へんな子」という雨霰の攻撃さえ
受けなければ、彼は、時間さえかければ、自然に、まわりか
ら学んでいくと思うのです。

遂に、ストレス性の十二指腸潰瘍で病院へ。学校側と弁当
持参を許可してくれるよう話し合いましたが、「みんな一緒
に同じものを食べるのは、学校教育の一環」と拒否され、ク
ラス変えの要望も拒否され、万策尽きて、インターナシヨナ
ルスクールへの転校を決意しました。

たったひとつの青い空

——『たったひとつの青い空』という本の題名は、インターナショナルスクールでの素敵なエピソードからでした。

大沢 ええ。ある日、遊びに来る、子どもの友だちの名前と顔を一致させて覚えようと、息子に、友だちの国籍を訊ねました。すると、彼は「お母さん、学校ではナショナルリテイのこと、みんな気にしないんだ」と。体育の時間に、先生が、「ほーら、みんな、空を見上げてごらん。たったひとつの青い空だよ。どこの国の上にも、ひと続きで広がっているんだよ」と言った、と。

先生の言葉に、私は、「国境を越えて」の意味と、その子とその子として、地球の上ですくと立つ、個として立つ、その大切さを教えているのだ、と読み取ったのです。

異質なものの排除

——NHKの『おはようジャーナル』あるいは、雑誌の取材で、あちこちの学校をたずねたそうですが、いかがでしたか。

大沢 中国帰国者の子どもたちの通う学校に行くと、子どもたちの教科書の裏側に「くさい、のろま、ばいきん」と、

落書きがしてありました。帰国生の受け入れ校の子どもたちの教科書の裏には「でしゃばり、なきいき、めだちたがりや」と。少しでも、まわりと違う色やにおいを身につけた子は排除されてしまうのです。

帰国生が、三カ月、登校拒否をしていると聞いてでかけたある中学校では、「あの子は、自分の意見を、大発見のように練々と語りたくなってしまうのです。それで、クラス中から『ガクツ』の大合唱を受けました。なんでも、外国では、意見をのべよ、という教育を受けてきたらしいですね」と、にこやかに校長が語っていました。

「みんな一緒」の同質の多数派が「みんなと違う」異質の個を排除しているという事実、余りにも無頓着な、にこやかさでした。

自己を確立することのむずかしさ

大沢 心理学者の南博さんが、日本人の性格特性として、「人にどう思われるか」という、他人から見た自己像ばかり気にしていて、私はこれでいい、という肯定的な自己像が確立できないことを指摘していらつしゃいますが、自分の体験で、思いあたるものがあります。

ニューヨークにいた頃、日米半々位の割合の、婦人の集ま

りに加わっていました。月一回集まって講演を聞くのです。ところが、日本人の駐在員の妻たちは、私語が多くて、アメリカ人のグループから、「シーツ」と何回も注意されてしまふ。私語というのは、「ねえ、あの人、あんなこと言っているけど、どう思う？　ちがうわよねえ」という類いの、自分の思いを確認したくて、ささやくわけです。

帰国して、「帰国子女」の母親たちの集いに出たときも、同様でした。会議で何か決まっても、その夜のうちに電話が走り、「あのとき、私は、ほんとうはこう思ったのだけだ」と、決定事項が、何度もなくつがえされる、そのことは、徐々に、約束し合って直してきたのですが、異なつた意見を受け入れられないことと、その場できちんと発言できない。日本女性の決定的な弱点だと思います。

——ほんとうに、それで、身につまされます。それから、私語で思ひ出したのですが、帰国生の母親たちの感想の中で、日本の学校の授業中の私語の多さ、ざわめきに驚くというのがありました。

大沢 人と人とが、自己を主張し合う、ぶつかり合う、そして、それによつて生じる葛藤をどう解決してゆくか、その知恵を育てなければ、私たちの社会はいつまでも閉鎖的でしょうね、自我を抑圧すると、必ず歪んだかたちで他に向かう、それが陰湿ないじめになるのです。頭を下げ続けられ殴

り合いにはならない。でも、匿名性の陰でちくりと刺すことになるのです。

ナミへの指向

大沢 どうして、私たちが、こういう、閉鎖的な精神状態にいるのか、国民性だから仕方ないのだろうか、民俗学の文獻にも答えをたずねてみました。

民俗学者牧田茂氏の『人生の歴史』（河出書房新社）という本には、日本には、昔から「笑いの鞭」という教育法があった」ということが書かれてあります。人と違うことを言ったり、したりすれば、笑われること、そのことの恥ずかしい思いを忘れないで、二度とくり返さないように努めているうちに、村の立派な一員として成長していったというのです。

日本人の心理、意識の研究をしておられる、東京女子大学学長京極純一氏の解説によれば、この「笑いの鞭」が「ナミでないと評価された人々に対する嘲り、更にはイジメに変わっていったことがないとはいえないであろう」し、「ナミという評価をよい評価として受入れ、ナミでいることに満足し、大切にすること。こうした普通指向は、とくにムラの人々の秩序像ないし世間常識の中に強く定着していた」というのです。これはもちろん、「みんな一緒」が大切である農耕文化の、

生きる知恵でもあるのですが、この江戸時代の世間常識と、今と、どう変わったのでしょうか。

ニューヨークの精神科の医師、石塚幸雄先生という方に会いに行ってきました。企業での人間関係から心の病いになった駐在員をたくさん診ている。会社からは、即、帰国せよと指令が来るんですね。でも、もし、そのまま帰すと「あれは、ニューヨークでしくじってきた奴だ」と、会社の中で白い目で見られる。だから「ニューヨークで起きた病いは、ニューヨークで治す」と主張している方です。

夫婦で週一回のカウンセリングを受けるのですが、最初離れて坐っていた夫と妻が、心のうつ症状が回復するにつれ、手を握り合つてカウンセリングを受けるとなると、石塚先生は話されました。

彼によると、三本の脚があると、心の平安が得られるという。仕事の達成感と、夫と妻、親と子の間の親近感と、自己像の三つ。そのうち、日本人に、最も難しいのが、さつきも出てきた、自己像の確立だと私は思います。

気づきのエクササイズ

——その、自己像の確立についてですが、今からでも、その感覚を少しでも自分のものにしてゆくためには？

大沢 カトリックのシスター阿部光子さんから、「気づきの

エクササイズ」という方法を学びました。寝る前の十五分間、今日一日の過ぎ去ったことを思い出し、取りもどしてみる。いま、自分の中に起こった心の動き、感情が、喜びなのか悲しみなのか、おそれなのか、怒りなのかを探究します。次に、その感情を呼び起こした出来事をたぐりよせ、その出来事と自分の感情のつながりを深く深く味わうのです。自分を深く味わう訓練とでもいいましょうか。そうすると、自分と違う人のありようも見えてくる。他人が見えてくると、赦しの感情も出てきます。異質な人との共存は、こうしてできるようにするのではないかしら。

——子安美知子さんの『モモを読む』に出てくる、シュタイナーの「一日の回顧」と、とてもよく似ていますね。

自分で選び、決める体験を

大沢 岐阜の、ある知恵遅れの人の施設では、朝起きたとき、三色のソックスを枕元に並べておくそうです。自分で今日はくものをほかの誰でもない自分が選ぶ。その瞬間、みんなの目が輝くそうです。

私、そういうふうには、子どもたちの、日常の生活の中に、いくつもの選択肢が用意されていて、自分で考えて決められ

るようになっていいるかと思ひます。大人は「こうしなさい」と言うのではなく、「どれがいい？」つて聞く。

——ほんとうにそうですね。私も、英國で暮らしていたとき、やれ、コーヒーにするか、紅茶か、に始まり、遂一、意志決定を迫られるし、ユダヤ教をはじめ、イスラム、ヒンズー教ありで、食べもののタブーのみならず、クリスマスカード一つ出すにも神経を遣つて、つくづくめんどろうだと思ひました。でも、考へてみれば、子どもの頃から、それを重ねていくうちに、意思表示も難なくできるようになり、また、他人が自分と違ふ存在だなんて、当たり前のこととして、体たたく込まれるんですね。

大沢 アメリカの学校では、四歳から“Show and Tell”という時間があつて、自分の宝物を持つてきて、みんなに見せて説明するのです。「お前はどうか考へるのか」と、いつも問われて育つので、日本のように、マイクを向けられて「別に」とか「いいじゃん」ということにはなりません。

眞の国際化とは

大沢 私は、自分の本では、あえて、「幸せでなかつた」子どもたちのことを書きましたが、確かに、帰国して、「一流大学」に入り、うまく行つたと言われる子どもたちも、た

くさんいます。そういう方たちと、個人的に会つて話すことがあります。海外で過ごした何年間かは、自分にとって一体何だったのだろう」と思うことがあるのです。自分を殺せば、うまくいくのですが、そのために、折角海外で得たものを、削り落としてしまわなければならない。

いくら、「帰国子女は、日本の国際化の重要な人材源」と称へても、日本国内の子どもたちが、今のうちに、少しでも異質なものを引き出さずにはいられない状態である限り、「帰国したら、外国のことはきれいさっぱり忘れなさい」と親は言わなければならない。そして、国内の子どもと同一のモノサシで偏差値輪切りが行われる限り、「日本の受験向きの勉強」を考へ、海外の日本人学校は、ますますそれに向かつてひた走り、受験最前線化してしまふ。

教育の国際化とは、机の上の国際理解教育をすることでも、帰国子女の受入れ校を増やすことでもなく、日本で育つた子どもに、のびやかな心をとりもどすことから始めなくては。自分と異質なものを排除したくなる心理状況にある子どもたちこそ、まず解き放つてやらなければならないのです。

息子の通つていた小学校の校長先生が、いつも言つていた言葉が心に残つています。「自分を価値ある人間だと感じられるように」と。ほんとうに、子どもたちに、自分自身のことを好きになる、そういう育ち方をしてほしいと思ひます。

“国際化は 実に簡単なことなのだ”

大沢かおり

大沢さんの次女かおりさんは、上智大学文学部社会福祉学科三年に在学中。高一のとき帰国。病気になる長期入院のため、高校は中退し「大検」で受験資格を取って大学を受験。二年前、「月刊子ども」（クレヨンハウス発行）87年一月号に掲載されたかおりさんの文がとても印象に残ったので、ここに一部紹介させていただきます。

このごろ私は考える。
大人たちが「子どもの心に寄り添って」とか「子どもをよく見つめて」というけれど、そんなことはできるのだろうか。
十一歳くらいまでの子どもなら、先生や親が、その子の心の底まで下ってゆくことはできるかも知れない。でも十二歳以上なら、寄り添ってほしい、とは思っていないだろう。
それより、大人は自分が子どもだったころどうだったか、いつもそれを

思い出すことができればいいのだ。
たとえば週休二日制について新聞のアンケートの結果は、「大人というのは子どもが家にいると面倒なのよ」とブツクサ言っているようだ。「パートに出るのにお弁当を作らんくちやならないし」と言う。お弁当なんか作らなくていいのだ。子どもはお母さんが出かけた空っぽの家の中で友だちを呼んであげられまわる土曜日、何もしないで過ごす土曜日、部屋の模様がえをする土曜日、そんなステキな土曜日が日本の子どもたちにあっていると思う。ランチくらい誰だって作れるはず、お母さんが、「面倒だわ」と言いながら作ってくれなくていいのだ。
九月入学のこともできるだけ「変えない」という答えに向って大人たちは歩く。
子どものころの夏休みをちよつと思ひ出してみればわかることなのだ。宿題のでき上っていない夏休みの苦しさを。（中略）
九月入学なら六月に入試で、暑い七月、八月は自由に遊べる。大人たちは、子どもに自由時間を与えると、すぐに非行化すると考えるようだ。でもちよつと考えてみて欲しい。子どもだった時、自由に使える時間が欲しくなかったかと。（中略）

日本人は変えることがニガ手だ。変えることによるマイナス面ばかり言いたてる。プラス面に目を向けて、変える勇氣を持つべきだ。帰国子女の記事には必ず日本の国際化のことが書かれている。国際化というのは、そんなに難しいものだろうか。

私は土曜日、障害を持った子どもたちと一緒に遊んだり世話をしたりするサークル活動をしている。お星が終わるとみんなで公園へ行って遊ぶのだが、この間、いつもよだれが出ている○○ちゃんに向って、公園にいた健康な子が、「なんだ、からだが大きいくせによだれなんかたらしで。きたねえなあ、そばに寄るなよ」と言った。そういわれて○○ちゃんは悲しい目をした。○○ちゃんは、からだに不自由でも感受性はとても鋭いのだ。

その時、私は思った。国際化といっても、日本の国の中で人間を差別する言葉を子どもたちが平気で口にするようではダメだ。外国へ旅行することより、そして、外国人と話すことより大事なことは、まず日本の中で、自分と違う子どもをバカにしたり、差別したり絶対しない子どもを育てなければならぬ。
日本の子どもが、みんなそのように育っていけば、国際化は実に簡単なことなのだ。

国際化とは

帰国子女の問題というのがある。

親について海外で暮らした子どもたちが、帰国後、日本の学校で、言葉、学友、生活習慣などさまざまなギャップを抱えながら、どう適応していくかという問題である。

こうした子どもたちがどんな経験をしているか、一般に親たちには知られない。子どもは、親に知れると、すぐに先生に相談に行ったりして問題がますますこじれることを微妙に感じとって、親には言わないからだ。

私が、弟の経験だといって、ある姉さんから聞いた実例をひとつ紹介しよう。

学校（小学校高学年）からの帰り道、級友たちがスーパーへ寄ろうという。店にはいると、

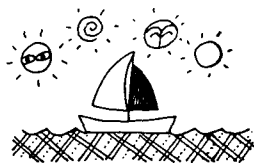
柴田 俊治

「お前、コカコーラを買ってみろ」

とすすめる。この子はアメリカから帰国した。発音は、「コツキヤ、コラ！」

となる。それを聞いて、級友たちは、わつとはやしたてる。これだけの話である。だが、私はこの話を聞いて困ってしまった。この子どもたちは、異文化を身につけた級友を差別することを、どこで覚えたのだろう。親や学校が教えているわけでもなからう。みんな一緒にいい、違うものは毛嫌いの心理が、日本の社会、学校生活を支配しているという一般論で説明するには、子どもたちの行動は過敏すぎる。異文化は排除しようとする原型のようなものが、私たち日本人の一人ひとりに生来的に備わっているのだろうか。

いまだにわからないままでいる。



さらに困ったことには、いま日本は「国際化」の大合唱である。この場合の国際化は、国際化をめざさねばならないという文脈で、いいイメージとして、到達目標として語られている。

国際化がいいイメージであることは、歴史がある程度は説明してくれる。

私たちは海外からいろいろなものを受けとってきた。

好例は漢字だろう。私たちは大陸から、こんなに便利で永もちする漢字を受けとったが、私たちにとって厄介な中国語の発音は遠慮した。漢字を日本語に組入れてしまったのだ。

明治以後の文明開化、近代工業化の時代には、欧米から科学技術の恩恵をはかり知れぬほど受け入れた。しかし、科学技術とともに押寄せ、他のアジア諸国の多くが経験した植民地支配は、幸いにして免れることができた。

敗戦後の米軍による占領は、それまでの日本民族の暴走ぶりと戦後の復興を考えると、問題を残したとはいえ、総合的にはプラスに働いた。

つまり、日本の歴史で、国際化は意識的に、あるいは幸運にも、いいものだけを取り入れ、都合の悪いものは排除されてきた。こうして、私たちにとって、国際化とはいいいメージのものである半面、日本人にとって都合のいいものだけをとり入れようとする身勝手なものになってしまったといえる

だろう。

帰国子女を「ごく自然に」いじめている日本人が、その一方で、国際化を「まじめに」声高に叫んでいるという姿には、これと同じ身勝手さを強く感じる。

今後の問題は、こうした身勝手さが徐々に許されなくなってきたことから生じる。

ソウル・オリンピックで、日本の柔道選手たちは、ほとんど金メダルをとれなかった。柔道界の指導者も選手も、競技の模様を伝えるアナウンサーも、いっせいに日本柔道陣の「総崩れ」を嘆き、再建策を論じた。

その姿勢は、日本の「国技」柔道が、世界に普及し、オリンピック種目に採用され、世界各国の選手たちが参加してくれるのは大歓迎だが、メダルをとるのは、いつも「本家」である日本の選手でなければならないというものだった。しかし、頭を冷やして考えてみればいい。いくら参加しても、勝つのはいつも日本選手であれば、世界の人々は柔道を真に愛好し、精進をつづけるだろうか。

日本の柔道陣がメダルを失ったことは、それだけ柔道という日本文化の国際化がすんだ証しとして喜ぶべきことなどではなかったか。（負ければいいというのではない。力を尽くして競技した結果がそうなければならないという意味である。）

国際化では、いままで持っていなかったものを手に入れるという面があると同時に、いままで持っていたものを譲るといふ面もある。前者は良いが、後者は困るというのでは、国際化は成立しない。

いまもち上がっている問題に、外国人労働者の受け入れがある。

基本的に言って、国際化した社会とは、ヒト、モノ、カネが自由に、多数、出入りする社会だろう。ヒトに関していえば、多くのヒトが海外に出かけていくと同時に、多くのヒトが入りこんで、その出入りのバランスがとれている社会だろう。

現在の日本は、海外に出る人が年間一千万人に迫ろうという勢いだ、入国はその一割程度で、いちじるしくバランスを欠いている。

これは自然の動きではなく、日本の出入国制度が外国人の入国を制限しているのが、大きな原因のひとつである。

いまの入国制度は、日本に滞在して就業が許される外国人（観光客などの一時入国者は別）は、その仕事は日本人では代替できないものに限っている。語学教師、外国料理コック、為替ディーラーなどだ。

「じゃばゆきさん」と呼ばれる風俗産業への参入者や、単純

労働に従事している外国人たちは、厳密には不法な滞在者である。

この人たちの数がふえつづけているのは、いわば自然の動きでもある。円高による日本の賃金の相対的な高さ、日本の若者が定着しながらない業種での労働力不足などが、外国人を呼び寄せてやまない。

だが、現状は、これが不法であるために、さまざまな問題をひき起こしている。社会・健康保険の適用を受けられない、悪質なあつせん業者が介在する、ひどい待遇にも泣き寝入りするほかない……等々。

こうした現状はいずれ放置できないから、外国人労働者の受入れを合法化せよという主張にたいして、かならず持ち出されるのは、西ドイツの例である。

西ドイツは、高度成長期に大量の外国人労働者を地中海諸国から受入れた。石油ショックによる不況になると、この存在がむしろ邪魔になった。レイオフ、帰国要請、拒否……と送出し国との外交問題にも発展した。現在は、定住してしまつた異民族の二世の時代にもなり、教育、社会福祉、人種差別と、ますます複雑な問題を抱えこむようになった。

ここで議論はわかれる。

——こういう複雑な問題は避けた方がいいから、受入れには

慎重な上にも慎重であるべきだ。

——こういう複雑な問題をできるだけ抱えないような措置をとるには慎重でなければならないが、受入れは避けられない。

私はいまの段階では、大いに議論をすべきだと考えている。

いまのまま何の措置もとらずに受入れれば、日本人と外国人で格差のある二重賃金、日本人のいやがるいわゆるダーティワークの外国人まかせ、劣悪な居住、生活条件からくる差別、ゲッター化、疎外……さまざまな問題が起こるのは目に見えている。

私たちは、七十万人の在日朝鮮・韓国人を、歴史的経緯があるとはいえ、私たちの側からともにこの社会を建設していくパートナーとしては遇し得ないまま、片方で国際化だと唱えてきた。

私たちは、いかにも未経験である。これに対して、西ドイツの例にみるように、諸外国のほとんどは、異国人、異文化といかに共存するかに、成功にせよ失敗にせよ、さんさん苦勞を積み重ねてきたし、いまでも苦勞している。

留学生に部屋を与えよ、と主張するのはやさしい。しかし、アジアの若者がよくやるように、一人に貸したと思っ

いたら、いつの間にか五人も六人もが折り重なるように住んでいたというような事態が発生したとき、家主にどんなに助言したらいいかは難しい。

多彩なエスニック料理が入ってきて、食卓がにぎやかになるのはいいが、それとともに、ピストルや大麻やエイズまで上陸するのを防ぐには、人も組織もカネも必要になる。

フランスから名画を盗んで売りこみにきた連中は、派手に現金輸送車も襲撃する。治安もいまのようにはいくまい。

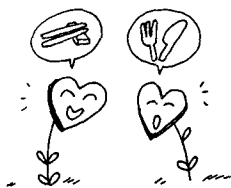
国際化のイメージが、だんだん悪く、暗くなってきたと感じるなら、それで自然なのである。

もちろん、海外旅行は大いに結構。異文化の勉強も、草の根の交流も貴重である。だが、国際化には、少し離れた距離から私たち自身を相対的に見る醒めた目が必要な気がする。国際化とは、これから避けられないものを素直に受け入れ、日本人ばかりの快適さをときには譲り渡してもいいとする度胸なのではないだろうか。

（しばた としはる・朝日放送報道局長）

異文化間のコミュニケーション

中津 燎子



何よりもまず、「異文化」という言葉の意味をできるだけ明快に理解しようと思う。本来、「文化」というものは、地球上のそれぞれの地域の、それぞれの民族集団が平均して持っている生き方、考え方、感じ方のパターンではないだろうか。そして一つの文化の中に育った人間が、ちがう地域のちがう民族の中に根づいた文化パターンをみた時、自分のパターンとくらべて、「異文化」という見方をする、というのがふつうなのであろう。

しかし、老いたる「帰国子女」の私もふくめて、幼児からの成長期を長く海外ですごした人間たちにとって、そのふつうのことがそんなに簡単にはいかないのである。海外で育つと、その地域風土の文化の影響を色濃く受ける。その目でみると母国文化こそ「異文化」となる。その上、母国の人々か

らは自分たちの持つ考え方や言動が「異文化」とみなされるという、ややこしい状況なのだ。

三歳から十二歳のはじめまで、あしかけ九年ソ連で成長した私が帰国したのは、昭和十二年の日中戦争はじまりの年だったから、ややこしさはもつとひどかった。当時、親もふくめて、周囲に「異文化」などというしやれた言葉を知っている者もなく、一般社会にもそんな発想や概念すらなかったのではないか、と思う。

「異文化」の概念がはつきりしない場合、人々は非常に素朴に自分たちの知っている文化パターンのみの世界がすべてとなる。だから、自分たちの知るパターンにあてはまらない言動の人間に対しては、文字通り、「異物」または「異端」扱いをしてできるだけ関わりをもたないようにしてよけて通る。

当時、アジアに対して、日本中心の八紘一宇精神を主張していた日本帝国はなやかなり時代だったから、いろいろと子ども心にもヘンに感じたことは多かったが、その頃から今もひきつづいて私がしつこくこだわっているのは、あれから半世紀、五十年たった今も、「異文化」という言葉の意味や概念についてあまり明快な理解がなされていないのではないかと思えるからだ。言葉だけは「異文化理解」、「異文化間コミュニケーション」等々、たくさんあるけれど。

最初のにべたように、「文化」とは人間の生き方のパターンであり、「異文化」とは、自分とは異なる生き方のパターンを持つ文化である。自分のパターンがよくて、他のパターンがよくないとか、優劣をつけたり、いばったり、卑下したりするものではない。無理矢理に、自・他の文化パターンを「同じだ、いっしょだ、似ている」などと言って同一化するのでもなく、「こうちがつては困る!」と言って拒否するものでもない。そして、何よりも、自分の生き方パターンと他の文化のパターンとのちがいを非常に明確に把握して、認めることが肝心なのではないだろうか。

下にあるリストを見ていただきたい。これは、もともと、地球上のすべての人々にあてはまると思ってたパターン比較のリストだが、ここでは、最もわかりやすいと思われる、日本とアメリカの人々の生き方や考え方の比較をしてみ

た。

もちろん、個人個人としてのキャラクターには千差万別の生き方パターンがあるのは、日本人もアメリカ人も同じだが、平均してみると、日・米の人々のパターンには、はっきりしたちがいがあ

たとえば、生き方の(1)、日本人は平均的に他と妥協する

●日本人の平均パターン (カッコ内はアメリカ側からみた日本)		●アメリカ人の平均パターン (カッコ内は日本側からみたアメリカ)	
生 き 方	1) 妥 協 (ごまかし) Compromising	1) 主 張 (なまいき) Self-assertive	
	2) 同 化 (いくじなし) Conforming	2) 対 立 (けんか) Confrontational	
	3) 順 応 (ずるい) Adapts to other culture(s)	3) 疑 問 (ごうまん) Questions other culture(s)	
	4) 自 プラス 他 (無責任) Self together with others	4) 自 対 他 (冷たい) Self and others	
言 語	1) 感性重視 Stresses affectivity (何が感性?)	1) 言語重視 Stresses verbalization (しゃべりすぎる)	
	2) 非音声重視 Not articulate (聞こえないのはぜ口)	2) 音声重視 Articulate (やかましすぎる)	
	3) 聞き流し Hears without listening (優柔不断または逃げる)	3) 確 認 Listens and confirms (うるさい)	
	4) か け 値 Non-specific (程度が全くわからず)	4) 実 態 Specific (くどい)	

ことをそれ程嫌わないし、時としてはその方がすぐれたやり方だと思うが、アメリカ人の多くは、妥協をきらい、それをごまかしだと思える人が多い。彼らは、とにかく妥協するより主張する。そして、あまりに主張する人間に対して日本人はなまいきだと感じるのと同じ位に、妥協ばかりする人間を、アメリカ人はごまかしているのではないかとふと思ってしまうことが多いのだ。リストの中に、カッコつきのひらがなで記入してあるのは、相手側からみて感じた印象である。

生き方の(2)の場合も、片方は同化することが結局は丸く収まり、本人も楽であるし、まわりも喜ぶのだが、もう片方は必ず、相手と対峙してむきあい、できるだけ自分を売りこむ。片方は相手を「けんかつ早い」と感じ、片方は同化することを意気地がないやり方だと思う。全く、日米共に相反する行動パターンであり、思考パターンである。

日本人はできるだけ他と順応し、他の喜びや悲しみを自分も共にわかちあうことが、人生の喜びであり、いいことであると考えてできる限りそういう方向に努力するけれど、アメリカ人側は、まず順応する前に、そうしなければならぬ理由を探さなければその気になれない。そして、疑問点を説明して納得した上でないと、順応はできないのである。自分と他は、常に、独立した個と個の世界を独自に持っているの、その世界が境界線なしでとけあう、などということはあり得

ない。必ず一定の距離がある。

こんなふうに、ちがう文化パターンには当然、ちがう形の言語や、その伝達方法が生まれるし、そもそも、言語そのものについての概念からちがっているのである。

個と個、自分と他人との距離があると、言語は大変に重要な伝達手段であり、武器であるけれど、日本語の世界では、言葉そのものより、むしろ感性が重要な要素とされているのではないだろうか。自分と他が共にとけあって生きているから、言葉は時々じゃまになる。しかし、アメリカでは、絶対に言葉が存在しなければならぬ。なにしろ、自分と他の距離をこえて、相手の納得を得られるような言葉を探して、自分の意志なり感情を伝える。それも、T・P・Oに従った音声を伴っていないと、相手は受け入れない。だまっけてはわかってもらえないし、きこえるように言わないと、言葉の存在はゼロになってしまう。

だまっけていてもそれとなく察してくれる日本語の世界は、ほかにあまり例がないのではないかと思う。

感性というあまり明確化できないものが言語伝達の方法にとりいれられると、当然、人々の間で、くいちがいや誤解が生じるけれど、日本人同士の場合はあまりたいしたトラブルにはなりにくい。お互いがお互いの言うことを、そこはかとなく察しあったり、聞き流したり、かけ値をつけたりして、うなずきあうのが日本語の日常の姿だと思う。

それにくらべると全くの逆方向の極致の姿がアメリカ人の言語世界であらう。まず、一に言葉ありき、ということである。二に、音声が必要なければならない。きこえなければ存在が認められにくい。三に、お互いの意図の確認に次ぐ念入りの確認が必要である。四に、できる限りの現状の実態をつかむ努力をし、あなたまかせのようなことはしない。

以上のようなことをくらべてみると、日本の学校での英語教育の成果があまりおもしろくないことが、時折話題になるのは、非常にあたりまえのことかもしれない。これだけ異なった文化パターンの産物である言語を学ぶ時、その差を詳細に知らないで、文法、語数や語順をどのように深く知りつくし記憶しつくしても間にあわないのではないかと思うのである。

英語教育だけではなく、外国人に対する日本語教育の場合も、この比較リストはかなり重要であらう。言語が人間の生きる場から生まれた以上、生き方のパターンの原型を、自らも他も共に知るべきである。もう少しこうしたことを教育の場でとりあげることが多くなれば、日本人の異文化理解のためになることはまちがいない。

アメリカと日本はかつて戦争をし、占領をしたりされたりした仲である。戦後四十年以上たった今、日米関係はすべての分野で深まるばかりで浅くなる気配はみえない。もちろん

お互いを知る度合も、昔にくらべればかなり深くはなっているように見える。しかし、ごく一般の日本人にとって、またはごくふつうのアメリカ人にとって、私のパターン比較リストの中の二点以上を相手について知っていると言うことができる人がどの位いるだろうか？　かなり少ないのではないかと思う。

日米の人々で相手の国に半年以上滞在していても、なかなか、自分とは異なる点をはっきりとつかむことはむづかしい。無意識の中に「自分と同じ点」を探し出し、なければ幻想の中でも「同じだ」と思いたがるからである。

アメリカ育ちの「帰国子女」たちは、そういう大人たちと違って帰国後に二つのパターンの違いから来る摩擦と衝突するわけだが、年齢が若いこともあって比較する程のゆとりもないから、どうしても、両親なり学校の先生たちが客観的にパターンの違いに気がつくことが大切ではないか、と考えている。

(なかつ りょうこ・未来塾主宰)

♡

♡

海外援助の行方

— 松井やよりさんに聞く —

「国際化」というと、日本では、欧米志向です。まず、隣人のアジアの人たちと、いい関係を作っていくことを考えていきたいですね。アジアの人たちと、私たちの暮らしが、どんなに密接に結びついているのか、見えないところで私たちを支えている人たちのことを、もっとよく知らなくてはと思います。

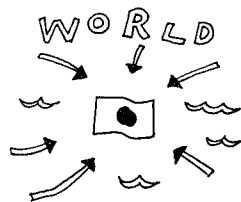
エビと熱帯雨林

最近、話題になっているエビ。今、日本は、世界最大のエビ輸入国です。主にアジアの国々から輸入しているわけですが、例えば、インドネシアの処理工場で、女の人たちが、一日二ドルぐらいの低賃金で働いていることとか、台湾の南の方へ行くと、そこいら一面がエビの養殖地になり、地下水を汲み上げすぎて地盤沈下をして、小学校が半分地下になっ

まとめ・稲邑 恭子

てしまっていることとか、私たちが知らないでいることが、たくさんあるのです。

熱帯雨林の問題もあります。熱帯雨林は、南米のアマゾン地域と、赤道アフリカと、東南アジアの三カ所にしかないのですが、「地球の肺」と呼ばれるくらい貴重な、酸素の供給源。地球上の、一千万種を越えるという生物の半分以上が生息し、いったん破壊されると、その修復に数百年かかります。それなのに、日本は、どんどん、それを伐採し、東南アジアの木材の半分以上を輸入している、世界一の熱帯木材輸入国です。コンクリートを生し込むためのパネルや、床などの建材用や家具に、惜しげもなく使っています。熱帯雨林には先住民が住んでいます、その生活をも破壊し、森の中の動物や魚やサゴヤシを採って平和に暮らしていた人たちが、



自分たちの生活の場を奪われてしまい、仕方なく伐採労働者になった息子が、事故で命を落とすといった悲惨な例が、あとを絶ちません。

86年秋、マレーシアのペナンでの「第三世界森林資源危機会議」に行ったのですが、「ジャパン、ジャパン」の連発。木材を輸入しているだけではなく、橋をかけて、ダムを作り、それで先住民たちが被害を受け滅亡の危機に瀕している。ヨーロッパでは、市民団体が、ずっと以前から、そのことに気づいて、キャンペーンをしていたのですが、一番責任のある当の日本人が、私も含めて、何も知らず何もしていなかったことに、恥ずかしい思いをしました。

それで、昨年秋に、ボルネオ島のサラワク州へ行ってきました。三十以上の先住民が住んでいて、森林伐採で困っているという話を聞いたからです。先住民の中でも最も原始的な移動生活を保持している、プナン族の人たちが、「もう、これ以上我慢できない」と、昨年三月から半年間、伐採道路を封鎖したり、絶望的な闘いを続けてきたのが、四十二名が逮捕されて、裁判にかけられるという。そこで、裁判予定日の十月三十日に、世界の二十カ国近くで、支援の共同行動を起こすことになったのです。日本では、熱帯林行動ネットワークの人たちが三十人余り、数寄屋橋で、小さなデモをし、ピラを配っただけ。しかも、半数以上が外国人。取材に来たの

も、外国の通信社、雑誌社がほとんどでした。道行く人も、外国人は丁寧な受け取って読んでいましたが、日本人は振り払うようにして通り過ぎる人が多かったのです。そういう状況を見ていて、私たち日本人はなぜ、熱帯雨林の問題をもっとよく知って行動しないのかと、つくづく感じました。」

日本の「海外援助」

今、海外援助のことが問題になっていますが、政府の海外経済援助（ODA）は、今年から米国を抜いて世界第一位になりました。国民一人当たり一百万千円にもなるのですが、それがどう使われるかが問題です。援助基本法もなく、関係の役所が、国民にも知らせずに巨額のお金を出している。アジアのどの国に対しても、日本政府の援助額は、たいてい一位ですが、民間の援助は、それに比べ非常に不活発です。

政府の援助がなぜ問題かというと、いわゆるヒモつき援助で、その援助のお金を使って、ダムを作ったり橋をかけたりまする工事を、日本の企業が請負うわけですから、百億ドル出しても、七割以上は日本に戻ってくる。援助先進国では、援助の中で「贈与」が多いが、日本の場合、「贈与」は非常に少なく、ほとんどは「円借款」で、企業利益のための援助だと、非常に評判が悪いのです。

今、途上国の人たちは「借金地獄」に苦しんでいます。フィリピンでは、二百八十億ドルもの借金を抱えて、先進国へ

の借金返しに予算の四割が使われていて経済の立て直しもできず、国内で働き口がなくて海外に出稼ぎに行かざるをえない。アジアの人たちにとって、この「借金地獄」の解決は重要な問題なのです。

昨年九月末に、西ベルリンで、世界銀行とIMF（国際通貨基金）の総会がありました。そこへ、八万人のヨーロッパ市民が押しかけ、世界銀行とIMFの融資が、貧しい人々をますます貧しくし、環境を破壊していると、抗議デモをしました。その前の、ワシントンの総会でも、米国の市民団体からの抗議行動がありました。一方、日本では、自国政府が世銀やIMFに、米国に次いで多額の資金を出しているのに、市民は何の行動もしないのです。

開発教育とは

今、世界の人口五十億の四分の三は、開発途上国の人たちです。八億が飢えの危険にさらされ、毎日四万人の子どもが亡くなっています。どうして、南の、開発途上国の人たちが、ますます貧しくなり、北の、先進国の人たちが、ますます豊かになり、格差が広がる一方なのか。ヨーロッパでは、70年代から、市民が、この「南北問題」に関心を持ち、「開発教育」を始めました。貧困の構造的理解をして、先進国にどう責任があるか、考えて行動するためです。

世界有数の海外援助団体（NGO）である英国の「OXF

AM」も、「開発教育」を重視し、その教材が事務所に山ほどあります。全国四十余の開発教育センターを開いて、学校でも地域でも活用されています。海外援助の監視活動も盛んで、「OXFAM」は、パンフを作ったり……。そのセンターの一つ、スコットランドの「SEAD」は、自国の多国籍企業が第三世界に進出して何をやっているかを調査。一例として、パングラディッシュの紅茶プランテーションの奴隷労働を告発しています。サッチャー政権の援助政策に抗議し、議会に二万人がデモをかけたというくらい、関心が高いのです。それにひきかえ、日本では「問い直そう援助。市民リーグ（REAL）」という団体がありますが、その集会に二百人も集まれば盛況といわれる状況です。

このような、南北問題に市民レベルで取り組む運動は、ヨーロッパでは、労働組合でも、消費者団体でも、女性団体でも盛んです。例えば、消費者団体は、南ア製品のボイコット運動をどこでもやっていて、西欧企業は南アからどんどん撤退しています。それなのに、日本では、南ア製品が今でも大つばらに売られていますし、遂に、南アの第一の貿易国になつてしまいました。

女性と開発

75年からの「国際婦人の十年」は、「平等・開発・平和」の三大目標を掲げていましたが、西欧の女性たちは、「女性

と開発」をキーワードに、第三世界の貧困に取り組む様々なネットワークを作っていますし、一般の女性団体も、開発や援助の問題に関心を寄せています。

スウェーデンでは、十一の女性団体が「開発問題女性評議会」を作って、SIDA（国際開発庁）の諮問機関として、自国政府のアフリカなどへの援助が、現地の女性にとってプラスになっているのかどうか点検しています。その調査報告をもとに、SIDAは「開発援助と女性行動計画」を制定しました。

デンマークでは、二十八団体が「KULU」（女性と開発）を結成して、政府の農村開発援助のプロジェクトの女性への影響の現地調査を行っています。

OECDには、定期的に途上国への援助を検討する「開発援助委員会」（DAC）があり、その中に「開発の中の女性（WID）専門委員会」が作られ、ほとんどの国は、女性の代表を送りこんでいるのですが、日本は、OECDの代表団のメンバー（男性）が出席し、会議に消極的・妨害的な発言をするというので、ヨーロッパの女性から、日本の女性団体あてに、日本政府への抗議・働きかけをするようにという手紙がきました。

民間レベルの援助活動を

ヨーロッパでは「最貧層に届く援助」は、草の根の活動を

しているNGOに任せたいほうが効果的と、政府開発援助資金をNGOに流す「官民共同援助方式」が行われています。それに比べると、日本の援助は「官高民低」の典型、NGOによる援助額は、先進十七カ国平均の十四分の一（'86年）にすぎません。

日本の、草の根の援助活動の力の無さを痛感したのは、'82年にカンボジアに行ったときです。ポルポト政権による虐殺後の、ゼロに等しい状況で、西側政府からの援助が無いときに復興を支援する民間援助団体の人たちが、若い女性も多かったのですが、世界各国から集まり、二つしかないホテルを拠点に、活動に飛び回っていました。その中に、同じアジアの経済大国なのに、日本人は一人もいませんでした。最貧国バングラディッシュでも、似たような状況でした。

ネグロス・キャンペーン

もちろん、日本の民間の援助活動の中にも、注目すべきものはあります。例えば、「ネグロス・キャンペーン」、これは'85年、ネグロス島のサトウキビ労働者が失業し、子どもたちが飢えて死んでゆく緊急事態となったので、市民の力で支援しよう、と、募金を始めたのです。一億何千万円も集まりましたが、民間援助として画期的だったことは、なぜ飢えるのか、構造をよく調べ、ネグロスの人々が自立するのを支援し、お金の使い方も見ていったのです。昨年三月に行ってみま

したら、サトウキビ労働者が農業技術を修得するための実験農場を作り、また、水牛^{ガウボ}が必要だということで、水牛を送るキヤンペーンにも取り組んでいました。

私たちにできること

もちろん、アジアの国々に出て行って何かするだけではなく、国内でもできることはたくさんあります。まず、私たちの暮らしを見直してみること。それも個人的なレベルにとどまらず、社会的な運動に広げてゆく。例えば、企業にデモをかけたり、政府に法律を作らせたり。熱帯雨林を破壊しないために、割り箸を使わない人は立派ですが、もう一步、企業や政府に働きかける社会的な行動にならないかなと思います。消費者団体も、もっと、自分の周り、自分の国のことだけではなく、第三世界にも是非目を向けてほしいと思う。それと、もう一つ、日本にいるアジアの人たちと共に生きることを考えてほしいですね。

学校の先生たちにはお願いしたいのは、開発教育は、どの科目でもできるということ。家庭科でも、暮らしの中で、どれほど第三世界の人とつながりがあるかということを考えることができますよね。昔は、生産者が国内にいたから、相手の顔が見えて苦勞もなかったけど、今は、紅茶を飲みながら、その向こうにあるスリランカのプランテーションで働く女性の苦しみや悲しみがわからない。地球が、相互依存の時代で

あることを、もっと意識していかないとだめですね。

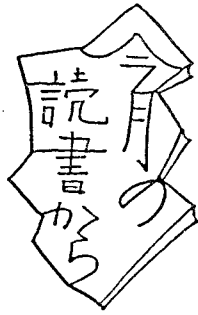
それから、「社会正義」などという言葉は、今、日本ではまともに使われないものになってしまったけれど、子どもたちがそれを大切に思えるように、そして、「社会正義」に反すること、例えば、貧しい人々や人権を侵害されている人々がいることに、怒りを感じられるようになってほしいと思います。そのような怒りさえ感じない「非人間化」が気になります。南北問題とは、結局、日本の社会、暮らしのあり方をどう変えていくか、どう人間化していくか、という、私たち自身の問題ではないでしょうか。

(まつい やより・朝日新聞編集委員)



東南アジアの厳しい状況の中で、それをね返すバイタリティを持つ人たち。訪れるたびにむしろ「元氣」をもらうという松井さん。アジアでも、ヨーロッパでも、運動を担っている人たちは、明るい。なのに、日本に帰って来ると、気が滅入ってしまうのはなぜ？ と。

事前に読んで来てと言われた、朝日新聞に連載された「市民と援助」(86年5月19日〜6月・全20回)は、一人でも多くの方に読んでもらいたいと思う力作。西欧諸国の援助の実態を様々な角度から分析・紹介。私たちができることのヒントが、たくさんちりばめられている。



稲 邑 恭 子

『日本人と国際人』

柴田俊治著

◆日本で期待される「国際人」は、国境を越えて生きる「コスモポリタン」でも、地球規模で思考する「インターナショナル」な人でもない、わが国独特のもの。外からの国際化にうまく対応する「交渉者」にすぎないという。そして「国際的な基準でいう国際化とは、国のわくから離れて自由になること……これに対して、日本で考えられ、実行されている国際化とは、国のために外へ出て行くことであり、そして、国の中は変えないこと」十年前に出た本だが、少しも変わっていない。

(ダイヤモンド社 九八〇円)

『アジア・女・民衆』

松井やより著

◆アジア太平洋資料センター(PARC)自由学校での講義と質疑応答の記録をまとめたもの。日本のメディアのアジア報道の立ち遅れを怒り、マスコミだけでなく、ミニコミや運動のネットワークを通じて、オールタナティブなメディアの創出をめざす松井さんからの、躍動するメッセージ。たぐさんの問題点と発見を含み考えさせられる本。

(新幹社 一二〇〇円)

『海を渡る女たち——日本における出稼ぎ労働者』(Women From Across The Seas)

アジアの女たちの会編

◆年間七、八万人もが来日する、アジアからの出稼ぎ女性。その実態と身を守るすべを知らせる英文ガイドブックが、このほどフィリピンやタイの女性グループからの要望に応えて「アジアの女たちの会」によって作られた。アジアの売・買春の現状や、国際会議についても紹介。英語の教材、学習会の資料としてもお薦めの一冊。

問い合わせは、遠野はるひさん (045-592-4950) まで。

(八〇〇円)

『こども・外国・外国語』

『未来塾って、何?』

中津燎子著

◆前書では、海外から帰国し異文化の断層に生きる子どもたちの苦悩に、幼児期をロシアで過ごし、日本社会での「安定根」を見いだせず苦しんだ自らの体験を重ね合わせ、子どもへの早期英語教育や、異文化体験への配慮の無さに一考を促す。日本人として、空気のように、生きていることの無頓着さにハッと気づかされる。(文藝春秋 一〇〇〇円)

後書は、作者が主宰する、英語の発音の訓練を通して異文化理解を試みる「未来塾」の様子が生き生きと伝わってくる、刺激に満ちた本。中津さんのハードな「シゴキ」は、今の教育の盲点を見事に突く。

(朝日新聞社 一三〇〇円)

『泣くんじゃあない「不用哭了」』

菅原幸助著

◆なぜ、中国に大勢の孤児が残され、今まで放置されていたのか、私たちは、何をすべきなのか——帰国者のために日夜奔走し、国の無策ぶりを憤る筆者からのメッセージ。

(人間の科学社 一三〇〇円)

発言



フィリピンからの「花嫁さん」

山崎ひろみ

テレビのニュース番組で、わたしが初めてフィリピンからの「花嫁さん」の存在を知ったのは、二年余り前のことだ。

それ以来、この問題にこだわりを感じつつけている。なぜだかわからないが、わたしには、この問題はわたし自身の問題という直感があった。そして、同じように感じた女たちとともに、一言「おかしい!」と声をあげた時から、わたしたちは改めて日本の女たちの居る場所を見つめ直さなければならなくなった。

アジア各国から「花嫁さん」がおし寄せる状況は、さまざまな角度から論じられている。南北問題、都市と農村の格差、農業問題、封建的な家制度……。とりわけ、農村の「嫁不足」問題として語られる時、多くの人が口をつぐんでしまう。「日本の女が農業を嫌った結果」、つまり、わたしのように都会暮らしでシングルをやっている女に責任があるというわけだ。けれど、これは、フィリピンをはじめとするアジア各国の女たちと日本の女を分断する、第一級のデマといわな

ければならないだろう。

多くの人が誤解しているが、アジアからの「花嫁」は農村にばかり来ているわけではない。フィリピンを例にとってみよう。フィリピンの日本大使館によれば、結婚あつせん業者が動き始めてからも、「国際結婚」で過疎農村に嫁ぐ人は全体のわずか数パーセント。残りは都市で、相手の男性の職業も公務員、会社員、工場労働者、店員などさまざまだ。そして全体の三分の一が業者を通じての結婚、残りがフィリピンで知りあうものと日本に出稼ぎに来て知りあうもの半々、ということだ。この中には売春させるための偽装結婚も含まれると思われるが、いずれにしても、農村の嫁不足解消のための「国際結婚」はごく少数ということになる。確かに農村には農村独自の問題があるが、過疎農村が、村おこしの一つの宣伝材料として、マスコミを活用したことで、全国に業者が増え都市での「商売」もやりやすくなったわけだ。このことから、わたしたちが得た結論はこうである。つまり、日本

の男性にとってフィリピンの女性は、買春の対象か忍耐強く従順な嫁や妻であれば事足りる存在であるということだ。業者が結婚をあつせんするとき、女性につけられる条件の中に「日本語が話せないこと（＝売春体験がないこと）」というのがあるが、これは、買春と結婚を両立させるために女を二種類に分類しておきたいという願望のあらわれである。この願望は何もフィリピン女性にのみ向けられたものではなくて、実質的一夫多妻制存続を望む世界中の男が世界中の女にむけて発するメッセージのひとつである。

そして、いかに「安く」それを実現するかにのみ、男たちの頭は働かされている。マスコミに対し、この「国際結婚」は許せない、と発言すると、わたしのところには必ず電話が入る。「お前は結婚できない男の人権をどう考えるのか!」という抗議ならば、まだ反論のしようもある。けれど、抗議よりもずっと多いのが「テレビで見たらフィリピンよりスリランカがいいな」と思っただけで、紹介してくれないか」「あつせん料の安い業者を紹介してくれないか」という電話だ。彼らには、「花嫁」たちの涙や、「だまされた」という告発はまったく見えず聞こえないらしい。さらに、彼ら、「結婚できない男」と「結婚できた男」の間に特別な差がないというところに、わたしは深刻さを感じる。確かに、お見合いバックツアーに出かける男の中には、二度目の妻との離婚も

成立していないといういい加減な男もいる。けれど、男たちの多くは「結婚しなければ生きられない」「結婚できない男はみじめである」「結婚できない男は出世できない」という意識にがんじがらめにされているため、自分にとって結婚とは、などと考えたこともない。その結果、社会が女に要求する機能——子産み、子育て、家事、老人介護、企業戦士の活力を養うセックス……すべてを果たしてくれる都合のいい女を求めることになる。自分は何も失うことなく、自分は何も変わることなく、いかに安くそうした女を得るか、それを追っていくうちに当然、貧しい国の女たちが対象になっていくわけだ。わたしたち日本の女たちに求められている機能と、彼女たちに求められているもの、それはまったく同じものだと思う。

「嫁不足」の名のもとでようやく自立しはじめた女たちを尻目に、行政までが男たちに女を「あてがう」役割にのり出した。これが円高の豊かな国の女たちをとりまく状況である。極論かもしれないが、いま、わたしたちは、フィリピンの女性たちを助け出すことを考えるより、自分の人生を他者に委ねることなく生きる道を考える必要があると思う。お互いに欠点をさらけ出し、勇気を分けあつていい友だちになることが、共に生きることの意味だと思う。

（婦人民主新聞記者）

発言



労働鎖国の壁を越えて

——アジアからの出稼ぎ労働者たち——

渡辺 英俊



「鎖国」などという言葉は、もう死語になったのだと思っていた。遠い昔の愚かな政治の話だと……。だが、それは今の日本の現実の姿だったのだ。「国際化」などという掛け声が、まったくしらしらしいものに聞こえてしまうような現実が、われわれの足もとに黒ぐろと横たわっている。それが、「労働鎖国」という現実である。

生まれつき「日本人」であることが当然だと思つて来た人々にとって、入管法（出入国管理及び難民認定法）などという法律は、名前さえ聞く機会が少ないだろう。ましてそれが、日本の「国益」（と、ある人々が思い込んでいるもの）のまわりに、嚴重に張りめぐらされた鉄の扉であることに気がつく人は、ほんとうに稀れだろう。だが、この法律は、今の日本がひとり占めにしようと思え込んだ富の、分け前にあずかろうとして働きに来る外国人に対して、門戸を固く閉ざしている鎖国の扉なのである。

そこでは、外国人が日本に入国することが認められる「在留資格」が定められているが、働くことを目的とする人々に關しては、貿易・事業・投資活動や、興業活動を行う者、高度な技術者、特別な領域の熟練労働者、医師・語学教師など、一部の例外を除いて、受け入れる条項がない。閣議でも繰返し、「單純労働者」は入れないという決定をしている。その理由は、国内労働市場の安定のためというのが第一だが、その背後には、「外国人」を常に「管理」下に置くべき「異分子」とみなし、大量受入れによつて起こる文化摩擦や社会的混乱を避け、「單一民族国家である我が国を、できるだけ純粹に維持しようとする」（入管関係者の見解）という思想が、はつきりと読み取れる。

こうして、金庫に鍵をかけるように外国人を固く閉め出し、おきながら、企業はどんどん海外、とりわけ他のアジア諸国に出かけて行き、ボーダーレス（国境なし）に荒稼ぎする。

国内の何十分の一という安い賃金で労働者を使って品物を安く作り、輸出する。資源を安い値段で根こそぎ買い取ってしまう。湧くように豊かだった魚を、トロール漁法で海をぶちこわして取り尽くし、地元の漁民を食えなくさせる。それと入れ替わりに車や電気製品からインスタント・ラーメンまで、こちらの製品を氾濫させて地元の産業を圧殺してしまふ。庭先に五く六本の椰子の木があれば、子供が飢えることはあり得ない豊かな地域で、労働人口の半数近くが失業状態、全死亡数の半数近くが十歳未満の子供たち、全人口の六〇%とも八〇%とも言われる人たちが、最低生活に必要な収入を得られない……等々という大量貧困が作り出されている。その一方、資源の乏しい日本で、物があふれて使い捨てにされている。

私の住んでいる横浜で、寄せ場の日雇い労働者の賃金が一日一万円前後だが、今の為替レートでフィリピンのペソに換算すると、公立小学校の教師の一カ月分をはるかに上回り、全産業平均の二カ月分、ココナツ農園の小作農民では実に一年分の収入に当たる。こんな経済格差は自然にできたものではなく、奪い奪われる関係の中でこちらが溜め込んだ結果である。もう、この事実を見ただけで、労働者もまた、ボーダーレスに渡って来ざるを得ないし、法制度の罅でそれを止めようとしても止められる道理がないことは明らかなのだ。

ところが日本は鎖国の壁——。そこで、東南アジアからの労働者たちは、観光ビザで入国してそのまま潜って働くという非常手段を取るほかない。そして、男性なら三キ労働（キツイ、キタナイ、キケン）と呼ばれる部門、女性なら風俗産業に人が足りなくて、違法を承知で雇わざるを得ない企業主たちがたくさんいる。違法なるが故に、人間として、労働者として保障されているはずの権利をすべて奪われ、暴力団がらみの幹旋業者の食いものにされながら、それでも出稼ぎに来ざるを得ない人たち——。入管当局の発表でも八八年六月末で七万人、その周辺を加えると二十万人を下らないと思われる人々が、何らかの違法状態を背負わされて働いている。

全国各地で、カラバオの会をはじめとして外国人労働者と連帯する救援組織が懸命の活動をしているが、賃金トラブル、病気、けが、住居、出産、そして死……と、もう民間の善意のレベルではカバーし切れない、問題の質と量に達している。政府が、まず、外国人労働者の法的地位を保障し、その受け入れ体制を整えなければどうにもならないところへ来ているのだ。それさえできないくらいなら、私は日本中の辞書から「国際化」などという字を消してしまつてほしいと思つている。

カラバオの会代表 (横浜市中区寿町4-13-1町内会館2F)
寿日雇労働者組合気付 ☎045-662-5638

発言

「国際人」にはほど遠い

菅原 幸助



もう二十年も前のこと、北海道苫小牧市の職業安定所で取材をしているとき、職員が雇用主に頼み込んでいる言葉を聞いた。

「社長さん、あなたの会社には十人もシャモ（日本人）の中学卒業生をあげた（採用）のですから、二人ぐらいいはウタリ（アイヌ）の子どもも使つて下さいよ」

「アイヌは汚いし、働かないというじゃないか」

「いや、いまの若いウタリはよく働きますよ」

敗戦後、十五年余りたった昭和三十六年二月ごろだったと思う。戦争に負け、敗戦国の悲惨な生活からようやくはい上がって、人間らしい生活ができるようになってはいたが、まだ北海道ではアイヌ民族に対する、きびしい人種差別社会が残っていたのである。

旧満州で、少年時代を過ごした私は、日本人の他民族に対する人種差別をいやというほどみせつけられ、「なぜ日本人が偉くて、中国人が悪人なのだろう」と胸をしめつけられる

思いをしたことがたびたびあった。

旧満州では人種によつて月給が違っていた。一番高いのが日本人。学校を卒業して就職したところ、私より成績のいい中国人の月給が私の約半分だった。彼は、「君はボクより成績が悪いのに、どうして倍の月給をもらうのか。日本人はそんなに偉いのか」と私にうらめしそうにくつてかかった。

私は気がひけて、月給をもらうたびに、彼を料理店に連れてゆき、大盤振舞いをして「罪」ほろぼしをしたつもりであった。

数年後、日本は戦争に負け、満州国は崩壊した。強い者から我れ先きに満州脱出をはかり、奥地の弱い開拓農民たちが悲惨な運命に突き落とされた。そして一万人近い女性が残され、約三千人の中国残留孤児ができた。

四十年後、日中の国交が回復し、残留孤児たちが祖国日本に帰れるようになった。五十歳近くになった「孤児」。子や孫のいる孤児も、帰国した。が、公営住宅がない、との理由

で、厚生省は半強制的に帰国孤児は地方に定住するよう彼らの住まう自由を奪っている。

東京でアパートを捜して歩いた帰国孤児がいる。ボランテニアの人が通訳して回った。「ああ残留孤児ですか。中国人と同じわけね。うちは中国人は油料理をよく作るから貸さないの」。

何軒も断われ、とうとうその人は神奈川県大和市まできて、ようやく小さなアパートを借りることができた。家を捜すこと四日間、「中国人はダメ」と断わった不動産屋、家主は十五人に上ったという。

欧米を旅すると、土地の人たちに、英語で話しかけ、通じないで、おどおどしている日本人旅行者をよくみかける。そして欧米に旅する日本人はやけに金遣いが荒い。金を遣うことで、自分の存在を認めさせようとしている。

インドネシアやシンガポール、台湾に行くと、日本人旅行者の態度はがらりと変わる。晴れ晴れと胸を張って歩いている。彼らは東南アジアを旅するときは、経済大国日本の旅行者というプライドと權威のようなものを持って歩く。だが、欧米では気前よく大金を出して買い物をするのに、東南アジアでは、値切って買う人が目立つ。

自国の中に住む、しかも先住者のウタリ（アイヌ）を尊敬せず、軽べつする。五族協和だといって旧満州国を建設、理

由もなくいい地位について甘い汁を吸う。

日本の、その非国際的要素は、あの恐ろしい敗戦を体験しても、少しも変わっていない。その証（あかし）は、昭和六十三年十二月現在、中国残留孤児の帰国者に、「中国人には家を貸せない」と、断わる家主が大勢いることで明らかだ。祖国の土を踏み、肉親に会い、日本でくらしたい、たかだか二千世帯の中国残留孤児帰国者を暖かく受け入れることのできない日本人。それが、発展途上国援助に数百億の資金を出し、世界に国際的一流国家の面子をたもとうとしている。どうして国際人と言えるのだろうか。

● 中国残留孤児問題全国協議会

〒102 東京都千代田区九段南四―二―一四

☎ 03-262-6777

● 神奈川県日中孤児問題連絡会

〒231 横浜市中区山下町二二二

☎ 045-664-4106

（元朝日新聞記者、中国残留孤児問題全国協議会会長）

発言

中国への旅で見たもの

東出 文代



一九八五年十二月二十二日より、国際平和年の一九八六年一月四日まで、日本軍国主義侵略の爪跡を探訪する日教組婦人部訪中団に参加する機会を得ました。目的は次の二つです。

①日本軍国主義の爪跡を現地に探訪し、不再戦の決意を新たに平和教育にあたる。

②婦人解放の歴史と現実を学び、日中女性の交友と平和運動に役立てる。

この訪中団は、日教組仁木婦人部長の努力で、中国教育工会の協力を得て実現したものです。私たちの課題は帰国後スライドを团として作成し、平和教育のための資料作りをすることでした。平和教育の原点として、過去の戦争責任を明確にする必要があったからです。

北京の冬の夜の空気はからりと冷たく、空港内の人ごみをかき分けてきたほてりを一瞬に凍らせてしまうものでした。「子々孫々に至るまで中日交友」と、一行を迎えて下さる受

入れ側の総工会の皆さんの笑顔は暖かく親切でした。

翌朝、蘆溝橋に向いました。蘆溝橋は美しい橋でした。一九三七年七月七日、日中戦争はここに端を発したのです。城壁に今も残る砲弾の痕や、橋のたもとにある蘆溝橋文物保管所も訪ねました。ここには侵略と抵抗の歴史、人民解放の過程が展示されていました。

次に、零下二十度のハルピンに、七三一部隊駐屯地跡を訪ねました。マルタ（生体実験の犠牲になった人）は中国人・モンゴル人・ソ連人ほか三千人以上になるそうです。審陽にある旧満州医科大学（沈陽医学院）でも生体実験が行われ、人間の脳の切片の標本や論文が多く残っていました。

一九三一年九月十三日、撫順市郊外にある平頂山村民の虐殺も抗日運動を弾圧するための悲惨な事件でした。この時の生存者は七人でした。三人は既に亡くなり、一人は入院中で三人の生存者の方から当時の様子を聞くことができました。

国際平和年の元旦に、私たちは南京虐殺記念館前に立ちました。受難者三十万人と書いてありました。記念館の中には当時の惨状を証明する写真や資料が展示されていました。南京の青年たちは日本軍に捕えられ、郊外へ連行されて虐殺されました。生き埋め、人殺しの練習、百人切りを競い合う日本兵の写真など、中国側の捕虜になった日本兵のポケットの中から出てきたという写真が展示されていました。婦女暴行は七歳の少女から七十歳の老女まで、記念撮影した後殺したという記録が残されていました。李秀英さんと夏淑琴さん（当時七歳）から当時の様子を聞くことができました。お二人は私たちに心を開いて、つらい体験を話してくださいました。私たちはしんとして、この重い事実を心に受けとめました。

この二週間、常に耳にしたことは、次の言葉でした。「中国人民は日本軍国主義のしたことは決して忘れません。資料を保存し、永久に子孫に語り伝えます。しかし、日本軍国主義と日本人民は違います。中国人民は日本人民と子々孫々に至るまで中日交友を深めなければなりません」と。私たちはその都度、この言葉を心に重く聞きました。

帰国後、訪中団全員の力を結集したスライドが完成しました。さて、スライドを上映しようとした時、私に一つのためらいが出ました。いかにこの事が事実であろうとも、この生

々しい事実を明らかにすることに、私は抵抗を感じました。そして久しく、日本軍の行為の罪の重さゆえ、スライドは石川県では上映されることなく、私の引き出しの中で眠ることになりました。

私にこのスライドの上映を決断させたのは、一九八七年五月、時期遅れに東京で開催された日教組第三十六次全国教研での大江志乃夫氏の記念講演でした。今年こそ、日教組が「教え子を再び戦場に送るな」のスローガンを守りきれるか、その真価が問われる正念場の年だと説かれました。四つの観点から、軍靴の響きが間近かに聞こえて来る今日の状況を切切と語られる大江氏の講演は、私を説得するに十分でした。

一九八七年九月二十一日、はたらく婦人の石川県集会で初めて上映しました。「金沢母と女教師の会」での上映を契機に、お母さん方から、女性教職員たちから口伝えに広まり、上映活動が静かに、そして着実な盛り上りを続けています。上映活動を通して、日本軍の行為の重みが私の心の中にずしりと、そして増々深く刻み込まれてくる今日この頃です。上映するほどに、語るほどにいろいろな事象が見えてきます。

（このスライドは日教組の婦人部にお問い合わせ下さい）

発言



友だちのいないアジア人たち

—日本人はアジア人？—

田村 昌 史

自分はナニかなとフト考えたことがある。とある勉強会で、都内のある大学の国際会の学生さんに声をかけられ出席した時のことだ。インターカレッジのイベントで、テーマは「アジアと日本」。私は「米ソデタントとアジアの平和」の分科会に出て、いくつかの大学からやってきた数十人の学生さんたちと議論するチャンスを得た。

「アジアの平和」というテーマであるはずなのに、なかなかそこに話がいかない。アメリカのアジア戦略とか在日米軍経費負担とか、まず超大国アメリカの論理が存在し、それが当然の前提として討議が進められている様子を、コメンテーターの学者たちも苦笑しつつアドバイスするありさまだ。アジアの平和をどうやって主体的につくっていくのか熱心に議論されるものと思ひ込んでいただけに、学生さんたちの姿勢にはガツカリもし少々ハラも立った。あつそうか、彼らはアメリカ人なんだ、と考えるとハラも立たなくなつたが……。

ところで、あなたはナニ人ですか。新人類ですか。私はた

またま東アジアに生まれたアジア人である、という生き方をさぐつてみたい。しかも、よきアジア人として生きてゆきたい、その倫理を追ひ求めてみたい。アジア地域に住む住人こそがアジアの平和をつくる主人公なんだという「住民自治」の論理を前提として。

●隣のアジア人

国際化ブームという。何がどう国際化するのか、いったい国際化とは何か、ニッポン列島に住む住民の一人として考えてみる。「トリーキョーがアジア化している」という一つの現象がその問いに対する答のヒントになるような気がする。留学生・就学生を先頭にして日本に住む外国人の九割近くがアジア人だ。中国・韓国・台湾出身者がほとんど。新宿区・豊島区では区民の二十人に一人が外国人となっている。街を歩いても、電車に乗っても、さまざまな国の言葉が聞こえてくる。

●アジア人アパート

中野区にあるW荘を訪ねた。中国人三人、韓国人三人、ホ

ンコンから二人、日本人二人が住んでいる。一階は飲食店、二階が貸し室。一間は四畳半から六畳で二万五千円から二万八千円の家賃。十年前学生をやっていた私も、W荘のすぐ近くの、同じようなアパートに住んでいたが、今ではこのような形式のアパートに下宿する日本人学生は少なくなった。そのかわり家賃の安さと交通の便の良さにひかれて、どんどんアジア人学生たちが入って来ている。

私の友人のK君。韓国出身の三十歳。大学院の試験に合格して東京にやってきた。まずは部屋を探さなくてはならない。生まれて初めての東京だし、アジア人はお断りという不動産屋もいると聞いているし不安だったが、幸いなことに日本人の友人と一緒に回ってくれるという。よろこんで出かけたものの楽ではなかった。不動産屋を十件回ったが、そのうち三件は韓国人ということで断られた。三万円までの家賃のアパートを希望しているが、なかなか見つからない。夜の八時になって十件目の不動産屋でようやくW荘を見つけた。

不動産屋を回るなかでK君は敷金・礼金というとうとうもなぐ金のかかる日本独自のシステムに驚嘆する。たまたまW荘は建てかえ等の予定もあるとかで、六カ月契約で敷金一、預り、礼金なしという条件だった。これなら負担も軽くていいということでK君はW荘に決めた。

W荘の大家さん夫婦は大変親切だ。奥さんは下宿生との交流を深めるために彼らと同じ二階の四畳半に寝起きしている。高校生と中学生の二人の娘さんを送り出すために朝五時半に起床。昼夜は一階の飲食店の仕事。夜中一時に二階を掃除し床に就くのは二時三時というハードワーカー。

その奥さんは下宿生の姿をみかけると必ず声をかける。日本語学校の学生が多いが「おはよう、元気にやってる？」とか「こんにちは、ちゃんと学校に行ってる？」など、特に用がなくても声をかけを忘れない。トイレの使い方、洗濯のしかた、ごみの出しかた等共同生活のルールを、まだ日本語の十分でない学生たちにわかり易く説明し、紙に書いて示し、全員に納得、理解させてゆく。相互の信頼関係が深まってゆく。

アジア人の住むアパートは数多くあるが、W荘のような心の通い合うアパートは少ない。朝起きて学校へ行き、その後は夜中までアルバイト。月に一回家賃を払う時以外大家の顔など見たこともないという学生がほとんどだ。彼らには同郷の数人以外にはほとんど友人がいない。

隣のアジア人に声をかけ話をしてみよう。彼らは日本人の友人を必要としているし、私たちもまた然りである。日本人をアジア人とするならば、彼も我も友人のいないアジア人同士。隣人を知ることから始めたいものだ。

(日本の国際化を考える会)

発言



黄さんとの出会いから

中村 英之

'88年のWee夏季フォーラムの分科会で参加した人たちが思わず聞き入って、もつとたくさん聞きたかったとあとあとまで感じさせるものがあつたのが「私の言いたいこと―在日朝鮮人として、女として」の黄貞順^{フンジョン}さんのお話でした。

その黄さんのお話をテープに採ったものを当日の分科会に参加していない実行委員の人たちが聞いたところ、とても感動し、「この黄さんの話を私たちのものだけにしてみてもいいかもしれない、テープおこしをして活字にしよう。そしてもつとたくさんの人たちにこの話を知ってもらおう」との声が上ががり、黄さんの話の本または小冊子化の話が持ち上がったのでした。

でも、それは実現しないことになりました。テープおこしをして、小冊子にするための荒書きみたいなものを黄さんに送ったところ、丁寧な断りの返事をいただいたのです。

黄さんは言います。「私、黄貞順の名前に入った本なりなんなりが出回ることによって、それを読んだ人が、在日朝鮮

人の問題わかったなんて思ってもらったらいやや。そんな付き合いかた、浅い。本当の付き合いでない付き合いかた、私はいや」と。そして「細い、ほんの少数でもいいから、どんなちっちゃなことでもいいから、とことん付き合えるようなもののほうが私はいい。運動していくんやったら、自分の生活を切り崩さないとところで（本を読んでわかった気になるだけとか）運動したって何にも真実味がないような感じ」と。また黄さん自身が話された内容を讀まれて「言いたかったこと全然言えてない、こんな出回ること恥かしいわ」とも言っておられました。それは、黄さんが、言いたかったことをあらかじめ整理して行けばよかったと反省されてたことも含めて、言いたいことを本当に話したら二時間やそこらで終わらないということがあります。

また、黄さんがこのフォーラムの分科会に来るにあたって「誰が黄かわからんくらいみんな話し合いができる、十人ぐらいがええなあ、あんまり多いのはどうも」と言われてたこ

ともつながります。それこそが黄さんの言う本当の付き合い
いかたとも言うべきものでしょう。

黄さんが言い足りなかったことを、黄さんに補筆なり加筆
なりして頂いて、改めて本などにはもらえないかともお
願いましたのですが、黄さん自身もできるものであればそうも
したいが、最近パン屋さんを開店してとても忙しくて明確な
返事ができないとのことでした。

そのパン屋さんというのが、黄さんの地元の生野で、障害
者とともに朝鮮人も日本人もまざりあつて障害者の自立を目
指したパン屋さんだそうです。そして、十月の開店以来とて
も評判が良くて、休みもなくパンを焼き続けているそうで
す。そのパン屋さんの名前は「コサリ」と言い、蔵のこと
です。浅い付き合いではなくて、細くてもいいから自分自身丸
ごと、体ごと運動や人間関係の関わりをもつていいこうとする
黄さんの身上が、このパン屋さんへの思い入れに現れている
ような気がします。

当日の黄さんの話の中でどの部分も吸い込まれるように聞
いたのですが、特に考えさせられるものがあつたのは、その
まま引用しますと「日本人が朝鮮人のこと考えたいとか朝鮮
のこと何とか言うときに、日本人が自分がこう自分の問題と
してどういう日本人になりたいのかとか、どう生きていた

んかとかいうところへんで、こう朝鮮のこと知りたいとかい
うのやつていかなね、十人朝鮮人いたら十人違う意見でこ
んなふりまわされると、私思うんですわ。……日本人が自分
の生きたかたの中の朝鮮いうのんをとらへんかぎりではね
……そのへん大事違うかなあとと思うねん」という部分でし
た。

もちろん黄さん自身の生い立ちの話、子どもさんに朝鮮名
をつけ、民族学校へ行かせることを決断する過程で悩んだこ
と、あるいは在日朝鮮人の暮らしの厳しさを目の当たりにし
たことなど、具体的な話も迫力のあるものでした。けれども
「日本人としてどう生きるのか」という問いかけは、指紋押
捺拒否の問題を少しかじったくらいで、あるいは朝鮮語を学
んだ経験があるくらいで在日朝鮮人のこと、それにまつわる
様々な問題にわかつたふりをしていた僕自身に問いかけられ
たことのように感じられたのです。

在日朝鮮人問題と一言で終わらせてはならない、それは日
本人問題とも呼ぶべきもの、いや一人一人私の問題である
ということ、そしてそれに気付き考えていくには、深い人間関
係を単なる言葉の活字化に囚われない形で創っていくことで
あるということ、暑い能勢の夜を熱く語った黄さんの話が、
少しずつわかってきたような気がします。

「私は絶対差別をしない」と言うことの危険性

李 由 子

ある会合で「うちの子が、学校で『韓国人』
と言っているのよ」と、隣に座
っていた在日韓国人の母親が話しかけてきま
した。

「うちの子をいじめている子どもの親と話し
あっていたら『でも、在日韓国・朝鮮人の人
は、よく新聞の三面記事に載っていますよね』
って言われたの。確かに、他の外国籍の人と
比べたら在日の人が三面記事に載ることは多
いかもしれない。でも『在日韓国・朝鮮人だ
から』と言うよりも『生活環境が悪くて、経
済的に恵まれていない人』が、三面記事に載
っていることが多い、と言った方が正確なん
じゃないかしら。だって、在日の人達と同じ
生活環境の日本人が罪を犯す率を見てみる
と、在日の犯罪率とかわらないのよ。

それに、在日韓国・朝鮮人の生活環境が悪
いのも、これは日本人の差別からくるものだ

し。私たちは、植民地時代に特殊な職業につ
くことしか認められなかった。そのおかげ
で、生活環境も悪くなり、今でも就職差別は
ある。貧しいといっても、一定レベルを越え
たら人間性が歪められてしまうでしょう？

だから、在日韓国・朝鮮人の犯罪は、ある意
味では、日本人に原因があるとも言えるのよ
ね」

同じ在日韓国人である私ですが、この話を
聞いて冗談じゃない、と思いました。

確かに「在日の人は、よく三面記事に載っ
ている」という発言は、在日韓国・朝鮮人だ
ったら、誰でも犯罪を起こしやすいというレ
ッテルを貼っているように受け取れます。

でも、その時に「生活環境の悪さ」「貧し
さ」が原因だと言って反論すると、今度は在
日の人が「生活環境が悪い、貧しい人達」に、
レッテルを貼ることになるのです。

日本人でも、韓国人でも、アメリカ人でも、
罪を犯す人はいらる。お金持ちでも罪を犯
す人はいらるし、貧しい人で罪を犯す人もい
る。「○○だから、罪を犯す」という言い方
そのものが、他人にレッテルを貼り、差別を
生み出す原因になると、私には思えるので
す。

「在日韓国・朝鮮人」が、いつも差別されて
いるわけではなく、在日の人が差別してしま
う可能性はある。「自分だけは絶対差別をし
ない」と言いきってしまうところに「差別」
が生まれる危険性が含まれているのです。

Weでの『上すべりの国際化』という特集
が、どのような「国際化」を意味するのかは
わかりません。でも、常に自分も差別する可
能性がある、と意識していくことが、差別の
ない「国際化」に必要なようになってくるのでは
ないでしょうか。

国際化と教科書

永島 利明

教育の国際化といわれているので、それほどの程度日本の家庭科の教科書に反映しているかを調べてみました。

小学校の家庭科の教科書には外国人らしい人はひとりも掲載されていません。中学校技術・家庭科の教科書には一社はかなり外国人が登場しますが、一社はひとりも見えません。国際結婚で生まれた子どもたちの思いや悩みを話し合うおしゃべり会が昨年夏に開かれました。

日常生活で一番困るのは、「名前や顔だちのことだからかわれたり、ガイジン、ガイジンと言われること」。特に小学校ではこうしたいじめが多く、アメリカ人を父にもつ低学年のある女の子は「私、お母さんの顔になりたかった」と思ったそうです。

せめて、教科書にはもつと他民族が登場すべきでしょう。

スウェーデンは単一的な民族社会、多数のゲルマン民族と少数のラップ人からなる社会でした。複合民族社会からなるヨーロッパの国のなかでは珍しい事例です。

このスウェーデンには一九三〇年代から移民が増えました。ナチスドイツの迫害をうけてヨーロッパから、戦後は東ヨーロッパの社会主義国から、一九六〇年代にはベトナムから、最近ではアルゼンチン、エチオピアなど世界の多くの政治難民がやって来ました。

そして八百万人の人口の約五%が外国人、一割が外国系の国民という複合民族国家に変化しました。

首都のストックホルムはいうまでもなく、人口十一万人のサープの戦闘機工場のある中部市のリンシェピングでも、ニューヨークにしているような感じで、いろいろな人種の人が町を歩いています。

スウェーデンの経済状態は好調で日本と似ています。日本も、四〇五十年後は人口の一位が外国人ということになるかもしれない。同じ道を辿るかもしれないので、スウェーデンの家庭科の教科書を調べてみました。

低学年の教科書ではいろいろな国からやってきた子どもに「祖国ではどんな食物をふだん食べましたか」、「学校では何を食べましたか」、「お祭りやクリスマスや復活祭のとき何を食べましたか」と質問させる課題があります。このように移民の子どものもつ情報を大切にし、引き出すことをしています。

中学年用にも各国の食習慣がのせられています。野菜を多く食べ肉の少ない国、宗教が食生活に影響のある国をあげています。

この国はルーテル派の新教徒が大部分ですが、そのほかにカソリック十万人、ギリシヤ

正教六万人、イスラム教徒が三万人います。そして各宗教によって異なる食生活をしています。そのことを知ることは給食の運営にも必要なのです。

このようにこの国の家庭教科書では開発途上国の情報を正確に子どもに教えようとしています。

投稿

「リクルート問題」に思う

連日、新聞やTVをにぎわしているリクルート事件と税制改革問題は私たち重度障害者には遠い政治世界の出来事のように思われる。しかし、この事は、現実の政治が私たちからますます離れた存在になって行くようで、将来の福祉社会の在り方に重大な問題を投げかけている。

リクルート事件は、未公開株で数千万円の金が政官界等の個人に流されたという。他方、税制改革は消費税3%導入が問題となっている。過日あるTV番組の中で低所得者層に対し3%の消費税は逆累進課税になるのではないかとの質問に「21世紀の高齢化社会を踏

日本の教科書では小六用で「水が不潔」(町田貞他『世界の中の日本』中教出版) 中学地理で「技術がおくられている」(石川忠雄他『中学校地理』学校図書) というように、日本の工業の発達段階からみた尊大な書き方をしているものもあります。これに対してスウェーデンの教科書は事実を正確に伝えています。

まあて国民すべての皆さんに3%の納税をしていただく。3%は各種施策によって返していくのだから、もし、それ(消費税)が出来なかったら結局はその人たちに我慢していただくことになるわな」という意味の答えを政治家W(リクルート関係議員) がしていた。

私たちは福祉年金+特別福祉手当合わせて一年間に百三万五千四百円が唯一の現金収入で、たとえ3%の消費税といえ実生活では大きな重みを持つ。確かに社会保障によって医療費などは重度障害者には無料となっているが、通院はやむなくタクシーを使わなければ

高学年用ではアフリカの状況が詳細に解説されています。これは移民のなかで現在もつとも多いアフリカ系の子どもの故国のことを理解させようとしているからです(『日本教育学会誌(八八年六月)の拙稿をこらんなさい』)。

森 章 二

ならない場合が多い。また、介護人は有料化されつつあり、耐久商品等は一品が数万円となるために買うには数年間はかかる。

重度障害者同士で家庭を築いている友人たちは、働きたいと願っていても電動イスでの通院、買物、食事準備等々で一日が終わってしまう。私自身、自力で寝返りが出来ないために昼食時に家の者に寝かせてもらい、一方向に二、三時間は全く動けない状態である。家の者が仕事の都合で二、三時間以上来られない時は、身体を針の刺すような痛みが走り、その辛さにせめて泥棒でも入って身体を動かしてほしいと願う。

政治家Wに、私達のような立場で生活をしている者の金銭感覚が理解できるであろうか。その金銭感覚や生活実態をわかってほしい。政治が腐敗を生んだのではないか。

今日、政治の世界は世襲化傾向が強くなった。『86年の同日選挙で当選した自民党議員三〇四人中、二世議員は、全体の38%の一人に達した。二世・官僚・地方議員が自民党衆議院議員出身母体の「御三家」だが、回を追うごとに「二世」の比率は上がっている(週刊エコノミスト 63・10・4号より)。

これら、エリート社会で育った人たちが真

去年の夏のフォーラムには、帰省中の松江から、大阪能勢の郷まで自転車でこぎつけ、日焼けした体で現われた榎野良平君。「学生生活を続ける」社会人一年生の彼のバイト先をたずねる。



東京、西荻窪の「遊々満月洞」。「自然食レストラン」ふう。新月の日が定休日というから、行くときは、お月さまにご注意。

「去年の十月から、ここで仕事をはじめ、ずい分、料理のつくり方おぼえたし、いわしが、さばけるようになったんです」。それは

に弱者層の実生活の状態を理解することが出来るであろうか。常に、話題となる政治資金集めのパーティー券でさえ一枚が二、三万円といわれている。悲しいことに私のように力がない者が政治に対し発言すると必ず左右イデオロギーのレッテルを貼られ重要な問題をすり換えられる恐れを感じる。しかし政治に関わる人達に重要なことは、自らが体験する心構えである。私は今春までH国立療養所に約五年間お世話になっていた。入院中に何度となく政治家の見学があった。それは常に通り一遍のもので私たちの療養生活を知るに

スゴイ! 「その特技も生かして、ぼくが、今友人たちと考えているのは、定期的に人が集まる場をつくること、とりあえずは、パーテ

〈もうちゃんぽ、
がんばらいやー〉
の
榎野良平 さん



ィを開こうって。準備から、手づくりでやろうと話し合っているんだけど。どうやら「食う・飲む・まなぶ」? というところらしい

はほど違いものだった。

リクルート事件と税制改革問題は権力者たち政治のあり方と弱者の生活実態を把握し再考させる貴重な機会であってほしい。今後、更に一部エリートだけの政治が横行するようなら、福祉社会の実現は遠い。また、私たちは「国民が政治を嘲笑すれば嘲笑に値する政治しか行われない」という言葉を決して忘れてはならない。

(88・11・18)

です。「去年は、Weに連載を書かせてもらって、とてもいい経験になって。チャーリーさん、あとはよろしく。今年は、巳年。ぼくの年でもあり、いろいろやりたいけど、今度「上野千鶴子を読む会」を発足させますので、興味のある方はどうぞ電話を! ☎0422-51-3009 (ICMが入りましたがお許し下さい)」子どもが大好き、フォーラムでも子どもと遊ぶお兄さんが自然な青年。二人姉弟のお姉さんが四月には結婚。周囲の状況が変わってもマイペースの良平君に、私も一言、「もうちゃんぽ、がんばらいやー」。(青木)

中国の高校で

張^{チン}

曉^{セイ}燕^{イン}



東京から南京へ来てから、一日が長く感じられます。ここは、南京の中学校（日本の中学・高校に当る）。私は校内にある学生寮に住んでいます。高二に在学中です。同室の六人の同級生に何もかも教えてもらい、今ではすっかり私もこの学生になっています。

中国の学校の朝は早く、八時には授業が始まります。毎朝、近所の年輩の人たちが太極拳や気功をやっているのが見えます。私達はおかゆとマントウの朝食後、ラジオ体操をやってから教室へ向かいます。

月曜日には朝礼。毎回、国歌を歌って国旗を上げることから始まります。紅いスカーフをした「先鋒隊」の子が旗を上げる間、他の人は右手を上げて敬礼をします。初めての時には、私はちよつととまどいながら、誰もが歌える国歌と誰もが見つめられる国旗なんだ

と思ったのです。

どの科目も、授業は全部教科書に沿ってやっています。けっこうワイワイガヤガヤ、発言や質問、反論ありと、教室全体で授業しているという印象を受けました。先生の一言にもたたくさんの声が返って来るし、びっくりするほど友達同士でもズバズバと間違いの指摘や考えの批判をしている。政治の時間や数学・物理など、まるで討論会です。友達に面と向かって、「それは違う」と言うのは、勇気がいるのじゃないかと思うけれど、ここではちつとも遠慮も気遣いもしないで何でも言っています。それが彼らには普通のようなのです。

ある日「班会」の時間に「オリンピック」について話し合ったことがあります。オリンピックでの中国についての感想から始まって、そのうち今の自分たちの国の問題へと話

が変わっていききました。この時、皆が真剣に「中国」について討論しているのを見て「いいなあ！」と思ったのです。それぞれが「これから」を考えて、自分の意見を言っている。それには、これからの中国をつくっていくんだという気持ちがかめられているようでした。政治にもとても関心を持っている。「国」についての討論が、これだけ熱くクラスの中でできるなんて！ 夜の寮でも、消灯後に、物価高や教育改革の影響など身近なことについて話していることがあります。私はとても刺激されました。

私は、日本の中学校を卒業してすぐに、この学校へ来ました。だから、まだ、ことと日本の高校を比べてみることはできませんが、来たばかりの時は何でも日本より活発で、自由に思えました。時間以外に守らなければならない規則がない（本当はあるのですが、特に聞くことがないので私は今でも知らないのです）。そのかわり、何かの行動を点数にすることがあります。点数をつけるのは嫌なことですが、服装や髪型で生徒を見るといふことはあります。おしゃれな子はきれいに飾っているし、ハイヒールは女の子のほとんどがはいています。

放課後は、部活動がないので、すぐに家に帰る人がほとんどです。でもクラス対抗の球技会がある時には、皆でジューズなどの差し入れを持って応援に行きます。私は普段他の

クラスの人と接することがないのですが、こういう時に声をかけられることがあります。私が彼らを知らなくても、むこうはたいいて私のことを知っています。けれど、私は中国人なのに皆はなかなか分かってくれません。

私は、「いろいろな人がいる」ということを皆に気づいてほしいなあと 생각합니다。私もそうだし、他にもあちこちの国で様々な理由があつて生活している人がいると思うからです。それでも、特に大人は私に、「なぜ日本国籍をとらないのか?」と聞きます。たびたび同じ事を聞かれるので悲しくなります。私にとっては、「このままであること」が当たり前なのです。そして今、中国語を勉強したくて、中国を少しでも知りたくて、それから外から日本を見てみたくて、ここにいるのですから……。

少し前から、この学校は豊橋のS校と友好関係があります。先生の交換や、春には修学旅行団もこの学校へ来ました。私も歓迎に参加したのですが、なんてカタチだけの会なの

か、「友好」ってこんなものなんだろうかと思つてしまいました。

学校同士は、「中日の交流をした」と満足したかも知れませんが、肝心の生徒同士はほとんど話すこともできなかった。中国の学生は英語や漢字を使つて話しかけていたのですが、日本の学生の方は、大勢でかたまつて急ぎ足で行つてしまつたり、はずかしがつて逃げてしまつていました。こんな機会はめつたにないのにと本当に残念に思いました。お互いの相手に対する興味や関心の度が違うのかも知れない。中国では日本のテレビドラマや映画をしょっちゅうやつていたり、大きな物から小さな物まであちこちで日本の物を見かけます。旅行者、最近では学生がたくさん修学旅行に来て、中国の学校に立ち寄ることも増えている。それでこちらの学生は、日本の色々な事を知つていたり、興味を持っていたりするのです。でも日本では、中国の情報を聞くことも、それに興味を持っている人も少ないと思います。これではやはり、気持ちも通じにくいのではないかと、黒い制服の人たちを見ながら私は考えていました。

その後秋に、別の学校の生徒がやつて来ました。このH校は午後いっぱいこの学校で過ごしたので、スポーツの試合や生徒同士が話をする時間がありました。H校が南京に来た目的は、この街の南京大虐殺記念館に行くことと、中国の学生との交流を持つことだったそうです。「目的」——それで時間も十分とつて、生徒も先生もなんとなく積極的な感じだったのだと思いました。帰って行くバスの窓から手を振つていたH校の人たちは、来た時とは違つた表情をしていたし、この学生も何か通じたものがあつたようでした。

前回、S校が来た時には、南京の観光地を回る忙しいスケジュールの中で、この学校に来ました。「中国の学生と話したい」という気持ちも、学校側がそのために準備した時間、H校より少なかったと思います。それぞれ、中国に対してどんな印象を持ったのかなと思うのです。

私が中国の学校で生活していて嬉しかったのは、同世代の人・先生・私の周りの人たちとの友達……というふうに、たくさんの人と知り合えたことです。皆と少しずつ話も通じ、私にはまた新しいことが見えてくるのです。そして今日も、今日はきのうとまた全然違つた一日だったと思ひながら、夜九時半の消灯で眠るのでした。

新しい家庭科を

創るために

小学校では

低学年こそ、家庭科を！

北川 好美

勤務校は、大阪城のすぐ東にある。通勤には、市バス、地下鉄、JRとあらゆる方法を試してみたが、一時間近くかかってしまう。そこで今は「自転車で三十分」に落ち着いている。初めは少々くたびれたが、慣れれば、なかなか良き運動。快適、快適。（でも、寒い！）

毎朝、大川（旧淀川）沿いを走る。遊歩道が整備され、一般道路とは、柵で隔てられているので私でも安全なのだ。アスファルトと地道の二本のゆったりした遊歩道の両側は、桜並木になっている。春は、満開の桜が道路いっぱいにはたがり、花のアーチができあがり、桜吹雪が舞う。夏には、青葉。秋には、日毎紅葉が深まる。雨あがりの道路を見渡せば、黒地

に色鮮やかな反物が広げられたように見える。冬は、葉を落とし、黒々とした枝々が天を刺し、残された枯葉が風に小刻みに震えている。四季雨天を問わず、それぞれが美しい。キラキラと輝き、とうとうと水をたたえる川面には、大学のクラブのボートがすべっていく。ジョギングする人。「今日はサービスよ」なんて犬に話しかけながら散歩する人。サービスしたくなる気持ち、わかるな、と思いながら、追い越してゆく。私は、高校生たちヤングに追いつかれ、離される。大阪城が、行く先に見え隠れしだし、大きな池のように川が広がる所では、おじいさんたちが、釣り糸を垂れている。ひたすらペダルを踏みながらも、頭の中は、学校であったこと、家族のことなどが、とりとめもなく往き来する。

今朝は「ママ好きやから学校行かんといて！」とボロボロ涙を流し、しがみつく二歳の息子に閉口してしまった。弟を抱き止め、なぐさめながら、私に合図を送る十歳の兄。弟は今年の秋から、喘息の発作が重く、ずっと調子が悪い。学校へ急ぎながらも息子が気になる。女はいつもギリギリのところを選択して生きているんだという思いが、湧きあがってくる。どちらを選ぶか好きずきだけど、どちらの道も行き止まり！「残念。またどうぞ！」子供たちの迷路遊びのように、最近、女の生き方、いろいろできそうで、なかなかできない仕掛けになっている。特に子供なんて生まれてしまうと、か

わいくて仕方なく、憎くて仕方なく、いてバンザイ！ いなくてバンザイ！ の入り乱れなのだ。

育児休業を取る、取らないの選択。育児は、働く女にとって画期的な制度であつたとは思ふ。選択肢が増えただけでも素晴らしい。しかし女だけが、育児を取るということは、家事一切引き受けてしまい、今まで、せっかく築いてきた夫とのいい関係が、元の木阿弥になつてしまう。そして収入がないのであるから、余程心して、この時期を乗り切らねばならない。車の免許を取つたり、地域活動に参加したり、なるほどと思う育児中の過ごし方はある。

上の子の時は三カ月間であつたが取つた。しかし私は二度と、ご免だと思つてしまう。すると、産休明け出勤のしんどさが待っている。保育所捜しに始まり、弱い子供であれば、なおさらしんどい。そして「子供を犠牲にしてまで働きに行くのか」「母性愛がないのか」。まわりの人たちから言われた忘れられない言葉の数々。なんで女ばかり攻撃されるんや！ 夫にも言うたつてほしい。「こら、この鬼父！ 仕事ばかりして！」

夫は頼めば何でも協力はするが、主体性に欠けるのだ。マスコミ、週刊誌では、「鬼母」「愚母」「バカッ母」……よ

く言ってくれるわ。その連れ合いの「鬼父」「愚父」「バカッ父」はどこへ行つたのさ。

旅行社勤務の我が夫は、気が付くと、団体旅行に添乗して家にはいない。その分風通しがいいのは事実だ。しかし子供が病氣・入院となると頼りにならない。私一人、強くたくましくなつてしまう。下の子には育児を取らないと決めていたので、少しでも条件のよさそうな、乳児センターや、自由契約してくれる保育所を息子を連れて見て歩いた。結局、保育所に入れた三カ月というものの毎日熱を出し、どれだけ病院へ通つたであろう。私の実家、夫の実家へ預けたり、来てもらつたり。「あんな北川さん。小児喘息の原因は一概には言われへんけど、心因性のものも大きいらしいで」なんて、言われると、働く親はやつぱり辛い。

しかし、上の息子は「働いてるお母さんが好き」と答えてくれる。子供たちは、いつも強い味方だ。産休明け、しばらく、母乳を家庭科室の準備室で二十分の業間や、昼休みに絞り、冷凍庫で凍らせ持つて帰つて温め飲ませていた。そして、折にふれ、女が働くことの大切さ、喜びを私は子どもたちにも話してきた。

ある日、四人目の赤ちゃんを出産したお母さんから声を掛けられた。「看護婦をしていて、とても迷いました。息子か

●新しい家庭科を創るために／小学校では

ら先生の話してくれたことを聞き、やっぱり働き続ける決心をしました」。どういうふうに話してくれていたのかは知らないけれど、とてもうれしくなってしまう。

三年生の解放教育の副読本「にんげん」に、こんな詩が載っている。

女の子

ふろ屋にいったら

大きな おなかのおばちゃん

——もう 女の子 いりませんわ

——あきまへんわ

なにが いらんねん

なにが あかんねん

横浜の大学で四年間を過ごし、大阪で教職に就いた時、「にんげん」の副読本を見て驚いた。在学中、一度も聞いたことのない同和教育をはじめ、様々な差別に対する解放教育の取り組みを知り、さすが大阪だと思ったものだ。

その一つが、この詩の女子教育である。We 8・9月号に岩瀬さんが取り上げている通り、昨年から六年用に、中山千夏さんの——「女らしさ」と「男らしさ」について——が入っ

ている。しかし少ないと思う。部落差別、外国人差別、障害者差別、女性差別の中で、一番取り組みの遅れているのが女性差別だと言われているが、本当にそうだと思う。

「女の子」を読んで、三年生の子供たちは感想を書いている。

●女の子いいですね、もうあきまへんわ、なんて言われた女の子の気持ちわかってほしい。大きなおなかのおばちゃんも女や。やっぱり女の子の気持ちわかってほしい。

●なぜ女の子じゃないのだろう。子どもみんな女ばかりだからだと思います。ふつうのお母さんだったらそんなことは言わないと思います。おばさんはひきょうだと思います。

●おばさんがわるいと思います。女の子でも男の子でも、いらないことはないと思います。どちらが生まれても、やさしく大きく育ててやっただいと思います。

●女の子と男の子のさべつだと思う。おふろやにいたおばちゃんやのうんだこが男だったらよろこぶでしょう。でもそのおなかの大きなおばちゃんも、むかしは女の子なのだから。ちきゅう中に、女は何万人い上もいるのに。心のやさしいおばちゃんなら、男でも女でも、どちらをうんでもいいでしょう。

●もしおなかの中にいる子が女の子で、おばさんの言ったこ

とがきこえたら、きずつくと思います。

● なんて女の子がいらんねんやろう。女の子にはかわいいふくとかきせんとあかんからかな。でもかわいいふくきせんでも、だいにそだててくれたらいいと思います。

● 女がどうしてだめなのか。女がかわいそうです。ぼくは女でも男でもいいと思います。男のほうがうるさいけどな。

どの子の感想も、「女の子いらんなんて言っではいけない」という意味のことが書かれていた。そして、そんなこと言ってるのを聞いたことがないと言う。私たちが子供の頃、よく聞いたが、最近には確かに少なくなかった。女の子をほしがる人は多い。そこで、今度生まれてくるとしたら、男と女どちらがいいかと尋ねてみた。

。女子→女の子に、また生まれるたい 68% どちらでも 32%

。男子→男の子に、また生まれるたい 64% どちらでも 14%

女の子がよい 22%

本当にそう思っているのか、その場の雰囲気で、そう思ったのかどうかは、わからない。女性差別の根深さは、子供たちだけでなく、女性自身でさえ、差別を差別と思わなかったり、気付かない、はっきり見えてこないところにある。だからこそ、考え合う場をきちんと持つべきであろう。しかし、

新指導要領の改訂では、その部分が、どんどん削られていく。ずっと共学を当たり前にし、男女差なんてほとんど感じられない小学校低学年から、ちゃんとやっていく必要があるのに。

子供たちは、自分で考え納得したことは、すぐ行動に移す。クラスでも八割以上の母親が、仕事を持ち、かつ家庭の仕事の大部分をこなす。その不公平を話し合い、自分たちで、できることを母親に任せていらないか考えさせた。まず自分のことは自分でやろう。土曜日の宿題は普通出さないようにしてきたが、それからは「上靴洗い」が宿題になり、実行している。

「先生、私カレー作ったで」「ぼくなんか、焼めし作れるで」「弟と二人で、食器洗うことに決めた」「毎日、洗濯物の取り入れと、アイロンがけをしています」「アイロン!」「やけど、せえへんか?」と問われれば、いつもはおとなしいその子の顔が、パツと輝き、みんなは熱心に話を聞いている。「お母さん、お店忙しいから、私がいつもやってるねん」なんて話している。

雑布縫いを一度やれば、いまだに「先生、また縫ってきたで」と差し出す針目のていねいさ。その子が一生懸命縫っている姿を想像し、うれしくなる。フェルトでマスコット人形

● 新しい家庭科を創るために／小学校では

を作ってきたり、お手玉をおばあちゃんにたくさん作ってもらい、その作り方を示す途中の作品まで持ってきてくれる。

「先生にプレゼント！」と言われて、見ると靴型にキルティング布を切り抜き縫い合わせ、チロリアンテープの持ち手がつけられている。その中から、かわいい赤ちゃんの写真。

「ほんとここに生まれた赤ちゃんや」

学校というところは、本当にたくさんさんのことを次から次へと学ばせる。一方的に知識を流し込む。子供たちは疲れてしまう。子供が元氣なのでは格好がつかない。どうにかして生き生き学習に取り組ませようと、「がんばりカード」——がんばった人は○がもらえるよ。「表彰状」の大、中、小版の乱発。「級別認定証」——はい、あなたは13級の力があるよ。「色別シール」——すごいよくがんばったね、黄3だよ。黒1目ざしてがんばろうね。

次々と子供たちの学習の励ましとなるよう考え出される。子供が真面目であればあるほど、がんばってしまう。テストをやる時は「イヤヤ！」とはつきり言うのにだ。そして私もテストをやってももらわないと困るので、「運命だと思ってあきらめてください」などと言いながら、用紙を配布する。子供たちは、もともと評価されるのなんて嫌いだ。評価する教

師の痛みなんて、される子供の痛みには比べれば、きれいなことだといふことぐらいうすぐわかる。評価が、みなダメだとは思わない。その子の良さを認め合ったり、励まし合うことは必要だ。しかし子供たちが管理を管理とも気づかず、ひたすら、おりこうさんになっていくのを見てるのは辛い。

そんな学校で、子供たちにとって本当は何が大切かを、教師も子供ともに考え、ともに感じ合えたらいいなと思う。そして、自分らしく、もっと自由に生きていきたいなと思う。

◆あなたも、ご意見を

(大阪市立鴨野小学校)

‘88年度のWe誌上において、竹見智恵子さんの「教育に点数はいらない」(‘88年・5、6月号)等とその反響を「こだま」でも取り上げてきましたが、『評価』をめぐる‘89年・5月号「内申書——その功罪を問う」で取り上げます。

‘88年5、6月号「教育に点数はいらない」 8・9月号「こだま」——テストは何のために? ‘89年1・2・3月号「評価をするのはだれのため?」に對して、あなたのご意見をお寄せ下さい。八百字程度。誌上匿名可。締切り二月末。あなたも、論争に参加して下さい。(編集部)

新しい家庭科を

創るために

中学校では

袋作り

根津公子

このところ、二年生では袋作りをしている。今年も五月から九月にかけて取り組んだ。既製品を買い求めるうれしさ以上に、ものを作り出すことの楽しさを、生活を潤すことの喜びを、生徒たちが肌で感じてほしいとの願いからだ。

題材を袋に求めるのは、男子も女子も体型に関係ないという点、少し位失敗しても使えるという点、そして、「通学鞆は学校指定のスポーツバッグ」という学校が年を追うごとに増えている中で、生徒たちが自分で作ったものを通学に使用している事実は、その攻撃に対し最後の切り札となるかもしれないという望みがある。市内二十七校のうち、通学鞆に指定がないのは、本校を入れて数校のみである。

これらに加えて、被服製作で気になるのは時間の問題だが、二時間×十回以内で終わる点も袋作りの魅力だ。もっとも今年は、授業時数が少なくなったクラスに進度を合わせたため、予定時間を大幅に上回ってしまったが……。

〈授業の流れ〉

第一回目。「袋作りをしよう」と呼びかけると、昨年の二年生が作っていたのを知っていて歓声をあげる生徒と、布が無駄になるんじゃないかと不安に思う生徒、そして「そんなもの作るより買った方がいい」と面倒くさがる生徒もいる。作りたいと思うまでには無理がある生徒もいるが、「自分一人じゃなかなか作ろうなんて気にならないだろうから、皆で作ってみようよ。自分の腕に挑戦してみようじゃない」と誘い、借りてきた昨年の二年生の作品を見せる。昨年の二年生にはミシン操作の得意な生徒が多く、傑作を生み出そうという空気が全体に流れた。事実、秀作ぞろいだった。先輩たちの作品を見て生徒たちは、「本当にこれ、三年生が作ったの?」「この袋、〇〇先輩が持っているのを見かけたけど、自分で作ったものだったの!」と驚いたり、「僕も△△君と同じような袋を作りたい!」と思いをふくらませる。

まず、ファスナーとポケットをつけることだけを最低条件として、袋のおおよそのデザインを考えさせる。

次に、デザインを基にしての班作り。「三人寄ればなんとかの知恵と言うでしょ。用途・デザインが同じような人を探し合って、三人以上の班を作ろう。こういうことが得意の人を一人確保すると助かるよ」。男女混合の班にさせたいこちらの気持ちとは裏腹に、男子だけで、あるいは女子だけで、数人集まる。用途もデザインもほとんど変わらなくても、男女別々になってしまう点、問題は残るのだが……。

能率や、結果的に男女別班になってしまう問題を考えれば、同一教材を扱った方がよいのだろう。しかし、同一教材では、生徒たちは考えずにひたすら真似だけをすればよいのである。生徒が本当に作りたいと思うものを、頭を使って作らせたいと私は思う。

第二回目。参考になる袋を持ち寄り、構想図に表し、そして型紙作り。セロテープで型紙をつないでみて、各部の寸法に誤差がないか、形は適当かなど、調べる。スポーツバッグあり、リュックあり、お弁当専用鞆あり。欲しいと思ってる既製品をこごとく真似して作る班もある。また、アイデアいっぱい、世に二つとない形も出現する。

布のしくみ・性質等、最低限必要なことに触れた後、作った型紙を机の上に並べ（机の幅が九〇cmなので都合がいい）、布の必要量を算出する。次回までに班ごとに布を買ってくる

ことにする。

第三回目。「布は一〇cm単位で売ってくれるから、必要量だけ買うんだよ」と念を押して出したはずなのに、二倍近く買ってしまった班も出る。「先生が言ったことは知っていたけど、一mにつきいくらって値段がついていたから、やつぱり一mじゃないと買えないって思ったんだもの」と言う。「それも説明したはずなのに……」と残念がるのは、私ばかり。当の生徒たちは、「小遣いじゃなくて親のお金だから」と意に介さない。

布を広げて見せ合い、生徒たちは興奮気味。「今日は型紙に合わせて布を切ります。やり方の基本は一通り説明するけど、班ごとに違うから、班でしっかり考え、協力しないと失敗してしまうよ。一つひとつ班の皆で確め合って作業を進めるのよ。チームワークにかかっているからがんばって。ただし、布を切り間違えてからではあとの祭りだから、布を切る前に必ず私に見せること」と念を押して作業開始。裁断の失敗だけしなければ、あとはなんとかなる。

第四回目。いよいよミシンの操作。本来なら仮縫いからだろうが、キルティングの布を使う生徒も多く、また、ミシンに興味と自信を持たそうと練習がてら、布端にジグザグミシンをかける。

そして第五回目。一斉にファスナーつけ。その後は縫い合わせに入るが、ここからは班ごとに縫い方が異なるので、班で検討しながら、先へ進む。

〈S君の存在〉

S君は、型紙作りも裁断も「難しい難しい」とぼやきながら、班員の助けを借りてどうにかやってきたが、ミシンを使う段になって俄然やる気を出した。ミシンをまっすぐにかけることができ、私や級友たちの称賛に自信を持ったのだ。先週までとは打って変わり、大粒の汗を流しながら、自分のを終えて班員の面倒を見ている。元来気のいい性格なのである。自信とかやる気というのは、不可能を可能にしようほどの力を持つているものだ。このS君、何かをスマートにこなしてしまうタイプとはほど遠く、いわゆる努力家ともほど遠いのだが、それからは完成まで家庭科の時間をとつても楽しみにするようになった。廊下ですれ違ふと、「明日だね」とか、「今週潰れちゃったから、他の先生に授業もらってよ」とか、必ず言ってきた。授業の日は一歩のりで被服室にやって来て、ミシンの準備をしていた。作りたい一心で、わからない所はわかるまで私にも友達にも聞いて回っていた。

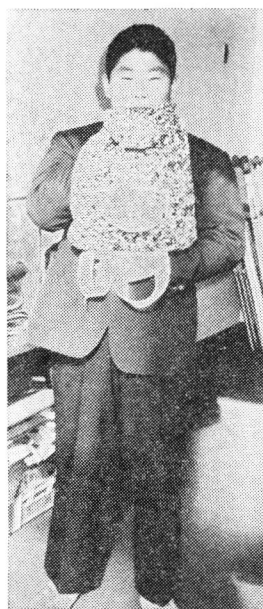
S君の存在は、他の生徒に大きい影響を与えた。「S、す

げえ！」と皆から認められた。同じ班で遅れがちなA君にS君は「おれが教えてやるから、がんばれよな」と声をかけ、手伝っていた。逃れたいと思っていたA君も、そこまで手助けされるとやってみるかという気になつていった。初めのうち遅れていたA君は、半ば過ぎからS君と一緒に一番のりでやってくる、完成へとこぎつけた。マチつきのリュックを見事仕上げた。

S君のがんばりに、A君だけでなくクラスみんなが、多少なかなれ影響を受けたのだと思う。布を買い遅れたり、やる気が起きなかつた数人も、半ば以降はとつても熱心に取り組み組んだ。

一方、他の二クラスは、こううまく事が運ばなかつた。昨年までは未完成の生徒は一人も出なかつたが、今年はどうとう一切やらなかつた生徒や未完成の生徒が、何人か出たのだ。前者は、布を持つて来ず、二回に一回は授業のある日に休んでしまった。美術の時間もそうだと言う。理由を尋ねると、「面倒だ」「別に……」。出席した時は、「端布をあげるからミシンを使つてみたら」と誘つても、「いい」と応じない。そして、私の眼を逃れておしゃべりをしていった。後者は、布を用意する段階から遅れ遅れで、完成まで追いつけな

●新しい家庭科を創るために／中学校では



S君と製作のリュックです

●新しい家庭科を創るために／中学校では

と理解していくのだが、無意識のうちに生徒たちは特性論に乗っかってしまっているのだ。

上手に作る男子がたくさん出ることで、体験的に特性論を崩していければと願ってきた。しかし今年は、二クラスでそれが失敗に終わってしまったのだ。男子も女子も多くの生徒は袋作りを楽しかったとしているが、一切やらなかった、未完成だった数人の問題は、私に大きくのしかかっている。

〈生徒の感想より〉

かった生徒。その日の予定分が終わらない場合は、放課後やっていくことになっていたのだが、そこまではがんばらなかった。そして、後期になり、家庭科から技術科に移行した今は、“やっと逃げられた”という気持ちが強くなっている。

〈一切やらなかった生徒や未完成の生徒〉

彼らがなぜ、やる気を起こせなかったのか、私はいまだにわかりかねている。

彼らはどういうわけか、みんな男子であった。口にくそ出さないが、「男だから」という気持ちがあったのか？

生徒たちは社会の影響を強く受けている。とっても上手に作る男子に、「□□、男のくせにすげえうめえの!」という賞め方をする。論じ詰めていくと、「男・女の問題じゃない」

。なぜ作らなかったのか、その理由は、①布を買うのがおそかった。②作り方があんまりよくわからなくてめんどろだった。③でも作ろうとは思ったけど、日にちがたりなかった。④家で作ろうとしたけど、ミシンを出すのがめんどろだった。⑤残って学校で作ろうとしたけど、忘れて帰ってしまった。(男)

。ぼくは家庭科が好きです。まず、かた紙を作ったときは、あんまりおもしろそうじゃなかったんです。友だちといっしょに布を買いにいってやるきができました。それからは、わかんなかったところも先生におしえてもらってだんだんできてきておもしろくなりました。とくによくできたのはフタのぶぶんです。一番むずかしかったのはフクロでし

た。この作品は先生にいろいろおしえてもらいうまくできました。(文中で紹介したS君)

。袋作りを聞いた時、僕は「めんどろくさいし、袋なんてどこでも売っているのだから作らなくてもいいのになあ」と思いました。でも作り始めると、「この布でみんなちやく袋が作れるのかあー、楽しみだなあー」と思い、作るのが楽しみにまりました。袋が完成した時はとてもうれしかったです。自分で何でも作ることはいいことだと知りました。

(男)

。三年生が二年生の時作った袋を見せてもらった時、すごい一言でした。こんなもの私にも作れるのが不安でした。型紙ができた時、やっぱりでできないんじゃないかなーと思ひ不安でした。布は足りなくなると思ひ、大きめに買いました。だから半分位ありました。

できあがった時は、思ったより小さめでした。ふたがしまらなくて、結局、ふたを取ってしまいました。不安は的中したけれど、作ってよかったと思ひました。(女)

。私は先生から「今度は袋を作ります」と言われて、やだなあと思ひた。だって作っている時はいいけど、でき上がってみると、ぬった線が曲がってたりして、とてもきかないからです。でも、もう中二だし、今度という今度は、きれ

いに作ってみようと思ひた。布に線を引いたりするのがめんどろくさかったけど、ぬうのは楽しかった。思ひていたよりうまくできて、今まで作った中で最高だと思ひう。少しして長だけど、一言いって、「うまい！」と自分言うものも変だけど、そう思ひう。(女)

。袋を作ると聞いた時、すでに頭の中に形を想像していた。友だちと一緒に布を買いに行くのに、ちよつと心配だったんだけど、授業で予備知識があつたので、けつこう楽に買えた。型紙作ってからぬうというのは、やったことなかつたので、キンチョーした。でも、ぬい始めてみると、それほど難しくもなかつた(?) ようで、けつこうカッコよく出来上がった。先生、楽しかつたですよ。(女)

へ頼まれると断われない性質と、自分の勉強になるとの思ひから、書ける見通しもないまま、執筆をお引き受けしてしまつた。書きたいことが字数内に収まりきれず、四苦八苦したが、書くことによつて、位置づけや問題点が鮮明になつたように思ひう。大先輩の元同僚に、「教師は一年に一本は論文を書かなくてはいけない」と忠告されていたことが、今年やつと達成できたこと、皆さんに感謝いたします。)

(八王子市立横川中学校)

●新しい家庭科を創るために／中学校では

新しい家庭科を

創るために

高等学校では

住まいと人権 (2)

浅井 由利子

。過密居住の実態についてだが、子供の話が多い。なぜ、狭い家しか手に入らないのに子供を産むのか。遊びにでる場所も、ましてや時間すらとれないのに、どうして、きまっで子供を産むのか。「家が狭い」のはもちろんだが、このことにも、かなり問題があると思う。

『住宅貧乏物語』（岩波新書）や『一九八六年版住宅白書』（ドメス出版）『無限夢』（都市文化社）の中から、いくつかの事例をとりあげ、過密居住によってどんな問題が起こっているか話した後の生徒の感想である。「そんな現実があるなんて初めて知った」という感想が多数を占めるなかで、これ

を読んで、非常に驚いた。「貧乏人は子どもを産むな」という発想なのだろうか。しばらく考えこんでしまった。人間らしい生活ができる住居がすべての人に保障されるべきで、それは基本的人権である。自分にある人権は他人にもあるのだという認識をもってほしいと思う。経済的理由から狭い家にしか住めない人に対して、「かわいそう。うちはまだまし」と考えるのではなく、その人の人権が守られていないことに気づいてほしい、と思っていた。ところが、この感想を読むと「住居は人権」ということを、本当に生徒にわからせることは、相当に難しいことだと感じた。言葉で言うのは簡単なのだが。これから、どんな授業をすべきか考えながら、ため息をついた。

〈家をさがそう〉

以前は、住宅のチラシ広告を使って、自分の住みたい家をみつけ、間取り図を見て、本当に住みやすいかどうか考えたり、住宅ローンの支払いについて考えたりした。しかし、結局、最後には、「お金がなければ、好きな家には住めない。だから、お金持ちと結婚するしかない」と言う生徒がでてきたりする。生徒が選んでくる家は、かなり広く、そのため、価格はびっくりするほど高いものだからである。

今回は、単なる夢物語ではなく、実際に家をさがす時に直面する問題に気づいてほしいと思い、自分が住みたい家では

なく、次のa～dのケースについて、家さがしをすることにした。六人グループで、クジ引きでa～dをそれぞれ決めた。

a 老人一人暮らし(68歳・女)

・収入(年金3万円・パート5万円)

・貯金 100万円

・15年前 夫と死別・三人の子どもはそれぞれ結婚し独立。午前中三時間マンション掃除のパート

b 母子家庭(28歳・女、2歳半・男)

・収入(パート8.5万円、夫からの養育費2万円)

・貯金 200万円

・半年前 離婚。夫からの養育費は滞りがち

c 老夫婦(73歳・男、71歳・女)

・収入(年金など20万円)

・貯金 500万円

・妻は車いす使用。リハビリに通っている。子どもはそれぞれ独立。転勤等で、遠くに住んでいる。

d 三世代同居(76歳・女、45歳・男、41歳・女、16歳・女、14歳・男)

・収入(月平均38万円―年間457万円、祖母の年金3万円)

・貯金 1000万円

・祖母の介護必要

もつと多様なケースを設定することができると思う。しかしテレビで『ドキュメント・にっぽん住宅貧乏物語―今、老人の住まいは』という番組を見て、若い間はまだいいけれど、年老いてからの住まいは、非常に深刻な問題だと痛感した。高校生にとっては、高齢化社会の問題は身近な問題としてとらえにくいし、このような条件の中で家さがしをするのは、楽しいことではないだろう。それでも、やはり、現実に今起こっているさまざまな問題や矛盾に気づいて、そこから今後どうすればいいかを考えていきたいと思った。

『週刊住宅情報』や『賃貸住宅ニュース』等八冊、公団賃貸住宅、公団分譲住宅、府営住宅の募集住宅一覧を各二冊ずつ用意した。各グループでそれぞれ、適当な家をさがしはじめたが、『住宅情報』には間取りがのっていないものが多く、『賃貸住宅ニュース』には、間取り図はあっても、家の広さや構造、何階なのか書いてないため、不動産屋に電話して確かめなければならぬことも多かった。

さがしてみると、なかなか、いい家はみつからず、生徒は「ひとり暮らしなんかしないで、子供と同居したらいいのに」とか「離婚したんやったら、実家に帰るとか、いい人みつけて再婚するとかした方がいいと思うよ」、「この収入は少なすぎ

●新しい家庭科を創るために／高等学校では

ぎるよ」など、ブツブツ文句を言っている。また、「これ安いやん、決めた!」と、窓がないような家でも、台所が非常に狭くても、そんなことは全然考えないで、「家賃が安い」ということだけで決めてしまおうとするグループもある。

生徒のいいかげんさのため息をつき、やはり、自分のことではないから、真剣に考えられないのだからかと気が重くなった。もう少し、相手の立場にたって考えられないのだろうか。

〈ビデオを視聴して〉

NHKファミリージャーナル「病はすまいから」という番組を見せた。具体的でわかりやすく「住む」ということはどういうことか考えさせられた。ビルの5階に住んでいる人が、階段が急なため外へ出られなくなり、「寝たきり」の状態になっちゃったり、ちよつとした段差でつまずき、ケガをしてから、こわくなって歩けなくなった例や、住宅事情が悪くても、まわりの人間関係をたちきつて、引越すことができないなど、住居は、ねぐらだけでなく、生活の基盤であることがよくわかる。ある病院では、理学療法士が中心になって退院する前に、ひとりひとりの症状にあわせて、家具の配置やスロープをつけるなど、どうかえればよいかを助言している。個人の努力ではどうにもならない、社会的に解決しなけ

ればならない問題についても指摘していた。

生徒は「これから老人がますます増えるというのに、国はあまり問題にしないようにみえます。私も、今は5階に住んでいるけど、エレベーターはありません。母に『この先どうする?』ときいても、『階段を上れなくなったら部屋をかわればいい』と言います。大人でさえ、このように意識がないのですから、これから先どうなるのかと思います」「今まで何の気なしに住んでいた家も欠点だらけなことに気づきました。今はもう、亡くなりましたが、リニューマチだった祖母にとつて、私たちの家の構造は苦痛だったでしょう(段差が多く、玄関、階段がとて高いので)と感想を書いている。

〈発表・まとめ〉

発表は、①取得方法 ②住戸型式 ③立地 ④階数(共同住宅の時) ⑤広さ、室数 ⑥構造 ⑦供給者(民間、公団、公営等) ⑧建築年数 ⑨資金調達 ⑩住居費と間取り図、この家を選んだ理由、問題点をまとめ、プリントにし、報告させた。教師の方で、住宅ローンや家賃滞納についてと高齢者のすまいについて、資料を用意し、説明した。時間に追われ、あわたたしく授業を終えてしまった。もっと、今後の展望について、ゆっくり語りあいたかったのだが。西ドイツやスウェーデンの老人住居に対する考え方、日本のコーポラテ

イヴ・ハウスや、一部屋増築運動などを紹介するぐらいしかできなかった。

へ生徒の感想よりへ

。これまでの私は、ただ自分の部屋をもらい、机を置いて飾りつけをし、洗面所やトイレの場所を覚え、その枠の中で生活するだけでした。今はもう慣れてしまっているのです、不便な場所や家の欠点などは全然わかりません。しかし、この勉強をして、本当に住みやすい家というものがほとんどないことがわかりました。ただ寝起きするだけの家、外から守るだけの箱の中にとじこめられているような気さえしました。ひとり暮らしの老人の家をさがしていた時、家と呼べる家に手をだすだけのお金がなかったのが本当に大変でした。この授業で日本の事実を知ったからには、これから改善できるような世の中にしていきたいです。広くて高い家が一番いいとは思いません。ただ、その人が人間らしく生活できる家を建てるようにしてほしいです。

。日本が狭くて人口が多いから、とひとくちに日本の住宅事情のひどさの原因を言ってしまうとおしまいのようですが、同じような事情の国でも、きちんと住居が確保されている国もある。だから、人々の考え方に大きな違いがあると思います。何をするのも、出発点は「家」なのだから、

問題の原因を深く掘りさげ、改善の方向をみつきたい。

これらの感想を読んでいると、私にとっては不満の多い授業だったが、生徒は生徒なりに、一生懸命取り組んだのかもしれないと思えた。ところが、次のKの感想を読み、非常にショックをうけた。

。住居の勉強で一番刻みこまれたものは、「家庭」やった。思い知らされたような気がする。くやしかった。みんなと話があわん。「この収入少ないね」うちよりも、だいぶ多かった。「このうちせまいし。こんなに住めるの？」うちより広かった。みんなが他人ごとみたいに言うのはしやーないと思つとつたよ。そやけど、キョーシまで、そんなやつたらあかん。授業は胸ん中えぐられて、涙出そうになつたけど、こんなんで泣いたかてしやーないわと思つた。わざわざ胸ん中えぐられて、ヒクツになるために授業うけとんかと思つた。(中略)授業きいてるもんの中に自分のこと言われているような気がする奴がおつたら、どんな気するねん。みんながわるとつたり、バカにしたりしとつたら、どんな気がするねん。わからん奴にはわからんわ。それをわからせるためのカテーカとちゃうんか。うちだけちゃうと思うよ、きつと。

●新しい家庭科を創るために／高等学校では

読みながら、授業の様子を思い出してみる。私が、他人事のように話していたなんて、そんな事はないはず。まず、そう思った。しかし、もう一度よく考えてみると、狭い家に住んでいる生徒がどう思うかという事を、あまり気にとめないで授業をしていたことに、ようやく気づいた。前任校では、多くの生徒が、かなり狭い家に住んでいる現状を知っていたので、かなり神経をつかって授業をしていたことを思い出した。今回、私は、そんな配慮に欠けていたのではないだろうか。あらためて、授業をふり返ってみると、私の言葉もクラスメートの言葉も、たびたび、Kを傷つけ、つらい思いをさせたのだらうと思う。そんな事をちっともわかっていなかった自分が腹立たしく、情けない気持ちでいっぱいになった。

Kには、やはり、きちんと、あやまりたいと思った。放課後、「忙しいから」としるぶKを、なんとか家庭科準備室まで連れてきて、話をした。ずっと、うつむいたままだった。しかし、率直に、いろんな話をしてくれた。私も、できるだけ言い訳はしないで、素直にあやまった。一時間あまり話をした後、「私も先生にあやまらな」と言って、ほんの一瞬笑顔を見せて帰っていった。

つくづく、住居の授業は難しいと思った。現実を見ないで

理想の家だけを夢見ている、住宅の貧しさをかえていくことはできない。しかし、現実を直視することは、とてもしんどいことだ。Kとの話の中で、教師の意識、どんな立場からものを言うのかが大事なのだということがわかった。「こんな人もいるのよ」と高い所から下を見おろすように言われている、みじめな気持ちになってしまおうと話していた。

「住居は人権」。もしこういう意識がもてるようになれば、ずいぶん展望がもてるのではないかと思う。劣悪な住居に住んでいる人も、あきらめるのではなく、権利として要求し、ましな住居に住んでいる人も、自分には関係ないと放っておけないはずである。「住居は人権」という住意識がもてるような授業をこれからつくっていききたい。

この一年間、生徒にいろんな事を言われ、ショックをうけ考えこんでしまうことがたびたびあった。最後ぐらい、かっこよくまとめようと思っていたのに、やつぱり、また、失敗してしまった。自信たっぷり「正解はこれ」と教えてあげることができないけれど、今、目の前にいる高校生たちとさまたまな問題を一緒に考えていく時間を共有したいと思う。そして、せめて、生徒の声やつぶやきに耳を傾けられる教師になりたいと思っている。一年間、どうもありがとうございました。

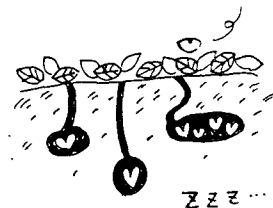
(大阪府立茨木高校)

●教育に点数はいらない

評価をするのは

だれのため？(2)

竹見智恵子



☆通信簿の季節、先生たちは気が重い

私は「点数序列のない学校をつくる会」という会の会員ですが、最近、小・中・高校の先生を対象に、評価についてのアンケートを行いました。

アンケートは、現在勤務中の学校で行われている評価方法をたずねることから始まって、評価をする時の基準、テストとの関係、評価に対しての子どもへの反応、今後評価を改善するとしたらどうすればいいか等、十数項目についてたずねました。

そのアンケートの中で、「あなたは（通信簿や指導要録に）評価をつける時、どんな気持ちになりますか」という質問があります。それに対して、ほとんどの先生方は「気が重い」「憂

鬱」「できればつけない」等と答えています。前の設問で、「評価は必要」「評価をすることで子どもは伸びる」と考えている先生でさえ、評価をつけることは気が重い作業だと答えているのです。そんなに気が重いならつけなければいいのに、というのが私たちの感想ですが、今の公教育ではそうもいかないようになっていのですね。

☆指導要録が教師の自由を奪っている

通知表への記入はともかく、公簿である指導要録への記入は、学校教育法施行規則の第一二条で義務づけられているのですね。

私もつい最近知ったのですが、通信簿や評価表の類は公簿でもなんでもなく、つけ方も決まったかたちはないのだそう

です。学校の主体性で判断すればよく、段階をつけなくたっていいし、文章だけでもかまわないのだそうです。それに対して、指導要録は公簿であり、これは決まったかたちでの記入が義務づけられています。

学校教育法施行規則の規定によると、指導要録というのは、二つの役割というか性格を持っているといわれています。

一つは、公簿としての性格。これは戦争前の学級簿をひきついだもので、学齢にある子どもはすべて、在籍した学校に成績その他を公に記録され、その記録は卒業後も二十年間保存されます。

もう一つの性格は、指導・外部証明の資料としての性格です。これはどういうことかというと、子どもたちの学籍といっしょに、子どもたちをどう指導したか、その過程と結果を記録して外部の証明に役立たせようというものです。

指導要録をつけることが義務づけられ、しかもそれが公簿としての性格を持ち、外部への証明資料になるというわけですから、ある意味では、先生たちが通信簿や指導要録をつけなければならぬと思うこんでいるのは無理のないことかもしれないですね。

でも、ここであつと考えてほしいのです。気が重いけれど、教師の義務だから仕方がないのだと通信簿や指導要録をつけ続けていていいものでしょうか。私は、評価の問題をめ

ぐって、子どもと先生の関係はもはやのつびきならぬところにいると思えてなりません。

☆おとなは納得しても子どもは納得できない

先生たちは、仕方がないからとみずから納得して評価し続けているわけですが、それに対して、子どもたちははつきりと拒否の申し立てを出し始めています。

はからずも『We』12月号のなかで、そうした子どもたちの率直な言葉に出会い、私は胸をつかれました。それは、浅井由利子さんが書かれている「家庭科とテスト・点数」の中に散見することができました。浅井さんの「いのちについて考える」授業は、浅井さんが伝えようとしたものが響くように生徒たちの心に届き、深い感動を与えたのでしょう。その後、当然生徒たちから、初めて体験した感動的な授業の後でどうやってテストするのかと疑義がでます。それに対して浅井さんは、生徒たちのいう通り、何を習ったか知識の量をはかるようなテストをすることはできないと、彼女たちにレポートを書いてもらうことにしたようです。そうして提出されたレポートの大意がいくつか載せられているわけですが、その中に「こいつはこういう考え方をしている、という目で見られるのがきらい」という言葉があり、ドキリとしました。これこそ子どもたちの評価への思いを集約していると私には思え

ます。

今の子どもたちはごく小さい頃から、周囲のおとなたちの「評価」の目にさらされ続けています。一挙手一投足が、「いい」だの、「悪い」だのとおとなの価値観で測られてきました。それが十年以上も続けば、どんな子どもだってもううんざりということになるでしょう。批判されるのもいやだけれど、ほめられるのだってもうたくさん、「とにかく放つて！」と子どもという子どもが大合唱しているように私には見えます。「こいつはこういう考え方をしている、という目で見られるのがきらい」といった言葉に続けて、「先生は人が書いていることについて、その深さとかは読みとれるつもりだと言われましたが、書かない奴の気持ちも、書けない奴の気持ちも読みとれますか」と同じ生徒が書いています。この発問は、教育にたずさわるおとなはもちろん、ボンヤリ親をやっている私などもきっちり受けとめなければなりません。「書かない奴」も「書けない奴」も、「うまく書いた奴」と同等に見る感性を持ってと彼女は言っているのです。

☆評価がコミュニケーションをはばんでいる

ともあれ、ひとつの教室の中で、テストや点数について疑義を出す生徒がいる、そしてそれを受けて、ほんとうにテストは必要なのだろうかと悩む先生がいることに私は希望を見

ます。今まで、あまりにもテストや点数について、先生と生徒、親と子ども、教師と親のあいだで話し合うことが避けられてきました。子どもたちは、以前からとくにテストや評価のおかしさをさまざまなかたちで訴えてきていたのですが（たとえば校内暴力や登校拒否）、鈍感なおとなたちは、つねに、そんなことしたいしたことじゃないのだと子どもたちに言い聞かせ続けてきました。そのくせ、自分たちだけは、テストや評価の方法の細部にわたってまで研究し尽くしているのです。

おとなたちの一方的な評価の目があるために、どんなおとなと子どものコミュニケーションがはばまれてきたでしょう。か。今や子どもたちから受けたものは不快感だけということになって、やつと心あるおとなたちがあわて出したと見るのは意地が悪すぎるでしょうか。

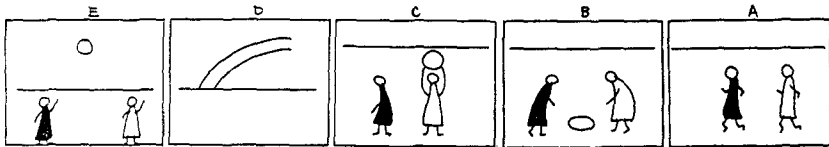
ともあれ、評価の問題が教育の中身と切りはなしようなくあるのだという論議は今始まったばかりです。当分は子どももまじえた話し合いを続け、その中から新しいシステムを生み出す必要があるでしょう。知恵を出し合うこと、そのことが教育の原点でもあるのですから。

浅井さんには、ご自分の実践を通して、いち早く教育の新しい地平に向けてスタートを切られたことに心からのエールを送りたいと思います。

海の輝く日

紙芝居創作

佐藤通雅



前号につづいてもう一つ紹介します。今度は紙芝居創作です。といっても特別な準備はいりません。私の方であらかじめ五コマの略画をプリントしておきます。それを見て想像力をふくらませ、自分の物語を作っていくます。順序はどのように組み替えてもかまいません。全く同じ問題を幼稚園児から大学生に至るまで取り組んでもらいました。その中からほんの数例を紹介し、かつ作品を読みながら私の考えたことをまとめてみたいと思います。

〈例1〉幼稚園年少女子

D たいようがストーンとおちてきた。
A おやなんだろうとおもって、はしってきた。
B あつたいようさんがおちていた。
C とつてもてのつめたいひとがもちあげて、
E ボーンとおそらにかえしてあげました。

〈例2〉小三男子

D Aチームがホームランをうった。カキーン。
E お、きたぞ、ボールが飛んできた。
A そらとりにいけ。(アナ)せこい人がボールをとりにいきました。せこーい、せこーい。

B あったぞ。

C 「ホームランボールはおれのものだよー。あとでサインかいてもらおう」「くそ、おれがとうとうとしたのに」

〈例3〉高一男子

E ある満月のきれいな夜、砂漠で親友同士が再会しました。
A 二人はいつしよにオアシスをさがしあるきました。
B そして水たまりをみつけました。しかし一人分くらいの水しかありません。
D 向こうの方でなにかがおちたみたいです。
C それはなにかと黒君が振り向いた瞬間、水を一人じめしたい白君は石をぶつけて殺しました。

〈例4〉高一男子

B 白「あ、あった。ここまで来てたんだね、僕たちの愛」

黒「わあほんと、こんなところまで来てたのね」

C 白「さっ、投げるよ、おもしろい」黒「うん」

E 白「僕のこと好き？」黒「うん。あなたは？」白「うん、好きだよ」

D 白「えい!!」お互いの愛を確かめ合った二人、せっかく見つけた愛をまた遠くへ投げてしまいました。

A 白「さ、行こう」黒「うん」転んだら待ってあげればいい。そうなぐさめ合い、どこへ落ちたかわからない愛を二人は二人で探しに行くのでした。

〈例5〉大一男子

A 太郎と次郎は夜の海岸を散歩しておりました。

B すると道の真ん中にきらきら輝く丸いものがおちていました。「なんだろう」。ガラスのようでもありました。

C すると突然海の高い方から「おーい、それを拾ってくれ」という声がしました。太郎と次郎はかなりびっくりしましたが、それでも丸い物を拾いあげました。

E 実はそれはクジラのコンタクトレンズだったのです。海上に出たとき、まちがってとばしてしまったのです。太郎と次郎はクジラの眼にレンズを入れてあげました。「さよなら、気をつけて帰ってね」

D 「どうもありがとう、さようなら」そういうとクジラは思いつき水にもぐって帰っていききました。後には夜だというのに水しぶきが月の光にきらきら光って、とてもきれいでした。

これらはごくごくわずかの例で、楽しい解答はいっぱい集まりました。Dを虹ととった人は多くいましたが、それはわかりやすいイメージなのでここでは省いています。

私たちははたとくすると年少の子を未成熟な存在と見なそうとします。しかしこうして年代ごとの作品に接していると、少しもそういう感じはしません。たしかに語彙は不足していませんし、構成力においても力が足りませんが、量的な未成熟であって、質の上（あるいは感性の上）のそれではないという気がします。むしろ無意識の領域から出ている発想は新鮮ですらあります。それが高校生ぐらいになると、奇抜さをねらおうとする意識が働いてきます。この二つを比べて、前者の方がすばらしいと考えるなら、子供を神聖化する方向に行くでしょう。しかし高校の年代のもやはすばらしいのではないでしょう。あまりに意識的であるためにうまくいかないう作品もあります（中学に多い）が、そのきしみ自体がおもしろいと考えられます。結論は、年代の特性に応じてそれぞれにかけがえのない営みがあるのだ——ということです。

今、子どもたちの世界は

「娘と友だち」

塚越敏雄

私が家に帰ると、小学校三年生になる次女の永が、目にいっぱい涙を浮かべていました。

「今日の体育の時間、学校で、サッカーやったのね。それで、わたしはゴールキーパーになったの。でも、わたし、足が痛かったから、飛んできたボールをとれなかったの。そうしたら、みんなが、『あんなボールは、とれたはずだ』って言うの」

最後の方は、涙声になっていました。自分がボールをとれなかったことよりも、そのことで責められたことに傷ついているのです。そして、傷ついている自分がかばい、なぐさめてくれる

友だちがいなかったことに、一層、悲しくなっているようでした。

「わざと、ボールをとらなかったの」

「うううん」

「足が痛かったから、とうろと思ってもとれなかったんでしょ」

「うん」

「それだったら、それでいいじゃない。ほかの人たちは、自分たちのチームが勝ちたかったから、永のせいにしたんだろうけど、とれなかったものは、仕方ないじゃない。それから、みんなが永のことを責めたって言ったけど、全員なの」

「同じチームの人は、全員。でも、一

人だけは、責めない人もいた」

「ほんと。責めない人もいて、よかったね」

私に話していた娘は、再び涙声になりました。

「おとうさんは、自分が責められたわけじゃないから、わたしの気持ちが、わかんないんだよ」

一瞬、ぎくつとしてしまいました。

娘には、まだ自分の気持ちが理解されていないという思いが強く残っていたのです。もっと身を添うようにして話を聞いてほしかったのかもしれない。自分の心の傷が充分いやされるまで、自分を暖かく包み込んでくれるものを求めていたのかもしれない。

最初、娘の話を聞いた私の心の中には、「こんな小さなことで傷ついてしまうなんて。これから先の方が、もっといろいろなことがあるんだよ」という思いがありました。「友だちに責められることぐらいよくあることだよ。

気にしない、気にしない」「生きていく中では、じつと一人でがまんしていかなくてはならないことがあるもんだよ」「傷ついた自分にできることは、じつと耐えることと、他の人が同じような立場に立たされたとき、かばってあげられることだよ」という思いもありました。けれども、そんなふうに思うのは、いろいろな経験を経てきたからかもしれません。現に今、涙が出てしまうほど傷つけられてしまっているわけではないからかもしれません。

まだ泣きやまないでいる娘に、「その気持ちを作文に書いてみたら」と言ってみました。娘は、うなずいて、自分の机に向かいました。

今日、体いくの時間におこったことでした。わたしと、さあやちゃんが、ゴールキーパーでした。

池田くんがシュートしました。わたしの方にむかってきました。とうとうと

思いました。けれども、足がいたくて動けません。さあやちゃんが、こわい声で、「はーちゃん」といいました。ボールがゴールの中になりました。

すこしたつと、林君が、「ボール、とれたのにな」といいました。

だい二しあいを、めぐみちゃんといっしょに見ていました。となりにすわっていた、おのだ君とうまはし君が、「あのボール、とれたのにな」といいました。なみだが出そうでした。

きょうしつにかえると、二はんが、「あのボール、ぜったいとれたのにな」といっていました。わたしに、むりにいつてるみたいでした。

帰るときは、わたしは、なみだをいっぱい目の中にためていました。

家についたとき、だれもないのにかくれてなみだをながしました。みんな、わたしの気もちをしらないから、あんなことを言えるんだなと思いました。かがみを見ていいました。「はる

かがわるいんだ。はるかがいけないんだ」。かがみにわたしの顔をうつしなから言いました。かがみに言いかけないようにしました。「わたしがいいけないんだ。みんな、わたしがいいけないんだ」なみだがとまらないから、なんどもハンカチでふきました。

おかあさんが帰ってきたとき、なみだがいっぱい出てきました。これまでもこらえてきたなみだなんだなあと思いました。

娘は、友だちによって、ひどく傷つけられていました。けれども、友だちというものは、別の時には、娘を励まし、力づけてくれます。残酷でもあり、優しくもあるのです。

次の朝、娘は、いつものように、先に出かける私たち両親を、明るい顔で見送ってくれました。

(横浜市立港南台第三小学校)

経済の目

生活サイドから見た経済

生徒の疑問に答え

共に経済を学んで

きた三年間

福島澄香

今回が最終回なので、この三年間を振り返ってみたいと思う。取り上げたテーマは「貿易摩擦」「現代の貧困」「間接税」「福祉」の四つであった。これらの社会経済現象と社会経済的行為は深く私たちの生活に関わっており、現代の政治動向とも複雑に絡み合っている。しかし、それらは限りなく複雑で混沌としたカオスの世界で、その本当の姿（本質）をなかなか見せてはくれない。従って「まとめ」など書けるわけがないのだが、一応テーマを追って振り返って見る。

●貿易摩擦

戦前、日本の紡績会社の綿製品のダンピングは世界のトップにいたイギリスのランカシャーなどの紡績業を倒産させる一方、その安い日本の商品は女工哀史で名高い日本の女工さ

んたちや日本軍と共に中国に進出した日本の紡績会社を使う中国の女工さんたちの低賃金労働によって支えられていた。この「貿易摩擦」は第二次世界大戦の一つの原因になったと言われている。

現代日本の大企業は高度な技術を持ち、低賃金・長時間労働に耐える日本の勤労者と、進出先のアジア諸国民の低賃金労働によってダンピングを支え、世界中に貿易摩擦を引き起こしている。ダンピングを支えるのは日本の劣悪な労働条件と低賃金労働だけではない。このダンピングの陰に摩擦の圧力を回避するため日本の石炭産業や農業（米・牛肉など）が犠牲になっている。日本のエネルギーや食糧の生産原点である炭鉱や農村が潰されゴーストタウン化されようとしている。

その国の政治と経済の自立性は密接に関連しているが、先進七カ国（G7）の中で日本のエネルギーと食糧の自給率の低さは特に目立っており、砂上に立つがごとく心もとない。

●現代の貧困

日本の国民所得は、一九五〇年に比べて一九八七年は約七倍にふえ、アメリカと同一水準になった。日本の大企業や高所得者の名が世界の長者番付にも名を連ねる一方、日本の勤労者の実質賃金はアメリカに比べ大変低い。アメリカは直接賃金だけでなく、私的保険など経営者の負担する準賃金部分（間接賃金）も日本より多い。

今、為替相場では一ドル一二〇円台だが、円とドルをそれぞれの消費者物価による購買力で比較すると、アメリカでの実際のドルの購買力は一ドル二四〇円で消費物価も安く、土地・建物などは日本と比較にならない位安い。さらに労働者の生涯労働時間（一生働く時間の合計）は、アメリカが七万六千時間、日本が十萬九千時間と日本人はアメリカ人より一生に四割以上も長い時間働いている。物価、教育費、住宅費、余暇、下水道・公園と私たちの生活の豊かさの程度を考えると、国民所得が同水準のアメリカやスウェーデン（公的福祉）との差は大変大きい。

●消費税

ヨーロッパの前例では消費税が実施されると税金分以上に物価が高騰する。消費税の税率は簡単に上げられるので、政府が何年かおきに税率を上げるのが通例である。今年も企業収益が良く法人税は大増収で、その増収分だけで三兆円以上という。それでも政府は低所得層に特に厳しく、マスコミ調査でも評判の悪い消費税をあえて実施しようとしている（'88年12月24日夕、税制改革関連六法案は成立した）。

●福祉

受益者負担、自助努力が強調され、公的年金や社会保険が減らされ、その掛け金は増え、私的保険、私的年金、互助会などが前面に押し出されてきた。これはアメリカ・日本型の

社会保障抑制策と一体で、国家予算では、その分、軍備や海外援助（アメリカや日本の資本が輸出されてる国への）に回されると言う。

貿易摩擦①月謝が払えない'86・4月号 ②アジア諸国との関係5月号 ③アメリカとの関係6月号 ④円高ドル安7月号 ⑤お母ちゃんがかわいそう8月号 ⑥世界企業番付を見て考える10月号 ⑦円高差益11月号 ⑧石炭問題を考える'87・1月号 ⑨主食を投機に委ねてよいのか2.3月号

現代の貧困①歯止めを失った防衛費'87・4月号 ②家計をおびやかす売上税5月号 ③家計をおびやかす円高不況6月 ④円高不況と失業率7月号 ⑤円高不況と購買力平価8月 ⑥⑦学校現場から見た前川レポート(1)2・12月号 ⑧転換期にある職場'88・1月号 ⑨余暇と労働時間2.3月号 ⑩労働時間の短縮は夢のまた夢なのか4月号

消費税①生徒たちの税金への疑問'88・5月号 ②「薄く・広く」は不公平6月号 ③新型間接税と家計7月号 ④消費

税などへの疑問8.9月号
福祉①高齢化社会の負担と国民所得の増加'88・10月号 ②私的保険や私的年金が増える11月号 ③アメリカ・日本型福祉と北欧型福祉12月号 ④スウェーデンの教育福祉から日本の現状を見る'89・1月号



アメリカの共働き夫婦は今

⑮ 日常性の中の性差別主義

アメリカの六歳以下の子供のいる共働き夫婦の事例を十四回にわたって紹介してきた。アメリカでは女と男の社会的関係の新しい変化が一九七〇年代に始まり法制上の男女平等はこの間さらに進んだ。そして女の男に対する意識、態度にも変化があつた。女性の職業進出が進むなかで、男たちの家事、育児の役割分担と意識変革は遅々として進んでいない。それでも日本に比べれば、アメリカの男たちの性別役割に関する役割流動化は著しいものがある。イギリス等に比べてもその変化は顕著であり、文化的柔軟性がうかがえる。

しかし紹介したいいくつかの事例からみてもわかるよ

うに、行動レベルでの変化は確かにあるが、意識の内奥に入ってみると、その行動レベルとは異なつた不安、葛藤、矛盾のあるらしいことが見えてきた。それらも、女の側により強く、子育てと仕事の間に引き裂かれた心理がある。たとえ妻の方の収入が夫のそれを上回っていても、夫の側には「自分が主な経済的な柱である」という意識がどこにあるケースがほとんどであり、特に子をもつ男たちの父親意識は主にその経済力によって支えられているといつても過言でない。夫たちの中には、妻より手際よく夕食準備、後片づけ、買物をこなす人々がいる。しかし彼らは、自分が、妻より多く家庭内のことに関わっていても、家庭管理者は自分だとは決して言わない事例ばかりであつた。自分がハウスハズバンドであることを堂々と、誇りをもつて言える男に出会えなかつた。子育てに人間性の回復とリフレッシュメントを見い出す男たちはいた。しかし彼らには女たちの抱く子育てと仕事との二重拘束感や心理葛藤は見当たらぬ。女にとつては、一日のうち朝夕二時間程しか子供に接することができないということは罪意識の一因となる。何時間接すれば充分かについては全く個人によつて違う。平日幼児の活動と心理発達にとつて重要な時間に共にいてやれないということを理由に、仕事をパートタイム化したいという女性はアメリカにも多くいる。仕事の子育てとぶつかり合い、あいまいな役割

だと感じるのは女の側である。男は朝夕二時間接すれば充分だと思っている。子供が六歳以下という幼児期にあつてこの男女差は顕著な例が多い。小学生高学年以上になった子をもつ母は、幼児期に抱くようなきびしい葛藤には悩まないし、国家的に乳児期から全日保育をする社会や共同体にあつては母たちの間に日中ずっと外で働くことについては何ら心理葛藤もないようだ。保育施設、制度、慣習の変化は母親意識を全く変える。こう考えてくると、幼児をもつ母の抱く引き裂かれた感覚は、社会的環境にかかわらず存続するものではなく、変えられるもののはずだ。

しかしまだ、今日のアメリカでも女たちがフルタイムの仕事をもちつつ、家事・育児をも遂行しようとする努力は涙ぐましいものがある。いくつもの事例で、その過重役割故に健康を害するというエピソードが語られている。体力の限界をかけてまで、女たちが家事・育児に骨身をけずる女の心理が内面から変えられるのはいつのことだろうか。女らしさがつくられてゆく過程で刷りこまれた役割意識や捏造された母性神話を越えてゆく契機は何だろうか。七〇年代のアメリカを席卷した新しいフェミニズムでは、女たちの内面化された女らしさと、それ故の女のエゴの破壊を看破した。「女は子を産むことができるのだから子育ては女の義務であると刷り込まれる。だから女は結婚して経済的に依存し、男に従わねば

ならないと教えられる。性交もまた女の選択によるのではなく、義務であると女たちは教え込まれる」(『エゴの政治学——ラディカル・フェミニスト宣言』一九六九年)と、女らしさの内面化が女の個人としての自己の確立を妨げていることをフェミニストは指摘した。この新しい自覚は次第にアメリカの女性たちの心の中に浸透していきつつある。つくられた女らしさ神話からの解放なしには母の心の中にある引き裂かれた感覚はなくならないのだ。

一方男たちはどうだろうか。男社会を支える男自身、幼児期から家族の支え手としての父をモデルに「父にとつてのトロフィーとして」男らしさの神話に拘束されて、女以上に規制を受けて育てられる。フェミニズムに理解を示す男たちは男社会の中の男権主義を内部告発し、伝統的女役割を担おうと努力する。しかしそうした男たち自身が、個々の性差別排除のための努力にもかかわらず、この社会で男として生きること自体が、男権社会を支えてしまっていることに気づいてしまふ。男であること自体が主導的地位を占めるという社会に気づいてしまふのである。男たちは他の性からの(「女からの」)抑圧や暴力による脅威や、からかいを体験したことがない。従つて男権主義を男の側から告発するために男が階層として団結する必要性を男は感じていない。近年アメリカで男性同性愛者たちが男社会≡異性愛強制社会に対して批判の

声をあげた。これらの男たちのスピーク・アウトはその他の性差別反対を唱えるリベラルな異性愛の男たちをとまどわせた。男が家事育児をする、「あいつは結婚してからホモになった」と他の男たちから——紹介した事例ではその男の父から——非難され、からかわれる。男性・女性の二つのジェンダーにかかわる文化装置の中で性差別主義を告発するのが女でしかない今日の状況では、その加害者である男たちをどのような形で巻き込めるのか展望がない。それでも誠意と努力でフェミニズムを支援する男たちは、心の中で矛盾と混乱に悩まざるを得ない。(The Limits of Masculinity A. Tolson)

女性解放のために闘い、男権社会を批判する男たち、そして男らしさの神話から解放されたい男たちの運動もある。しかしこの運動の中にいる男たちは、自らの中のパラドクスに氣付いてもいる。紹介した事例の中に何人かの夫は、妻の仕事をサポートし、地位向上を望んでいる。しかしながら、妻からの自分への期待は実は『男がもう経済的支柱である必要はなく、家事責任者たること、子育てを担う者となることであるというものであるかもしれない』ということにはふれたくないという様子が夫たちの言葉の端々にうかがえるのである。これは、男が今の地位と役割を確保し男権社会で男でありつづけつつ、女性解放は達成し得るのかという問いとも並行している。これは論理的には根本的な矛盾であることは確かだ。

それでもなお矛盾と、混乱と不安の中でアメリカの女と男は家族を大切に思い、子供を育て続ける。「結婚し、家族をもつことを一番大切に思いつつ、それをとてもしいいものだと思いつつ、そこから抜け出したいと思っている」——「こんな中では本当によほど努力しないと結婚生活なんて続けられないわよ。時間も手間も結婚生活を続けるにはかかりすぎよ。もし自分にプライドがなければ、そんなことに手間ヒマかけるなんてできないことですよ。荷物まとめて出ていった方がずっと楽ですよ」という事例の中のことばは、子育ての真ただ中にある親たちの本音かもしれない。女と男という異質な者どうしが、今日の男社会の中で個人的関係において平等になろうとする努力は、論理的には不可能だろう。しかし、経済第一主義でない理想郷としての社会主義を実現させ、男権的でない性差別のない社会を達成できるまで全てを休止しておくことができないのなら、女も男もこの矛盾を生きぬく術を日常性の中に見い出してゆかねばならない。「体制変革のためには日常性の、個人的なことに問題を矮小化させてはならない」のではなく、日常性の中の女と男の関係性の矛盾を真正面から見つめ、その細部に至るミクロな神経戦にも似たポリティックスを語り継いで明らかにしてゆく作業なしには、性差別はまた姿形をかえて、どのような経済・政治体制にも残存し続けるだろう。

朝鮮通信使

京都の泉涌寺で「朝鮮通信使」の絵図を見たのはいつのことだったろうか。それはうす暗い部屋にあった。その時、華やかな行列の有様に目をこらしていた私の頭の中もまた、その部屋と同じようにうす暗いものであったと思う。私は「通信使」について、全く無知だったのである。

当時教師であった私は、生徒たち
に江戸時代の鎖国政策を語りながら、オランダと中国とは通商していたと教えるのみで、その時、唯一の
国交の相手国が朝鮮だったことについて、全く教えることができなかったのだった。教科書に通信使が登場するのは、かなり後のことである。

通信とは、^{つうしん}誼を通じるという意味である。秀吉が朝鮮侵略の過程で倒れると、次に天下をとった徳川家康は、すぐに朝鮮との国交を回復しようとしたが、侵略の深い傷あとの癒えていない朝鮮は、当然のことながらそれを拒絶した。家康の熱心な努力が実るのは七年後、一六〇七年のことである。日本の使節に対する回礼使が来日した。それ以後、朝鮮での新国王の即位や、幕府の將軍交代のたびに、祝賀使節が交換さ

歴史の窓

岡 百合子

れることになったのである。一六〇七年から一八一一年まで、一二回にわたって朝鮮通信使が江戸まで来た。対馬までの使節になると五十回に及び、釜山には「倭館」がおかれて、日常的な交易も営まれていた。

徳川幕府は、通信使に礼をつくした。接待を命じられた大名は、迎賓館を新築し、道路を整備した。御馳走の準備も大変で、朝夕の膳は七五三といつて、本膳に七色、二の膳に五色、三の膳に三色の料理をつける豪華なものだった。

朝鮮は、使節に一流の人物をえらんだ。この人たちの交流に、日本の学者や医師、僧侶らが多大の期待をよせていたからである。彼らは使節に漢詩の交換や書画の揮毫を求め、儒学や医学の新知识について質問をあげせかけた。

通信使の記録はたくさんあるが、中でも、徳川吉宗の將軍職襲位を祝う使節団の一人だった申維翰の「海游録」は出色である。これら日本の「文化人」との交流を、とくに皮肉をまじえながらも生き生きと描く、彼の武士を見る目は厳しいが、庶民に注がれるまなざしは暖かく優しい。日本の庶民もまた、この異国の客人を何のわだかまりもなく迎えている。この貴重な記録をよむとき私は、明治以降の日本人が失ったものの大きさを、改めて思わずにいられない。

共学家庭科への糸口 その3

教科「総合技術教育」の積極的支持者は、現代の教育の持つている問題を少しでも解消する投石と受けとっていた。しかし、関係教科の先生方の中には、自らの教科のよって立つ基盤が失われると嘆き、家庭科の先生方は、社会科のような内容では、従来の家庭科教育がおこなってきた技術教育はどうなるのかという危惧の念を抱いたり、家庭科の先生はいらなくなるのではないか、選択科目などは消えてしまうのではないかなどなど、さまざまな反応が返ってきた。

この運動を推進している組合や教文会議では、教育現場での混乱を防ぐために、「総合技術教育」は遠景目標とし、当面はそれぞれの教科の自主編成をすすめるというまとめをした。家庭科については、男女共学の「生活科学」(家庭科の意)を、さしあたって2単位、可能なところは4単位設定するという、取り組みの軌道修正がおこなわ

れた。

では共学の内容はどうするのか、その教案を提示しなければならなかった。その当時、高校ではユニークな手法で共学の家庭科を実施していた東京都立文京高校への見学をさせていただいたが、一方で内容を提示するための資料集作りも始めた。教文会議として「総合技術教育」を考え「生活科学」を提案したことから、資料集作りは、家庭科担当者だけではなく、国・社・農・工・商の先生方にも編集会議に加わっていただき、一九七二年秋に400ページにおよぶ教授資料を作りあげた。男子にも教えたい内容、従来の家庭科教育に欠落していた社会科学的分野、公害、自然破壊なども盛り込んだ。

その教授資料を、350円ほどの価格で、教文会議の会員全員に配布、購入してもらい、教育課程検討の俎上にのせた。「何でもこんなものを買わなければならないのだ」と文句を言う教科の先生も相当数いたが、「いまだかつて実施したことのない教科の大転換をはかろうとする時には必要な措置」と教文会議は判断をしていた。ダルマになるほど座り続け、寝る間をさいて書きあげた資料集は、家庭科研究会を組織し牽引する立場にいる者にとって、大変によい勉強の素材になったし、自信にもつながった。この無から有を生み出す作業があったからこそ、現在も県内で使用している生徒資料を発刊しつづけることができたのである。

(30) 女性生涯教育時代へ 二十一世紀へ向って自立と社会参加

「生涯教育」の言葉は、'65年、ユネスコ本部主催の「第三回成人教育推進国際委員会」で、同本部教育局長ポール・ラングランが「生涯教育理論」を提起した後、一般に唱えられだしたと言われる。日本でもそれ以来、盛んに生涯教育の必要が喧伝されて、文部省内に「生涯教育局」まで設置された。

しかし、実はユネスコより数年早く、生涯教育の必要が主張され、その実践に踏み出していたのはアメリカ、しかも女子教育界であったことはあまり知られていない。'60年ミネソタ大学に、一般社会の女性を対象に「ミネソタ・プラン」と称された生涯教育構想が、カーネギー財団の援助を得て開設されたのを皮切りに、同年、ハーバード大学内にも、ロックフェラー財団の援助で、結婚・育児等で研究中断を余儀なくされた有能女性等の再教育―社会復帰を目指したラドクリフ研究所（現メリー・バンティング研究所）が創設された。また'62年にはやはりカーネギー財団の援助で、名門サラ・ローレンス女子大学に、社会人女性を対象とした正規の大学コースである「継続教育センター」が設置され、同年、同財団の援助

を目標にした再教育プログラムが開設された。これらの女性対象の生涯教育運動は、たちまち全米に拡がり、十年後には全国約四百五十大学で何等かの女性生涯教育プログラムが開設されていたのである。

このような生涯教育の急速発展の背景には、寿命の伸長による女性のライフ・サイクルの変化、家事の省力化及び少産による余暇時間の増大、子育て後の生き甲斐や自立問題、高学歴化と能力の活用要求、急速な技術革新への対応等々の女性を取巻く環境の変化があったが、このことは我が国においても同様の状況であって、生涯教育へのニーズは年々高まって来ている。'64年日本女子大学に附設された女子教育研究所も生涯教育を中心テーマにしているし、東京女子大学でも同窓会や附設比較文化研究所主催の公開講座を行うなど、今日多くの大学で社会人対象の生涯教育講座が開設されている。その他社会教育関係行政や民間主導のものなど生涯教育花盛りの観があるが、女性の自立や社会参加がより多く期待される二十一世紀に向って、一層その充実が望まれるであろう。

下にバーナード女子大学内に東北部名門七女子大学卒業生共通の社会復帰

ワンポイント 近代日本女子教育史 秋枝蕭子

ある誤解の話

田川建三

女として男

大阪の読売新聞婦人部から電話がかかってきました。この女性記者たちはいつも良い仕事をしておいでで、私は大好きです。学校の男の教師が教室で女性問題にどう取り組んでいるか、という記事を書くのに、しかし、教室で良心的に女性問題について発言しようとしても、実際には自分は男中心の家庭生活をいとなんでいるのだから、発言がどうしても抽象的になる、と言われる。それについてどう思いますか、というのです。

ところが、その質問に対する私の答が新聞にのつたのを見てびっくり。まるで正反対ではありませんか。「家事や育児をすべて分担するという理想論を言うより、いままで女性の立場を理解できていなかった自分を生徒の前でさらけ出すことで、自分も変るし……」。後半は、私の言った通りです。しかし前半は正反対。こんなせりふを田川建三の意見として書かれては、困ったことです。もちろん、男も女と質量ともに同等に家事・育児を行なうのは、当り前であって、単なる「理想論」などではありません。特に学校の教師ならば、男もそのくらいは当然できるはずですよ。それは多数の女性教師が毎日やっていることです。た

だ私は、毎日夜の十一時に帰宅するなどという労働条件の男たち（教師ではない人たち）のことをふと思いだしながら、まだまだ多くの男にとっては、完全に五分五分というのは「実現できない理想かもしれないが」、しかし、世の中は当然そうならねばいけないのだし、男たちは人前で、そのようにいたしましょう、と語ることによって、語った以上は実際にやらざるをえなくなるから、胸をはってどんどんそのように主張すればいいではないですか、と述べたのです。

それが、「理想論」を言っても仕方がない、という意味に受けとられたのです。この誤解は二つの重大な点を含みます。家事・育児を男も同等にやるのは当り前、という常識がまだまだ自然な常識として受け入れられない、ということ（女性記者でさえも誤解した！）、もう一つは、あるべき理想を語りつつそちらに向かって進むということと、単なる理想論を語る、ということとは全然違う、ということです。

しかしこのひと、まだ新聞記者になったばかりですから、こういう経験を経ながら、今後はきつと良い仕事をなさって下さるだろうと思います。

老人問題

日本は老人問題があるそうです。国民がどんな年寄りになっています。特に日本人の女性は何れでも、老後は、核家族が多い、年金や保険が安い、物価が高いというふうに変です。実際に、私もそういう場面を見ました。

最近、少し病気になるって病院に行きました。病院はロビーから廊下のいすまで、老人でいっぱいでした。この病院には、妊娠している人一人につき、老人が二人いました。

新聞によると、東京の老人が今の状態を心配しているそうです。その上にサラリーマンも将来年寄りになったらどうしようと心配しているそうです。

けれども若者は全然心配しないようです。というの、どこでも、いつでも、若者は年寄りになることを想像できません。

それにしても、現代いわゆる新人類は、老人を

不思議の国ニッポン

クイトン・ナフ

尊敬しないようです。

例えば、電車でシルバースーツがあっても若者ばかりすわっていることが多いです。シルバースーツの近くに立っている老人をよく見ました。

それでも、日本の老人の立場は、それほど悪くないようです。アメリカにも老人問題があるけれど、少し違います。65歳以上の人は、政府から年金や医療保障をもらいますが、それだけでは足りません。

お金を持っている人は、すばらしい老人ホームに入れるけれども、普通の老人は一人または夫婦で、アメリカの危険な町に住んで、おびえながら暮らしています。

例えばうちの祖父母は二十年前に定年になって、年金をもらい、ロサンゼルスに住んでいます。こわいから、めったに家を出ないようです。両親はアメリカの反対側にあるフィラデルフィアという町に住んでいますので、祖父母に年一回しか会いません。こういうさびしい生活は、日本の生活より少し大変だろうと思います。

日米両方の国で、社会的に老人問題を考えなければなりません。

四年前の六月、神奈川相模原市に住む中学三年の少年が、北海道に向かって出発。テントで野宿しながら、一ヵ月半近くかかって、全行程千二百キロを歩き通した。

折しも、梅雨時、最初の一週間は雨ばかりだった。何人もの人が車を停めてくれたのを断りながら、一日十〜五十キロも歩き続ける。パンや野菜の簡単な食事。毎日電話をかけ、葉書を出すことが、母との約束だった。

滝本倫生。'70・7・6生。自宅にたずね、お母さんと、お二人から話を聞く。いまを生きることに全力投球しているせいか過去を語るのに真黙で控え目の彼が、傍らのお母さんの説明に「え、僕、あのときそんなこと言ったっけ」「さあ、忘れちゃったよ」と「異議申し立て」をするのがほえましい。

北海道には、ほんとうはヒッチハイクで行って山登りをしたかった。が、家で反対されたこと、まず歩く訓練から、と思ったこともあって、計画を変更。ことの発端は、修学旅行に四万円もかかるのがもったいない、それぐらいなら、かわりにテントを買って山へ行きたい、と思ったこと。その日に備えて、毎日学校から帰っては十キロのリュックを担いで、寝るまでおろさない生活が続く。

お母さんは、彼を送り出してすぐ、担任にその由を報告。早速、呼び出されて、学校側から「受験で大切なときに、よこにそれる子がいると動揺するから、留学したことにしてほしい」と。

出発前は、帰ったらまた学校に行くつもりだったが、北海道でキャンプに参加し、いい仲間ができた。学校をやめて来ている子も。

青春ZIGZAG



山に魅せられた

みち お
滝本倫生さん

学校の友だちとは、いっしょにゲームセンターに行くぐらいで、特に面白くなかったから学校に戻る気にならなかった。

小さい頃から「科学少年」。「○○入門」の本がズラッと並ぶ凝り性。オーディオの会社に入るのを目標によく勉強し、よくできた。それが中二の秋に友人と丹沢に行って以来、山に魅せられ、他はどうでもいいと思う。

学校からは頻繁に呼び出しがかかる。「来させないのは親の責任」と言われるが、当人が卒業証書などいらぬと言っているので脅しにはなりえず、学校も困惑気味。倫生君は図書館通いの日々。成長していること、本を読んだり考えたりしているのがわかっていたから、不安はなかったとお母さん。小さい時から自分を通す子だったし、北海道まで歩いてからは、もう任せるしかないと思ったと。

高校へは行かず、北海道で働いた。牧場・測量の仕事・冬の郵便配達。十六歳というときと決めたが、それでも自分で見つけた仕事。海外遠征の登山隊に参加できる十八歳になって相模原に戻ってくる。今はガラス磨きのアルバイト。登山仲間に囲まれた職場だ。

仲のいい弟の佳成君は、自由の森学園高等部一年。片道二時間半かかるというのに、オーディオ製品を買うために早朝の新聞配達。時間が足りないかと嘆くそうだが、ステレオと練習中のフルートの音色が響きわたり、これまた「余裕」。

独りで生きぬく力と、周りにまどわされぬ確固とした自分——今の子どもたちにとっての恐らく一番の難題をいとも簡単にクリヤーして生きている少年たちだった。(稲邑恭子)

もうちゃんぽ、がんばらいやー

「やったぜ、最終回。」

チャーリーあとはよろしく」

バイトもようやく軌道に乗りはじめた。経済的に切羽詰まった状況から脱出し、巷の忘年会シーズンともぶつかって最近、飲みに行く機会が増えた。高校時代の友人、大学時代の友人、バイト先で知り合った友人などなど、つきあいで飲むことはまずないのでお酒も料理もうまい。

先日、友人たちと飲んでいて一人のおじさんにかまれた。「息子のことで若い人の考えを聞かせて欲しい」と。同居している大学一年の息子はなしが始まった。その時私はふと自分の学生時代を振り返った。

一人暮らしの学生生活は楽しいものであったが、時折親元から通う友人を羨ましく思いました。毎月毎月家賃や光熱費の出費を考え、腹が減ってくる、買物からはじまって食

事の仕度、後片付けと生活臭さがあるので。東京育ちの友人の生活臭さのなさが、若い自分にとってはとても魅力だったのだ。同居の不自由さを聞かされはしたが、それは単なるわがままにしか聞こえなかった。

私は、「もし可能なら一人暮らしをさせてみたらどうですか」と答えた。現在このように言えるのは、生活臭さや羨望も含め若い時の一人暮らしの経験が、生きていく上で何事にもかえることのできない体験だったと実感したからである。

大学時代の友人との飲み会の話題は専ら「自分たちの手で何かをはじめよう」だ。各自が案をもっていてその方向性が違うから、いつも激論が交わされる。そんな中で、「一人暮らしって、病気になる」ときつらいんだよな」の友人の一言には、皆がうなずいていた。集まる連中は何故か皆一人暮らしの身で、少なから

ず経験があったのだ。「それをビジネスにできないかな。誰かが言ったけれど、私は賛成できなかった。若者の一人暮らしの場合、彼らの多くは店子である。大家がいるはずで、金など介在させずに解決して欲しいことなのである。私にとっては。

困った時には助け合う、それが大家と店子の関係であり近所づきあいだと思う。私は「人情っぽい」の大好きだから、そういう関係に金を介在させるビジネスはしたくないのだ。

「君には枠がありすぎるよ」。友人に鋭く指摘された。枠ならば取りはずしたい。しかし、これは私の根っこ。どれくらい深くどれくらい広くはっているのかわからない根っこ。「自分でやりたくないことはやらないほうがいいよ」は恩師の弁。『金さえだせば』『金さえもうかれば』という風潮の世の中だからこそ、私はこの根っこを大切にしたい。

はなにつき

藤尾

知子

あんず

室生犀星

あんずよ

花着け

地ぞ早やに輝やけ

あんずよ花着け

あんずよ燃えよ

ああ あんずよ花着け『小景異情』

この詩が発表されたのは大正二年五月、作者二四歳の時である。『小景異情』というところから、さうは遠きにありて思ふもの／＼そして悲しくうたふものゝが余りに有名であるため、影がうすいが、私は「あんず」の詩を読む時若い詩人の輝く感性和、青春

の命のみずみずしさに顫える。犀星の幼年期は決して明るいものではなかった。加賀藩足輕組頭小島弥左衛門吉種と女中はとの間にできた、望まれない命であった。生後すぐに赤井ハツに貰われ、後にその内縁の夫であった室生真乗の養子となったので、以後室生姓を名のった。この『小景異情』は悲しい過去を捨て、まさに飛びたたんとしている時期のもの



のである。

杏の花を見たことのなかった私は、その響の中に、さわやかでいて、どことなく物悲しい甘ずっぱい青春を感じていた。三年前ようやく長野であった杏の花は、梅と見違えそうな静かな花で、何か肩すかしをくったような思いがした。しかし、眼前にくりひろげられる雪国の春は、梅も桜も桃も否もチューリップまでもがいつせいに咲き競っていた。その喧騒ぶりに一瞬とまどい立ちつくす思いであったが、まさにこれが苦しい冬を耐え抜いた歓喜の命なのだと思つた時、「あんずよ燃えよ」と心の中で叫んでいた。この詩を口ずさむ人は誰でも、犀星の二四歳の若々しい息吹に触れることができる。

芸術は永遠だと言う。しかし絵画などは作者の手が触れて、生まれたものでなければその命は伝わらないが、文学は書き写すという行為があれば、すべての時間を飛び超えて作者の心は真新しいままに甦り、私達と直接語り合うことができる。嗚呼、文学はすばらしい。

人間ってすてきだ。

(カット・宮永由美子)

よそおい

春が近づいて嬉しいこと、それは重いコートやセーターにサヨナラ、Tシャツにコンニチワでできること。雪の下からやつと芽を出した植物の感覚って、こんなかなあ。いやあ身が軽いつていいことだ。この勢いで籠もって若菜摘みに行きましよう。春のお勧めはタンポポサラダ。ほうれん草を小さくしたようなタンポポの葉は、美味しい！ ついでに土筆のおひたし、なんて段々気分が良くなって、一年間「よそおい」を読ん

で下さった皆様に
贈物をしよう！
と書くと、すぐく
期待するでしよ。
しかしこれにはル
ールあり。まず一
番好きな木綿の服
をきて野原に行く。
できたらバフバフの服がいい。制服、ス
ーツ類はベケ。この手の服がない方、11月号の浅井さんのペ
ージにバフバフパンツの型紙のつてます。ちくちく作りまし
よう。制服でも長すぎるスカート、太すぎるズボン等は歓
迎。野原で花を髪にさしてダンス・ダンス・ダンス。タンポ



春の女神たち
いかに優雅に舞うか

ポ色の髪もすてき！ あら不思議あなたのポケットに、遙か昔失われ、読んだ人はその人なりに自由になれるという幻の詩が……。この贈物透明ですからうっかり落とさないでね。

忙しくて野原で十分踊れない方に、特別誌上ブレゼントは谷川俊太郎さんの木綿私記（抜粋）です。へすべてのズボンはジーンズに憧れる／多分一九五〇年代の或る日／ジョン・コリアはそう書いた／はたちを過ぎたばかりのそのころ／ぼくは銀座裏の「ジュリアン・ソレル」で／貴重な一本のLEEを手に入れた／世界の座り心地が急に良くなって／コンク

リートが大地のようになまめいたが／まだモノラルだったLPで／ペラフォンテの「コットン・フィールズ」を／くり返し聴いたのもそのころで／ジーンズのブルーは綿花摘みのブルースと／切り離すことができなかった／そのブルーは日本の藍に似ていて／明治生まれのぼくの父は／めくらじまのものペを愛用している／およそ三百年の昔この国に綿栽培が始まり／麻に代って木綿を着るようになった人々が／その肌ざわりや染めのおかげで／へ昔より一段と美しくなったと一九二四年／柳田国男は「木綿以前の事」で述べたが／木綿はいまだに贅沢なのだろうか／夏には蟬の羽みたい薄い手染め／冬には軽くてあたたかい綿入れ／ぼくはインド木綿を愛用するけれど／それはおしやれであり実用である前に／のつびきならぬひとつの生きかただと思



波 ——みんな一緒に成金踊り——

半田 たつ子

一九八八年十二月十八日(日)の朝日新聞、四面はおもしろかった。「TV時評」を評論家・田原総一朗氏が、「私の紙面批評」を、東海銀行

会長・加藤隆一氏を書き、「メディアの顔」で「HANA KO」編集長・椎名和氏が語っている。田原氏は、議院証言法改正によって、リクルート事件国会証人喚問が、テレビでは動かない画面と音声の中継になったこと、NHKと日本テレビ以外は、中継放送を断念したこと、そして遅ればせの抗議を衆参両院議長あてにした問題を書いている。

ロッキード事件の証人喚問が「集団つるし上げ」的だったために、議院証言法が改正されたというが、それはテレビのせいというより、議員の質が低すぎるからで、「議員たちのあまりの質の低さが露呈するのを恐れてテレビを締め出した——」で、思わず笑ってしまった。

財界人の加藤氏もリクルート報道に触れているが、こちらは、新聞報道は多分に魔女狩り的だと言う。中曽根元首相の発言とよく似

ている。「新聞報道がムードに流されたり、ムードを創り上げてしまうようなことはまずい」とも述べている。

ところが、二十七歳の女性を中心に、東京駅から百キロの範囲で売るという「HANA KO」編集長は、都会女性のオジサン化・お母さん化する。「オジサンが荒らした銀座や渋谷のバー」の情報を与え、「お母さんたちが食べているおいしい昼食——二万円の懐石、三千八百円のかき揚げ定食」を体験しようとする読者に、「気取りや緊張不要、本当のしにせは気取らない」と勇気づけ、「二次会必須・銀座のデイスコ」では、「銀座はとてつもないゆけそうにない学生ノリに侵略されている」と、大人を意識させてあげるのだそう。

12月22日号はもちろん「海外逃避号」。

その椎名氏が、最近の若い女性を「変革を一切求めない。精神構造がどんどん保守化していく感じ。七〇年代のあの変革を意識した時代と比べて考えてしまいます」と評す。

この日、別面の「さんでーすぽつ」とは

土曜とイブが重なった今年は、都内の主なホテルは、一、二ヵ月前から予約で満パイとあった。浦安では「デイズニールランド」東京ベイ・ヒルトンの夜景つき食事↓ベッドの完備きなセツトアップ(八万円)が、どんな不器用な人にもできる「恋人とすごすイブの夜」なのだそう。これを二十五、六歳の恋人たちは、ある種の洗練と、それなりのリッチさを備えた形で、マスゲームのように見事にそろって進行させる。「さすが経済大国。メリー・セツトアップ・クリスマス！」と結ぶ。



前日、12月17日、和光大学の井上輝子氏を中心とする「女性雑誌研究会」の座談会に参加した。日本・メキシコ・アメリカの女性雑誌を中心に、60誌について分析比較した二年がかりの研究成果が、近く単行本として世に出る。その一つの章に予定されている座談会である。テレビの分析診断を十年続けているFCTの鈴木みどり氏も加わった。

〈女性雑誌の誌面は、おしゃれ・くらし・生

き方・余暇・できごとの五分野より成る。三
国ともに雑誌は、「読む」から「見る」に転換
しているが、特におしゃれへの言及率の高い
雑誌で、ビジュアル化の傾向が著しい。おし
やれ雑誌は特に日本に多い。ファッション・
ページが期待する女性の役割割は、各国とも
若さ、美しさで、モデルは白人ないし白人系
が多い。アメリカやメキシコのモデルはほと
んど無表情なのに、日本では読者のほうを見
てほほ笑んでいる。かわいさがより期待され、
その上に日本独特の気配り・サービス・おま
けといった「おせっかい文化」に対応してい
る。読者は、手とり足とり、お膳立てをして
もらわなければ、自分自身では何もできない
受動性が身についていると見られている。

さらに、瘦身・整形広告は日本誌に圧倒的
に多く、「太った身体はいけない」という価
値観を広告が作り出し、「美しさが義務とな
るような社会」を作る。瘦身・整形広告は、
白人とハーフと思われるモデルが39%で、顔
が小さく、くぼんだ眼窩、スリムでグラマー
で、肌白く、これが「目ざされるべき価値」
となっている。しかも白人モデルなのに、な
ぜか黒い髪の持主だ。

仕事について、控え目な行動を薦めないア

メリカ誌に対して、日本誌は、「目立つ行動
は控えよ。出るクイは打たれるから。職業上
の成功をつかむことは期待せず、仕事はお金
を稼ぐこと」と思うように仕向けられる。

男が料理・育児に関心を持つのは、仕事人間
としての自分の人生に多少の彩りを添えるこ
と、男女がともに働き、家事・育児を共同で
営む協業的男女像の実現はまだまだ先、と思
わせる編集。読者は手とり、足とり、お膳立
てをしてもらわなければ、自分自身では何もで
きない受動性の持ち主と見くびられている。

こうして「お嬢様」志向のブリッコがぞろ
ぞろと生まれる。究極の上流階級は「天皇
家」。「お嬢様」目指してガンバってきた若い
女性には「天皇家」に熱い視線を送り始め、そ
こに、天皇の病氣という事態が発生した。い
まや、天皇は、若い女性から「かわゆい」と
見られている。



おもしろい座談会だった。鈴木みどり氏は
テレビの分析結果と非常によく似ていると言
った。急速な商業化をマスメディアがリード
する。伝統的な価値観を温存するのは、売る
ために都合よいから。記事広告も、テレビで
はCMと番組の境界がなくなりつつあると。

私は、かつて歴史に残る論戦の場であった
「婦人公論」や、自立を志向した「クロワツ
サン」がなぜ変質したのか、送り手・読み手
そのどちらに問題があったかを問い直す必要
性を述べた。「秋のつどい」で、新島淳良氏
は天皇発病以来のマスコミ報道や、記帳、自
粛騒ぎを「民主主義」との関連で話され、目
を開かせていただいた。以来、一九四五年8
月15日以後を、もう一度たぐり直さなければ
ならない思いにかられていたから。

今言えるのはこういうことだ。私たちのあ
る種のものわりのよさ、あいまいさをつきつ
めずするりと滑り込む、小状況への適応の巧
みさ、そこに問題がありはしないか。戦前・
戦中を簡単に封じこめ、戦後民主主義をとこ
とん生きることなく、みんな一緒に成金踊
りに浮かれ、退廃の坂をころげ落ちる。ころ
げ落ちながら、国際化・情報化・生涯学習な
どのイルミネーションに目を射められる。心
ときめき、カンダタよろしく、蜘蛛の糸をた
ぐって、這い上がろうとしている私たち。自
分の手で、自分の力で、急坂を登らなければ。
座談会の中で、井上さんや鈴木さんが、再
三Weの読者層への期待を語られたことも書い
ておきたい。

「いまの子どもは 『異星人』！」

—とらわれを外す—

を終えて

秋のつどいを終えて

実行委員長 鈴木 昭彦

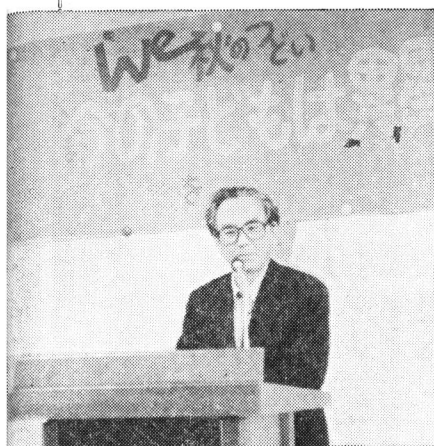
今年の秋のつどいは十一月二十六日(土) 二時~八時 中野サンプラザで行われました。全体のテーマとして「いまの子どもは『異星人』!—とらわれを外す—」を取り上げました。例年より少ない参加者でしたが、はじめて一部、二部の長時間構成となりました。この一部の前半では新島淳良さんの講演「原因が分かれば解決できるのだろうか」、後半では新島さんと平井雷太さんの対談「子どもの自己決定権」が続きました。この後半の対談では会場の参加者の意見をうかがいながら進められました。休憩後、軽食をとりながら二部が続き、より打ちとけた雰囲気の中で活発な意見交換があり、それぞれの抱える問題を出しながら、興ののった集会となりました。つどいの全体的なまとめを行うのは容易ではありません。そこでスケッチ風に当日までおよび当日の動きを書いてみます。

最初にテーマ設定までの実行委員会での議

論、これは当日の参加者の発言とも関係していますが、これに触れます。次に対談の中でも会場とのやり取りの多かった、全体のテーマと当日の新島さんの話や、その後の平井さんとの対談がどれだけかみあったのか、あるいはかみあわなかったのか、について書きま

す。
今回のテーマは実行委員のひとりであり、現在教職についている磯部さんの発言がひとつのきっかけになりました。日々接している中学生の気持ちが変わらない、考えが理解できない、交流がうまく行かないことがあることから、彼女は仮に「かれらは宇宙人みたいだ」と言ったのでしょうか。

議題に上ったテーマは他にも原発と学校教育、体の問題あるいは、女子高校生と主婦願望などがありました。論議の末、テーマが決まりましたが、この「異星人」ということは実行委員の間に様々なイメージを引き起こ



し、あるいは感じ方の違いを明らかにしました。子どもをそう決めつけるのはおかしいのではないか。自分たちとは別の存在として捉えるのはある種の差別ではないのか。大人と子どもとの間に壁を作ることになるのではないのか。どうもマイナスのイメージにしかとれない。あるいは、どうかれらを呼ぼうと、かれらをそれで分かったことにはならない、あくまでも個々の子どものしてみるべきだ。レッテルを貼るのはかえって相手を見えなくしてしまふ。さらには、かれらを異星人と捉えることで、むしろその新しい感性、可能性に賭けたい、そんなプラスの方向でこのことばを把握した実行委員もいました。新島さんが対談の中で言われたようにプラス・マイナスの面を持った両義的なテーマでしたが、多少、効果を狙った挑発的なテーマだったのでしょうか。

当日、新島さんは今までのご自分の歩みについて最初に語りました。それから中国古典を背景にされながら、言葉の持つ本来的な意味について話を進めて行きました。

例えば影響について。このことばは私たちの考える程にはインフルエンシャルではないとの指摘は面白くうかがいました。また、民主

と民主主義の違いについては、個人の不在と個人主義の蔓延を連想させ、気が重くなりました。民主がなくなると、民主主義が栄えることがあります。古代ギリシャを例に挙げるまでもありません。手続きあるいは形式民主主義に転落ないし転化し、数の支配になることは今の私達が知らないことではありません。

おそらくは小さなつながりに基礎を置く、程ほどの民主主義が望ましいのかも知れません。もっぱら二部で出たのですが、理解がなければ協調できないのか、あるいは仲良くできないのか、妥協できないのか、これも考えさせられました。

話は行きつ、戻りつしながらじっくり考えないと分からない、いや考えても分からないむずかしいものでした。参加者のひとりに言われました。「分かろうとしたけど、疲れちゃった」と。

新島さんのテーマ「原因が分かれば解決がつくのだろうか」からして人の意表をつくものだったといえるでしょう。なぜって普通には原因が分かれば、適切な解決が可能だと考えるのですから。だから新島さんといわれたように、例の中学生による祖母と両親の殺害について原因探しがあれほど行われたのでし

よう。あたかも自らが検察官であり、裁判官であり、弁護士であるかのように。かれを受け入れ、理解はせずに。平井さんからも発言があったと思いますが、自分が問題をどう引き受けるかが問われるのであって、それは実際には長い道程になるに相違ないのです。

どだい、問題のない家庭、問題のない子どもなんていないのに。今もある漫才師の息子



の傷害事件について原因探しが行われています。家庭教育が問題であったかのごとく。テレビで、雑誌で、新聞で。平井さんは対談の中で「子どものことをあれこれ議論すること自体おかしいのではないだろうか」と。

さらに講演の中で言われた、行動の人は観念の人、という場合の観念はイデオのことでしょうか。それともたんに思いつきのことでしょうか。たずねてみたいことです。ブラクシスにおいて考える、ということでしょうか。

会場では全体のテーマと新島さんのテーマとの関連性がもうひとつはつきりしない、具体的にいまの子どもの点が異星人なのか教えて欲しいなどの声がありました。他方、子どもの新しい感性のありかたに可能性、あるいは感動を覚えるとの発言も出しました。

私なりに読み取ったことは新島さんの話のポイントが、われわれの思い込みあるいは臆見のこわさ、形通りの思考のもろさであり、事柄において考えないことの多さ、そして不断にそれらから自らを解放することの大事さを指摘することであったということです。あるいは新島さんに処方せんを求めるような、他者に判断を預けるようなやり方の批判といっているかもしれません。

もしそれほどこれが外的でないのなら、全体テーマの副題たる「とらわれを外す」に結果として沿っていたことに、十分になっていたのではないでしようか。半田さんのことばにもそれがうかがえました。それにしても、

幻想の中で生かされるのはゴメンだ

第二部司会 森本 邦子

古典に精通しているひとは思索することにおいて強靱だ、と痛感しました。多くの方々のご協力に感謝します。ありがとうございました。次回はさらに充実したものを、と願っています。

「わたしはどうしてもわからんのじやが」と、八十五歳になる父はつぶやいた。

父は、人に貸している田畑からの僅かの年貢と、高校の教師だったので公務員年金とで晴耕雨読ののどかな余生を送っている。

母は一九三三年に結婚して以来家計簿をつけている。父はそれを見ながら、年間の総収入と支出、つまり、老夫婦二人の経済生活を数字で表すために、五十年以上も使い古した四ツ玉のソロバンを間違いないよう繰り返しはじけている。

「ああ、いいものあるんだよ。これおじいちゃんにあげる」と、OA機器メーカーに勤め

る私の息子は自分のカバンから小型電算機を取り出して、父に使い方を説明しはじめた。

そばで見ていた母は、「こりゃええなあ。パーセントもパッパツと出て。あんたらにあげるお小遣いも、今月の総支出にしろる割合いが、いっぺんにわかるしなあ」と、娘の顔をのぞきこんではしゃいだ時。

便利な物が次々と出て、作業する労力と時間が浮く。人間は「おお、結構なこっちゃ」と、余暇をゆったりと過ごしているのだと思いたいが、明治、大正、昭和と生きぬいてみて、「現在が一番人間がセカセカとせわし気で、くだぶれ果て、じつくりものを考えるこ

とすれめんどうになり、人間の相互不信を増大させている。それはいったい何故だ。それが父の問いなのだ。

大学一年の娘は、「情報」の量がものすごくふえているし、道具を使う時点では、ポンポンと時間短縮ができて、便利な器械を開発するため、人間の労力、器械生産のプロセスに膨大な時間がかかることを、おじいちゃん

は想像してないからじゃないの」と言った。「文明の進歩、近代化とは、人間の幸福とは比例せんといふことかいな」と、孫たちとの論戦の後、父は、古びた漢詩の書物をひっぱり出して来て寝ころんで読み始めた。

八月の旧盆に、社会人の息子の休暇に合わせて、家族が帰省した時の風景です。

大人は、子どもの知らないことを知っている。子どもは、わからないことがあれば、大人に尋ねれば答えを聞かせてもらえる。

そんな時代はもう過ぎたのでしょうか。それとも、それがあつたと思うのは、錯覚でしかなかったのでしょうか。

秋のつどいの第二部「暮らしの中の子どもとわたし」のタイトルの下に集った人々。まずは三十余名が輪になって同じ弁当を食べることから始まりました。

一部の新島氏の話が耳に残り、胸に沈み、一人一人が決して同じ思いを抱いてはいないことだけは確実なのに、喉から体内に落ちていく食物だけが同じとは。一瞬こみあげてきた奇妙なおかしさを、司会役という仮面でおし隠し、私は、「人と出会うことを期待して集まられた皆さま、日頃の思いを何なりとお話し下さいませんか」と口火を切りました。

さて、静岡の女子高校生の管理の厳しい学校の実態から派生して「行きたくなくなるような学校」から、「なぜ、そんな学校にこだわるのか」、生徒、親、職業人と、各々の立場から活発な意見が出ました。人間の生き方を決めるキーワードは何か、にまで話は及びました。

人は、各々自己決定権を持って生きている以上、自分の生き方は自分で決めるしかない。他人の生き方に口出しするよりも、自分がどう生きようとしているのかをみつめ実行する方向にエネルギーを費やすべきではないのか。親、教師といえど、とやかく言うのは、自立してない人間のもたれあいの関係でしかないというのもありました。

「するてえとなにかい、他人に優しくするってえことあ、ほっとけやあいってえのか

い?」。「それにしちゃ、今の世の中なんともやりきれんのう」。「いやあ、ええこともあるんすよ。こうして、大勢さまとお話し合ひできるってことはあり、がたい、ことで」。

マイクから伝わってくる音声とは異なる、もう一つの話し声が私の耳に音もなく入りこんできました。

私たちは、人と心から出会えるのだろうか。大量生産と消費の社会に呼吸していると、広告文化の洪水に押し流されそうになる。「物」が優先するのを「ノウ」と言い切らずに、競争社会で勝者になることを夢みる共同幻想の落とし穴にはまり、「人間」を見据える能力も気力も限りなく喪失し続け、その事実すら認識できぬ程に無力化が進んでいるのかな。

時代を横軸に社会現象を縦軸にした座標で、「ここに私はいる」と位置を見い出せる者が、どれほどいるのだろうか。一方、子どもたちはやすやすとその地点を探し出し、「ほらここだぞ」と旗を掲げてサインを送っているのに。

ノウハウからノウフーへ。誰と知り合うかが生き方の鍵となる時代。まずは、偷しい語らいの場が持てた事実を歎びとしましょう。



わたくしからあなたに

——“秋のつどい”に参加して版——

◆秋のつどいには、新島淳良さんを知りませんでしたので、何の期待もなくなうかがいましたが、参加してよかったと思っております。

民主主義を、民主制と民主主義（頭の中にあるもの）に分けてのお話は興味深く、胸に落ちるものでした。民主主義と対立するものに人権があるというお話も、女性問題にかかわっても、子どもの問題とかかわっても、いきつく所は人権と感じておりましたので、うなずけるものでした。

このことを考えていくと、やはり教育の問題にもつながっていきます。民主主義の時代は終わった、支配者になることに興味を示さなくなった、と言っておられましたが、若い人たちが、教育されることを拒絶するもの、このあたりのことにカギがあるのでは、と思われしました。

「理解」は、仲よくなるのにいらないうという話も、自分と違ったものの存在を認めるところから共存は始まるのではないか、と思うようになつていた私には、おもしろいお話でした。

二部の話し合いもすがすがしく、皆さんがかなりはつきりと主張しあつて、激突という感じでしたのに、後味のよい会でした。こんな後味のよい会なら、いつでも参加したいです。中野の公開の教育委員会に出席したときも、このような感じを持ちました。

秋のつどいの準備をして下さった方たちに御礼を申し上げます。（東京・間瀬中子）

◆高校生である私から見て「異星人」というのは大人たちだと思えます。まあ、異星人から見れば、普通の人間が異星人に見えるのでしようけれど。まず一部、これははつきり言つてがっかりしました。大人としての意見か子供としての意見、どちらかの意見としての話だと思つたのですが、第三者としての意見、下手をすれば、題材には何も関係していません。

「異星人」一言で言つてしまえば、片づくものかもしれません。しよせん子供なのですから。しかし「異星人たち」をどういうふうに人間にしていってくれるか、それを子供たちは、異星人たちは、待っているのです。

勝手に大人たちにレッテルをはられて、内申書という紙きれ一枚によつて人間を評価され、今の日本人はいい学校、いい会社に入るために卑屈になり、意地になり、自由を求める人間が排除され、こんな社会こそ「異星人」をつくり出す原因ではないでしょうか。昔と変わった、昔はよかったのに、こういうふうになつて大人は過去にこだわっています。私たちは昔を知りませんし、昔とどんなふうに変つたのかもわかりません。しかし、いつの時代も自由を求め、のびやかに遊び、親も親身になつて叱つてくれる。そんな時代こそ理想の時代ではないかと思うのです。大人たちも、昔にとらわれず、今精いっぱい生きている子供たちに、時には暖かく手をさしのべ、迷っていたら、どんな子供にも相談に乗つてやり、時には、親として誰の子供でも叱り、正しい道の上にのせてくれたら……。難しいことですし、勝手なことかもしれませんが。しかし、今の子供は、こんなことを願っていると思います。

平井さんが、今の子供が悪いのは、学校と

関係ない、と言いましたが、私は前にも述べたように、いい学校、いい会社に入ろうと意地になることにより、時間に動かされ、せかされ、あせり、不安 *etc.*。こんなことを考えると受験が関係ないとは言えません。一部は、とにかくよくわからなくて、今度やるときはもっと題材に関係したことにについて話して下さい。

二部は、言いたいこと、思っていることすべて言えた気がします。子供が私と同じように学校に行きたくないと言っているとおっしゃっていたお母さん。生徒が学校をやめたと言っていると困っていた先生。すごくよくわかるんです。学校に行きたくないという理由が。友人や先生に気を遣い、疲れはて、好きなことも取り上げられ、自分の居場所がなく、いつも心がふらふらとしてしまい、不安で仕方がない。そんな自分がいやになり、いけないと思ってもつまずいてしまう。誰も信用できなくなり、まわりの人が「異星人」のように見えてしまい……。何もする気がなくなると、ついに登校拒否、こんな状態が続くのです。

大人は、あと一年がまんしなさいという。しかし、その一年がその子供にとって、どれ

だけつらく長いのか、理解してほしい。そんな歯車のかみ合わない現実の社会。それだけに二部の話しあいには、私たちにとって、とてもよかったです。心のオアシスを求めている子供たち。その状態をすべての大人がわかってくれるのはいいのでしょうか。

(静岡・東郷ゆき乃)

◆一部は、題材とものすごくかけ離れていたため、はつきりいって私は無関心でした。また、高校生の私には意味不明もありました。異星人と中国の文法書……。どういう所であまりにもすごかったものか、あまりにも難しく把握できませんでしたので、がっかりしました。ですから、帰ってきたいま考えても、私には「異星人」がどんなものか、さっぱりわかりませんし、今の子供のどこが異星人なのかもわかりません。きっとあの先生も自分自身、異星人というものがわかっていなかったのでは、と私は思います。私は、異星人というものがどんなものかを知るために行ったのに。

二部は、とても楽しく過ごせたとはいえず。まあ、私たちの学校の不平不満、または考えていることを、マイクなどを使い、みな

さんの前でお話してきたのだからだと思ひますが……。

大人の方々の意見を聞き、すごくきついことを聞かれたり、私たちには考えもできなかった意見がありました。私なりに考える所もあり、とても勉強になりました。が、平井さんの考え方はすごくすばらしいと思います。でも賛成はできません。なぜならば、その考え方は、平井さんの塾だから通用するものの、私たちの学校、もしくは中・高校生に通用するでしょうか？ ちよつと考えてほしいと思います、平井さんの考えの高校生がいたら、世の中は終りではないでしょうか？ あと、塾だけ行けばいいという考え方は、すごく反対です。

最後に、多くの方々とお話してきたので、とても楽しかったです。また機会がありましたら行きたいと思ひます。(静岡・土屋裕美)

◆秋のつどいのチラシを見た時、テーマと新島さんのお話というのにひかれ、出席したいなと思ひました。その後生徒会役員選挙など学校で色々なことがあり、Weの「こだま」の強者の論理で、ひっかかるものが心に残りました。平井さんからの返信を読んで、私も書かなくっちゃと、一度ならず書いてはみたも

の、やめてしまったのです。字づらと理屈とで平井さんの返信に答える作業をむなしく感じたからです。それで、なまの声を持っていくこうと思い、生徒を誘うことを思いつきました。東郷さんと土屋さんの背後には、少なくとも三百人の生徒の声があると思います。高校生も含めて子供は異星人であるから、楽しいかもしれません。

しかし、一方で学校の現状のおかしさは否定しようもなく、その中で生徒たちが、日常どんな生活をして、どう感じているのか、何を称して異星人というのか知ってほしいと強く思いました。そして会が進行するにつれて、やっぱり学校はもうダメなのかという思いと、それでもまだ希望はあるのだという気持ちとが交錯しました。

生徒たちの多くは、学校へ来ているものの学校には何の期待も希望も持っていないのです。そして学校の管理にすなおに従っているものの、他方では全くそれらをシカトしていて、いざという時―例えば生徒総会など―はとても屈折した心理が働いて、思いもかけない結果が生じたりするのです。

複雑で屈折した、幾重にも折り重なった面を持つ今の生徒の様子、なぜ怠学するのか、

なぜ万引きするのか、なぜ「非行」といわれる言動に走るのか……そのなぜ？ は、一つ一つの心のひだをていねいに見ていかないと答が出ないもののに、だから悪い、だから甘えている、だから通用しないと、一刀両断に結論つけることへの抵抗を強く感じるのです。

北京から帰ってこられたという方の意見は印象に残りました。反面教師という意味で、今の学校は価値がある、こんなおかしな学校に居続けるのも勉強である……と。一理ありますが、そのように開き直るのには、今までも、そしてこれからも、余りにも多くの犠牲を払いすぎるのです。たくましい生徒はよいかもしれません。それを仕事とする教師も仕方ないのかもしれませんが。しかし、大切なこの時代の針をこわしてしまふ沢山の生徒を見ていると、それも一考と割り切ることもできないのです。

秋のつどいに行くことは、彼女たち二人だけでなく、まわりの生徒も知って関心を持ちました。こんな会だったよと話をすると「連れて行ってほしかった」という子もいて、うれしくなりました。春のゼミナールにつながったらと思います。

(静岡・梶原公子)

〈編集室からあなたに〉

◆4月号からの新企画“読んでほしい本”

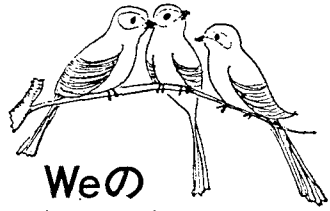
「今月の読書から」は、その号のテーマに近い本を、編集部が紹介してきましたが、テーマにかかわりなく、ぜひWeの読者にすすめたい本がありましたら、原稿をお寄せ下さい。タイトルもズバリ“読んでほしい本”。分量は800字、もちろん著者、発行所、定価をお書き下さい。「今月の読書から」の中に特別枠を組んで、皆様に健康

をふるっていただこうと思っています。

原稿が殺到した場合、掲載が少し遅れるかもしれませんが、お許し下さい。

◆執筆者をご推薦下さい

'89年度のWe、毎号のテーマは、同封ピンクチラシの通りです。テーマに添って、ぜひあの人にインタビューを、この人の文を、とのご希望をお寄せ下さい。もちろんあなたのご投稿を、Weはいつも待っています。今まで、執筆者の推薦をして下さったのは、お二人だけでした。あなたのご意見を、編集部はいつも待っているのです。



Weの 読者会だより

〈We大阪の会〉

◆昨年十一月十五日(火) 森之宮の大阪市立中央青年センターにて。半田さんを迎えての交流会という形で六時から会場を借り、六時半までに食事をすませる予定が、食事は終わらず、始めることになった。半田さんからは、「今後、家庭科はどうなるの」と題して、中央の様子を語っていた。

その話をうけて、自己紹介を兼ねて一言ずつ話してもらうことにした。参加者は二十名。市教組をはじめ、組合婦人部の役員の方々の参加があり、フォーラムに出席された方たちの話も懐しい気持ちで聞いた。

高校の家庭科の教師から、「家庭科以前」

の問題だとか、管理の厳しさだとか、学校の忙しさのことなど、直面している問題が多々話された。学校にもどれば、誰でも少数派だったり、独りだったりするけれど、やっぱり頑張つて言うべきは言っていかなければならない。その時、黙っていた仲間と出会うかもしれない。

飯田さんが、「戦前は、こんなWeの会のような話し合いの場が持てなかった。私は、それで教師を辞めねばならなかった。私もなれるもんなら、もう一度教師にもどってみたい……」と話された。私も小学校教師で、高校の現実をよくわからないけれど、子供たちに失望することはない。自分にガツカリすることとは多々あるけれど。

福本さんは、「女は、保護されるのを望んでいるのではない。一人の人間として見てほしいのだ」ということを言われ、勝手に納得してしまっただけ、他の参加者の方々は、どう聞かれたのか知リたかった。深く考えさせられる意見が、他にもたくさん出、時間が短く感じられた一日だった。

次回は二月二十六日(日)同じ場所で一時より。

(北川好美)

★「Weの会」の世話人が決まりました

’88年夏季フォーラムの熱気がまだムンムンという中で、この盛り上がりをも「Weの会」活性化につなげたいと、関西・首都圏双方で、細かい相談がありました。「Weの会」から、いずれ報告・提案があると思いますが、まず’89年「Weの会」世話人をご紹介します。

(アイウエオ順 敬称略)

- | | |
|-------------|-------------|
| ・浅井由利子 (大阪) | ・芦谷 薫 (東京) |
| ・石川由紀 (東京) | ・磯部幸江 (埼玉) |
| ・稲邑恭子 (神奈川) | ・入江一恵 (兵庫) |
| ・岩瀬志津子 (大阪) | ・河上紀子 (兵庫) |
| ・川崎絢子 (埼玉) | ・鈴木昭彦 (東京) |
| ・武田秀夫 (東京) | ・立山ちづ子 (熊本) |
| ・丹原恒則 (岡山) | ・中野敬子 (東京) |
| ・錦 真理 (埼玉) | ・西本和代 (兵庫) |
| ・東田洋子 (東京) | ・姫野順子 (東京) |
| ・平井雷太 (東京) | ・藤武礼子 (東京) |
| ・間瀬中子 (東京) | ・村岡洋子 (京都) |
| ・森本邦子 (千葉) | ・李 由子 (東京) |
| ・若竹キミイ (東京) | ・若竹稜子 (東京) |

「アジアの女たちの会」

〈堀山 明子〉

日本の女たちは、明治維新以来、軍事侵略から経済侵略、性侵略と形を変えながらも、常にアジア侵略に加担させられ続けてきた。そしてアジアの女たちは、その侵略・搾取と闘いながら、民族解放と女性解放を切り離せない問題として訴え続けてきた。このまま侵略に加担しながら、アジアの女たちとどう向きあっているのか。いや、加担を拒否する中で、彼女たちのたたかいつながっていききたい！ そんな想いが「アジアの女たちの会」の名に込められている。

具体的には、一九七七年の結成以来、「戦争責任」「買春観光」「日本の海外進出企業」「国籍法改正」「開発と女性」「アジアからの出稼ぎ女性」や、暮らしの中にあるアジアからくるモノなどをテーマに、日本とアジアの関わりを女性の視点から考え、「女大学―公開講座」を開いてきた。

日常的な活動は、機関紙『アジアと女性解放』（英文も）発行。会員内のニュースレター『アジア・女通信』発行。毎週水曜日七時からのミーティングで、勉強会・会員内での情報交換あるいはアジアの活動家の方たちとの交流をしている。他では得られないナマの情報がありますので、水曜日にどうぞ!! 会員申し込みは年間三五〇〇円。男性も歓迎です。

連絡先 〒150 東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ 211

☎03-508-7070 五島（昼間のみ）

自己紹介 イキイキぐるうぷ

「AWRAN JAPAN」

〈船橋 邦子〉

AWRAN (Asian Woman Research and Action Network) は八二年モントリオールで開かれた「女性についての教育と研究国際会議」の地域分科会で誕生した。八五年にはナイロビ会議にむけ草の根の女たちの報告書を作成することを目的として、事務局のあるフィリッピン、ダバオで「第一回女性会議」を開き、十四ヵ国から三十五人の女たちが出席。文化・歴史の異なる国の女たちが「女として」の抑圧を原点に情報交換し「女への暴力」に対して闘っていくことを確認した。しかし、アジア各国の人権が保障されない政治・社会状況は、情報交換を困難にしている。AWRAN JAPANは左記のようなよびかけで八六年に誕生した。

・AWRANはアジアの女たちと日本のフェミニストをつなぎます。

・AWRANは個人と個人、個人とグループ相互の間をつなぎます。

・AWRANは集団ではなくネットワークです。

・情報は女たちの力です。

情報交換のためのニュースレター発行にも四苦八苦。情報は単に受け手でなく送り手となる、その相互関係こそ重視したいが、これもなかなかむずかしい。金太郎飴現象―集会で会う女の顔が同じ―をどう克服するかが一番の難題。

連絡先 〒150 東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ 211

☎0473-87-7800 船橋#12

一泉

● 情報のページ

◆二八八九人のナミダー都立高校の男女差別
定員を問う―

○二月四日(土) p.m.五時〜八時 東京都婦人
情報センター(JR飯田橋下車)

○ゲストに、俵朋子、井田恵子、三井マリ子
の各氏。参加費 五百円

主催 女性民教審、東京都の男女平等教育を
実現する連絡会、行動する女たちの会

問合せ先 〒180 東京都新宿区荒木町23 中
沢ビル3F ジョッキ内 ☎03-337-9565

◆市民活動交流のつどい

「登校拒否」をテーマに、話し合いませんか。
どなたでも、ご自由に当日会場にどうぞ。

○二月五日(日) a.m.十時〜p.m.四時 東京都立
多摩社会教育会館(JR南武線 西国立下
車十分)

○講演Ⅱ「登校拒否をどうとらえるか」河合
洋氏の他、報告と話し合い

主催・問合せ先 東京都立多摩社会教育 市
民活動サーピスコーナー (東京都立川市

錦町6-3-1) ☎03-25-9165

◆「女性差別撤廃条約学習資料集」発行

「島国日本から国際国日本にと言われなが
ら、人権の問題でははなはだおそまつな結果
になっています。民間の私たちも国際的な視
点を育てることが大切です。」知らされない法
律は守られません。この資料集が女性差別を
なくすために活躍なさっておられる皆様方
の役にたてれば幸いです(お手紙より)。

○「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃
に関する条約」全文、「女子差別撤廃条約
実施状況報告」全文等の資料と論文掲載。

○A5版 一八三頁 頒価・七百元 発行・
くらしに生かそう女性差別撤廃条約大阪府
民会議

申込先 解放出版社(大阪市浪速区久保吉1
-6-12) ☎06-561-5273

◆「食卓にあがった死の灰」パート3
ヨーロッパや日本の最新食品汚染データ、

昨年十月末の厚生省発表、八八年四月からの
新許容量体系化での問題点などがもりこまれ
たチェルノブイリ事故による食品汚染の最新
情報。

○頒価 四百円(送料一七〇円)

・十部以上送料不要・二十部以上 一部三
五〇円・五十部以上 一部三百円・パ
ート1・2・3のセットで千円(送不要)

○申込先 原子力資料情報室(東京都台東区
東上野2-23-22 渡辺ビル3F) 振替―
東京463145 ☎03-832-1976

◆脱原発移動資料館のオーナー会員募集

「日本の原発はまだ一つも止まっていない。
原発なんなくとも私達は充分やっていける
ことを、日本中の人々に一日も早く伝えたい。
その資料をつみこんだトラック(移動資料館)で各地を巡回します。オーナー会員
になって、車の共同の持主になって下さい」

○オーナー会員A・一口(二万円) B・三口
(三万円) C・十口以上(十万円以上)

郵便振替にA・B・Cを明記して、小樽
9-39159 脱原発移動資料館へ

問合せ先 〒060 北海道江別市東野幌本町4
-17 ☎011-383-7425

十字路

〈北海道〉「泊条例」道議会あす開会——知事意見書は「玉虫色」のまま（朝日11/30）

北電・泊原子力発電所のは非を問う道民投票条例案を審議する臨時道議会は十二月一日に開かれるが、条例案に付ける知事意見書の内容は、十一月二十九日になっても「玉虫色」。

この日、森尾昇全道労協議長らが「条例制定に賛成との意見をはっきりすべき」と横路知事に迫ったが、知事は最終案でも賛否を明示しない考えを示した。この意見書原案は同日各会派に口頭で説明されたが、条例制定に反対の自民は「賛否をはっきりさせ」と反発。

意見書素案は、①行政の継続性②実効性への疑問③九十万人の意思の重み——の三本柱を基本に、議会に慎重審議を求めている。しかし①②に力点を置いて読めば「条例は必要なし」となるし、③に力点を置けば「制定すべき」ととれる。（高橋芳恵）

〈新潟〉できたぞパソコン通信網（新潟日報11/17）

英語の勉強は直接海外とのコミュニケーション

ヨンデーと、長岡技術科学大学の英語自主ゼミ（古谷千里助教）は、米国ミシガン州ガーデンシティ・ハイスクールの生徒を相手に英語による国際パソコン通信を三ヵ月間の予定でスタートさせた。大学の語学授業の一環としてパソコン通信を利用するのは全国初という。パソコン通信はホストコンピュータを介在させて端末を結ぶが、今回のケースでは国内のJUNET（大学間）と国際的なCSネットという二つの通信網で結ばれた。通信ソフトは同大の電気系の先生が作った。（山口久子）

〈千葉〉「自主遠足」の小学教諭 一カ月の懲戒停職処分（朝日11/17）

四街道市立四和小学校で、三年の担任教師が、学校の遠足とは別に、自分の学級の児童らを「自主遠足」に連れていった問題をきっかけに、教師の処分を検討していた県教育委員会は、十一月十六日、すでに担任を外されている渡壁隆志教諭を、十七日から一ヵ月間の懲戒停職にした。県教委は「職務命令に反

して遠足をしたり、今年四月から職員会議に出席しないなど職務に反した」と処分理由を説明している。渡壁教諭は「異質な実践をしている教師を意図的に処分しようという管理主義教育の典型。人事委員会に提訴して処分の撤回を求めていく」と話している。市民グループは一六二二人の処分反対署名を集め、十五日、県教委に提出した。（小野美智子）

〈長野〉先生殴りたい46%、学校やめたい51.7%——長野の中学生（朝日11/18）

創価学会が県内の小中学生一七一一七人に意識調査をした。対象は小学五年生、中学三年生、十七市の公立小二五校、公立中二四校を無作為抽出した。これによると、小学生の四人に一人、中学生の二人に一人は「先生をなぐってやりたいと思うこと」があり、中学生の三分の一以上は「自殺したいと思うことがあった」。同学会では同様の調査を、86年四月、東京で実施しており、それとの比較で目立っているのは「先生をなぐってやりたい……」「学校をやめてしまいたいと思ったことがある」「先生はクラスの生徒を平等にみたくれると思う」など教師への信頼感を問う項目で長野の方が信頼感が低かった。（宮崎春美）

〈愛知〉公立中の文化祭でロックコンサート
(中日11/21)

宝飯郡小坂井町立小坂井中学校の文化祭で、十一月十六日、ロックコンサートが行われた。演奏はプロのロックバンド「BE・M ODERN (ビー・モダン)」。約千人の生徒は総立ちになってコブシを振り上げ、床を踏み鳴らし、真っ暗にした体育館は騒然。「もう最高、学校がこんなことをやってくれるとは思わなかった」と感想。コンサート実現までには、四月、文化祭実行委員会をつくり、六月アンケート調査を行い、ここで圧倒的多数を占めたコンサートに対し、職員会では異論も出たが、音楽担当の森教諭と生徒会役員が上京して五つのバンドを下見して、検討の結果決めた。金子校長は「ロックは若者の芸術だ」と思う。今回は生徒が長時間、真剣に考えて決めたもので、学校はそれを尊重した」と。

(平野利依)

〈京都〉新年度から女性政策課新設 (毎日12/9)

荒巻知事は、十二月八日開いた十二月定例府議会本議会で、女性の地位向上のための施策を推進する「女性政策課(仮称)」を新年

度の組織改革で新設する方針を明らかにした。現在、福祉部青少年婦人課にある婦人対策係を独立、昇格させることが検討されている。課の新設は五月、府婦人問題検討会議から出された「男女共同参加の21世紀社会をめざす京都府行動計画に関する提言」を具体化させるもの。▽雇用・労働環境の確保▽女性の自立▽母性の保護と女性の健康・福祉の増進——など五つの主要課題に対する施策を展開するため二〇〇〇年までを前・後期に分け当面同課では前期に行う実施計画を策定する。また、課とは別に、女性の意見を府政に反映するため、府の審議会等への女性の登用を促進するとしている。(塚崎美和子)

〈大阪〉「事態軽視するな」高槻の地下水発がん物質検出問題 (朝日12/3)

高槻市の地下水から有機塩素系の発がん物質、1・2ジクロロエタンやトリクロロエチレンなどが高濃度で検出された問題で、同市はこのほど、市報「たかつき」で「家庭に届いている水は大丈夫です」と特集を組んで宣言した。これに対し、飲料水問題に取り組んでいる「市民自主講座」は十二月二日、「余りにも事態を軽視している」と、市に抗議す

るとともに、文書で検査態勢の徹底などを申し入れた。同市が行った井戸水検査で、日本ではまだ規制基準のない1・2ジクロロエタンは世界保健機構(WHO)の飲料水基準値の約六七倍にあたる六七四ppbも検出された。大冠浄水場の井戸ではトリクロロエチレンが基準値(三〇ppb)を大きく上回る八九六ppb、1・2ジクロロエタンは二五六ppbが記録された。(大江美香子)

〈香川〉結婚テーマに活発論議——高松で市民フォーラム (四国11/13)

女性と男性がともに女性問題を考える「'88市民フォーラム」(高松市主催)が十一月十二日、市美術館講堂で開かれた。参加者は十五歳の女子高生から大正生まれまでの女性約八十人に、男性約二十人。「女と男の文化論」をテーマに、活発に論議された。また市製作の「結婚ってなに?」のビデオ上映のあと意見交換があった。第Ⅲ期たかまつ女性会議代表世話人渡辺智子さんをコーディネーターに「女の幸せは結婚であるのか」の討議、「離婚の構図」の著者四方洋氏が「新しい結婚 いきいきした夫婦」と題し、記念講演した。(岡内須美子)

あんな

★宮沢蔵相が辞任

——政府・自民党 税制審議促進図る★

宮沢副総理・蔵相は12月9日、リクルートコスモス未公開株の譲渡をめぐる発言訂正問題で国会を混乱させた責任をとるとして、閣僚（副総裁・蔵相）を辞任した。

政府・自民党は宮沢氏の辞任により、当面の与野党対立の争点だった蔵相の発言訂正問題にケリがついたとして、税制改革関連六法案の成立に向け、参院税制問題等調査特別委員会での審議を本格化させる構えだ。野党側には「蔵相辞任はリクルート問題の真相解明に幕を引き、政界浄化をうやむやにするものだ」との批判もあり、社会、共産両党を中心に竹下首相の責任追及を強める動きもあるが、公明、民社両党は「一応のけじめがつく」として、審議入りには応ずる方向だ（12.9付各紙）。

★公費で百万円分購入

——高石氏の東京パーティー券★

リクルートコスモス株疑惑で国会喚問された高石邦男・前文部次官が、衆院選出馬準備のため九月中旬、東京のホテルで開いた「語る会」のパーティー券（1枚二万円）の購入を長崎県教委の伊藤昭六教育長が、同県公立学校施設整備期成会（会長・鐘ヶ江管一島原市長）にあっせん、同会が50枚を百万円で購入していたことがわかった。同会は県下の全市町村で構成、公費で運営している団体で、伊藤教育長は「軽率だった」と話していた（12.10付各紙）。

★高石前文部次官 衆院選出馬とりやめ

——勸奨扱いの退職金6500万円★

12月13日、高石邦男・前文部次官は次期衆院選福岡三区からの立候補表明を白紙に戻し、その準備を取りやめたい、との声明を出した。事実上の出馬断念と受けとめられている（12.13付各紙）。

また、'88年の6月の退官時に「勸奨退職」扱いを受けて三割増しの6500万余円の退職金を受け取っていたことが、12月18日明らかになった。総務庁の通達で、退職の主たる理由が「選挙に立候補」の場合は勸奨退職を認めないことになっている。高石氏の場合、事務次官在任二年で、「人事刷新のため退職。勸奨扱いは当然」と文部省はいうが、退官前に事実上の出馬宣伝をしており、総務庁も文部省から事情を聴くなどして、今後論議を呼びそうだ（12.19付各紙）。

★長崎市長の「天皇に戦争責任」発言

——自民県連が撤回要請・右翼が脅迫★

12月7日、長崎市議会一般質問に、本島等市長の発言「…天皇の戦争責任はあると思います」が、注目を集めている。

8日には市議会の保守・中道四会派と長崎市選出の自民県議5人が相次いで発言取消しを要請。市長が断ると、自民県連は17日、本島市長から出ていた県連顧問の辞任届について協議した結果、これを受理せず、逆に解任処分にしたうえ、市長在職中は一切自民党が協力しないことを決めた。

また、大阪、岡山など各地から入りこんだ右翼団体は連日、市内を宣伝カーで走り回り、市長は「言論の自由はないのか」と嘆いている（12.18付朝日）。

★婚姻後も旧姓使わせよ

—女性教授、国立大学を提訴・賠償も要求★

結婚して戸籍名が夫の姓に変わった後も、旧姓を通称として研究、教育活動が続けてきた国立大学教授が、通称使用を大学が認めず戸籍名の使用を強制するのは職業活動の自由の侵害として11月28日、学長ら大学側と国（法務省）を相手取って書類における通称使用と約1175万円の損害賠償を求める訴えを東京地裁に起こした。

正規の婚姻をした妻が夫婦別姓を目的に通称使用を求める初の訴訟。夫婦同姓を定めた民法の改正を求める女性団体や、弁護士らの動きがあるだけに、注目されそうだ(11.29付各紙)。

★教師の体罰、32%が容認

「人権を侵害」は39%、総理府世論調査★

12月4日からの「人権週間」を前に、総理府は法務省の依頼で五年ぶりに実施した「人権擁護に関する世論調査」の結果を3日発表した。その結果、教師による学校での体罰について、四割近くは「人権侵害になる」とみているものの、「ならない」という人も三分の一あり、「体罰禁止を徹底させるべきだ」と考える人も15%にすぎないことが分かった。体罰根絶に取り組んできた法務省と文部省は体罰を容認する人が予想以上に多いことに驚いており、今後、教師の指導や一般の人の啓発にさらに力を入れていく考えだ(12.4付朝日)。

★小、中学校にコンピューター急増

——でも使う教師10人に1人★

コンピューターを設置している学校がこの二年間で小学校は七倍近く、中学校も三倍に増えていることが、文部省が11月20日にまとめた「情報教育の実態調査」でわかった。全国の公立学校の設置状況調査で、高校では94%、中学校36%、小学校14%の順でかなり普及していることが報告された。半面、コンピューターを使用できる教師は、小、中、高を通じ10人中1人そこそこという低い割合で、文部省では1993年までに、研修などで特訓し教えられるようになるまでになってもらう方針だ(11.21付各紙)。

★教育白書、学校中心から生涯教育へ

——国際化・情報化も推進★

中島文相は12月6日の閣議で、教育白書「63年度・我が国の文教施策」を報告した。臨教審答申に基づく教育改革の現状と課題を述べた内容で、とくに、生涯学習社会の実現を「二十一世紀へ向けた教育改革の基本」と位置づけ、学校中心主義からの脱却を提唱するなど生涯学習体系への移行を特

集したのが特徴だ。また、国際化、情報化など教育をめぐる新しい課題についても述べている(12.6付各紙)。

★JR東中野駅で電車追突、2人死亡

——乗客94人が重軽傷★

12月5日午前9時40分ごろ、東京都中野区東中野四丁目のJR中央線の東中野駅構内で、停車中の西船橋発中野行き下り電車＝十両、立川一運転士＝に、後続の千葉発中野行き電車＝十両、平野輝樹運転士＝が追突した。両電車の一部が脱線し、双方合わせて1600人の乗客らが乗っていたが、東京消防庁の調べでは、平野運転士と、車両の間にはさまれた男性の乗客計2人が死亡し、94人がけがを負ううち2人が重傷(12.5付各紙)。

また、その後の調べにより追突した後続電車の死亡した平野運転士のポケットからスイッチが入れっ放しになったトランジスタラジオが見つかり、平野運転士がラジオに気を奪われるなどして前方注視を怠っていた可能性が強まったとされた(12.7付各紙)。

★入院の半数が65歳以上

——多い脳卒中患者、「かけもち」増える★

百万人を越えると推計される全国の一般病院・医院の入院患者の半数は65歳以上のお年寄りで、うち四割が脳卒中の患者で占められていることが、12月17日まとまった厚生省の「62年患者調査の概況」で明らかになった。入院患者の期間、疾病についてのこうした実態がわかったのは初めてで、高齢化社会を迎えて国民の健康づくり、医療費の抑制などの面から、脳卒中を中心とする循環器系の病気の予防、リハビリ対策が今後の疾病対策の重要課題となりそう(12.18付朝日)。

★ソ連アルメニアで大地震★

ソ連アルメニア共和国北部でマグニチュード7前後の大規模地震が発生(12.7)。ニューヨークで米ソ首脳会談後のゴルバチョフ書記長は急きょ帰国。死者の数は5万人を越すと発表された(12.9付各紙)。

★Weバックナンバーのご案内★

〈VOL.1〉VOL.2〈VOL.3〉(品切れ)
〈VOL.4〉

1月号 くらしの文化を語る

2・3月号 水はいのちの泉
〈VOL.5〉

4月号 幼い日—大人は忘れてしまった
子ども—大人の勝手な思い込み

5月号 5月号 子ども—大人の勝手な思い込み
6月号 6月号 “いじめ”その根っこには何か?

7月号 7月号 性—小・中・高校生は何を思う?

8・9月号 8・9月号 親—いま、学校に何が出来る?

10月号 10月号 家庭科—いま新しい地平に立つ

11月号 11月号 家庭科—どう変える、どう変わる

12月号 12月号 平和—今年を顧みる

86年冬増 86年冬増 自分らしさをこそIII

1月号 1月号 女性—世界を変えて得るのか

2・3月号 2・3月号 明日—人はみな成熟に向かつて
〈VOL.6〉

4月号 4月号 先生は悩んでいる

5月号 5月号 情報化社会の光と影

6月号 6月号 学校給食で論争しよう

7月号 7月号 「制服」着る・着せられる

87年夏増 87年夏増 女たちの教育改革提言

8・9月号 8・9月号 「原発」知らなくていいのか

10月号 10月号 機会均等法、何が変わった?

11月号 11月号 「家族」どう変わる、どう変える?

12月号 12月号 「国際居住年」って何だった?

87年冬増 87年冬増 ゆたかさを防ぐ

1月号 1月号 Weのルネッサンス

2・3月号 2・3月号 新教育課程をどう考えるか
〈VOL.7〉

4月号 4月号 なぜ、行くのか、学校へ

5月号 5月号 学校—絶望—希望?

6月号 6月号 学校—今、親にできること

7月号 7月号 なぜ、家庭科にコンピュータ?

8・9月号 8・9月号 コンピューター、何をどう変える

88年夏増 88年夏増 教育はどこへ

10月号 10月号 食と環境といのち

11月号 11月号 いのちを医療に任せていいのか

12月号 12月号 マスコミと文化の変容

1月号 1月号 くらしの論理を語る

WE EDITOR'S NOTE

◆この号で予約終了の方が多く、この時期、購読者数が毎年落ち込み、来年度の企画を張ませつつも、不安も大きく脹む毎日です。

◆来年度は、読者のみなさまのご意見を積極的に行かたい、誌上が討論の場となり、情報交換の場になるような誌面づくりをしていきたいと思ひます。来年度も引き続き購読をノ(青木)

◆杉並区の小学校の先生から「杉並区帰国子女教育センター」の資料をいただく。言葉の不自由な児童への「出前指導や、国際理解教育等様々な取り組みがなされていることはうれしい。◆ニュースの報道も、教科書も然りだが、私達の日常の思考から他国の存在がいかに抜け落ちていくか、この号を担当し痛感。(稲邑)

◆一年前、初めてこの国を出てヨーロッパに行った。円高海外ブームのバックから足旅行と言え、響き買ひそうだが、それなりに楽しかった。しかし、数人で行つて「もう終わりです」と断わられたレストランが、夜の更けるまで営業しているのを複雑な思いでながめた。本当の国際感覚を考へる時ですね。(中野)

♥Weの八年目の四月号に、「何をねらうか、生活科」を特集します。「体験を重視した合科教育」と聞こえる新教科ですが、低学年の理科・社会の廃止、道徳的味付けと、油断のならないしろものです。特に小学校の先生方、ぜひ編集部まで疑問点、御意見をお寄せください。(西内)

〈表紙の言葉—加藤由美子〉

落ち葉を払いのけ、土を持ち上げ顔を出す、露のとう。ひっそりと「ヤァ」と季節を告げる北国秋田の県花は、人間とちがって若い方がいい。と言うのは全く人間サイドの身勝手な発言。ゴメンナサイ、露のとうさん。春だねっ。

★一九八八年十二月に身を置いて、一九八九年二・三月号を編むのは、毎年のことながら妙な気分です。波乱にみちた今年を、もう少し落ちついて考えるために、時間を止めていたい思ひさえしますのに。あつというまに、様々な国の人があふえ、街で異国の言葉をよく聞くようになりました。制度と、人の意識を、ともに国際化するため、まず自分を見つめ直したいものです。★ご購入継続の手続き、一日も早く、待っています。(半田)

新しい家庭科—

Vol. 7 No. 12 1989年1月20日発行
¥550(年間購読料・増刊号含¥6900)
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎03(326)1380 振替 東京6-59867
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

北海道
 <旭川>京栄堂、樋口、富貴堂
 <札幌>北東京堂、維新堂
 <島根>ダイヤ<苫小牧>熊谷
 <伊達>新生堂<函館>神田、森文化堂
 青森県
 <青森>成田本店<弘前>とよはら<三沢>好文堂
 岩手県
 <盛岡>東山堂<花巻>誠山房
 <水沢>松山
 宮城県
 <仙台>八重洲、萩書店、高山、千忠、宝文堂<古川>高山
 <泉>ホビット館
 秋田県
 <秋田>加賀屋、たかのずや、荒川<大館>石川<湯沢>おびきゅう
 山形県
 <酒田>八文字屋、遠藤<山形>高陽堂、ばんべい、教育用品
 <鶴岡>阿部久
 福島県
 <福島>西沢<郡山>松文堂、すばる<会津若松>ニシヤ、ワ、いっわ<BSオオスカ>梁川、大竹<石川郡>江戸屋
 群馬県
 <藤岡>川島朝日堂<前橋>アルプス社、遊書館<中之条>島村<渋川>正林堂
 栃木県
 <宇都宮>杉山<足利>関口
 <栃木>福田屋
 茨城県
 <水戸>ツルヤB.C.<土浦>白石、マズゼン
 埼玉県
 <浦和>岩淵、須原屋<川口>新井、ブックスサトウ、<越谷>日野屋<東松山>比企文化社<和光>山屋<狭小>楓書房<志木>宮川<大宮>阿里書房、岩井<飯能>安藤芳文堂<入間>ヤマトウ<熊谷>神田弘文堂<鴻巣>奥沢
 千葉県
 <船橋>前原かつば、西武B.C.、はつらつ書房<松戸>元山<津田沼>大和屋<佐原>多田屋<市川>大杉、千里堂<成田>中台書房<四街道>モンジ堂千代田店<東葛飾郡>ブックスきさき
 東京都
 <千代田>日成堂、書肆アークス、三省堂本店、書泉クランデ、東京堂、八重洲B.C.、笠原松文堂<文京>ビビ<豊島>池袋、紀文堂、四季書房<豊田>紀文堂<杉並>木風舎、新愛、プラサード、

たつみ書房、西萩、結、大正堂、みどり書房、山口<新宿>紀伊國屋、模索舎、風書房、伊野屋<渋谷>すべりすえいがさく<練馬>いずみ<葛飾>宏精堂、中村、稲田、大和<世田谷>やまべ、山下、ドン書房<北>愛京堂<大田>三州堂、藤乃屋<荒川>昌榮堂<江東>吉田書籍部、ブックロード
 <品川>雄文堂<目黒>中川<足立>ブックスアオキ<三鷹>第九書房、たべもの村<武蔵野>いかりし<調布>神代、小松<小金井>かこや<府中>国府書店会、一二三書房<国分寺>吉野<国立>増田、増田富士見台店、リーウル三樹<立川>オリオン書房、オリオンウイレ、店、泰明堂、石井<小平>和申、明文堂、大島<清瀬>マルオカ、飯田、省文堂<町田>久美堂<日野>南友堂、ブックス伊藤<東久留米>黒目書房
 神奈川県
 <横浜>有隣堂、栄松堂、ともだちみどり書房、有文堂、博修堂、水野、蓬萊堂、和田書房、村上<川崎>北野、早川、大塚、大塚読売ランド店、ホーエイ川崎<相模原>中村書房<鎌倉>大船書房<相模大野>相模書房<藤沢>東松堂<茅ヶ崎>文泉堂<小田原>伊勢治<平塚>サクラ<大和>中央<厚木>内田屋書房、<大和>いずみ
 静岡県
 <静岡>吉見、江崎外商部<磐田>あつみ<浜北>谷島屋<浜松>遠州堂、稲勝、湖南<沼津>マルサン、ランケイ社<清水>戸田<下田>村上<焼津>谷島屋<富士宮>小長谷<榛原郡>大石
 愛知県
 <一宮>文正堂、資然堂<名古屋>ウニタ、谷口正文館、白樺書房西店、白揚、竹中、中目書房、きたやま、丸山、ちくさ正文館、兼松、丸善、前田、ボランの広場、文進堂<江南>青雲堂<豊橋>文教、耕文堂<豊田>鈴彦<岡崎>カマクラ文庫<尾張旭>活人書房<瀬戸>三浦<西尾>黒部<愛知郡>日進書房<刈谷>酒井日進堂
 岐阜県
 <岐阜>文光堂<恵那>松林堂
 新潟県
 <新潟>栗山、万松堂、文信堂<上越>玉川、春陽館<新津>英進堂<長岡>寛張<栃尾>稲豊

富山県
 <富山>清明堂<高岡>清文堂
 <氷見>布瀬善<新湊>川辺
 長野県
 <岡谷>笠原<松本>新光堂、りょうん堂<長野>平安堂<上田>英文堂<飯田>平安堂
 <大町>塩原<上水内郡>桃屋
 石川県
 <金沢>うつのみやセールセンター、北国書林<鹿島郡>千間
 福井県
 <福井>ひまわり、品川
 奈良県
 <天理>海老山<奈良>広谷屋
 南都書林、たけだ
 三重県
 <松阪>中村<伊勢>古川<桑名>潮<上野>山本芳文堂
 大阪府
 <大阪>紀伊國屋、ユーゴー、樋口書籍、米原十六堂、藤川、学の友、西坂、呼文堂、もり、富士原文信堂、飯田集英館、川口文堂、坂口、篠田、丸山、青泉社<東大阪>ヒバリヤ<和泉>かつらぎ<豊中>昌文堂、豊文堂、センリ、豊中文書館<高槻>コーベブックス西武、タイハン書房<池田>春江<岸和田>斉藤<堺>ワールド、西村、清城堂、三教堂、登米屋、みいけ、カツヤ書房<茨木>サノノ<寝屋川>中村興文堂、寝屋川団地<八尾>西川<寝屋川>ツルヤ<松原>川口文光堂<守口>ヤシマ
 京都府
 <京都>松香堂、オデッサ書房、中島書院、洛陽、ジュンク堂<宇治>大久保、京都書院、井田<長岡京>恵文社神足店<亀岡>亀岡書房<舞鶴>舞鶴堂
 和歌山県
 <和歌山>宇治、有馬<新宮>荒尾成文堂
 兵庫県
 <神戸>流泉書房、日進堂、文進堂、明文館、漢口堂、中山書房<西宮>イカロス書房<尼崎>宣文堂、塚新西武B.C.<姫路>姫路九善、浅野八代<明石>学友書房<豊岡>ひさや<三木>三木ブックスサンテラス<加古川>ユーカリ<多紀郡>小山<粟粟郡>安井
 岡山県
 <笠岡>池田成章堂<井原>金森<岡山>福島かねつき堂、九善岡山<倉敷>ニビスヤ
 広島県

<呉>九嶺書房
 鳥取県
 <米子>今井MC本店<鳥取>富士
 島根県
 <出雲>武田<鹿足郡>金山文具店<松江>ブックス文化の友、園山<浜田>吉田屋
 広島県
 <広島>やまびこ、いづみ、紀伊國屋、ニシヤ、熱乎堂<尾道>花本、啓文社<福山>岡田山口県
 <山口>文栄堂
 香川県
 <高松>みやたけ
 愛媛県
 <川之江>トウヤおおくぼ<松山>丸三<北条>片山
 徳島県
 <徳島>雄徳堂徳野、森住九善
 高知県
 <高知>金高堂
 福岡県
 <北九州>白石、黒崎、ひとつりわB.C.<福岡>金文堂、横文館、金進堂、尾崎堂、高橋、金栄堂<筑紫野>丸山スコレ店<直方>みやはら<田川>石川<久留米>菊竹金文堂
 江頭<筑後>吉田<大川>山口
 <粕屋郡>尾崎堂<八女>桐明
 佐賀県
 <唐津>まつら<佐賀>金華堂
 長崎県
 <長崎>好文堂、童話館<松浦>丸屋<佐世保>金明堂
 熊本県
 <熊本>教育文化用品KK、三章文庫<本渡>鶴田玉文堂
 宮崎県
 <宮崎>大山成文館、岩印
 大分県
 <大分>開書堂、今村、高校用品販売、福田<日田>文化書房
 鹿児島県
 <志布志>スズキ<鹿児島>加世田
 沖縄県
 <那覇>朝野書房
 大学生協
 帯広畜産、岩手、山形、福島、新潟、群馬、宇都宮、茨城、埼玉、芝浦、日本女子、東京、東京家政、成蹊、東京工、お茶の水女子、桜美林、横浜国立、山梨、静岡、大妻女子、金沢、富山、和歌山、大阪市立、立命館、神戸、宮崎、高知、香川、鳴門教育、愛媛、琉球